

ハイスクール・フリー ト～海の防人達～

特殊作戦群

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海上自衛隊新鋭イージス護衛艦にしてまや型二番艦「はぐろ」はミサイル迎撃訓練の演習海域に向かっていたが一面を眩い閃光に包まれ、艦長如月優也一等海佐ら乗組員200名は気が付けば全く別次元の世界へ放り出されてしまった。最強の盾の異名を誇るイージス艦がこの世界で果たす役割とは……

目次

第1話	〜 帰るべき場所のない海軍	1
第2話	〜 司令長官来訪	7
第3話	〜 この世界の情報	11
第4話	〜 伝説と呼ばれた人	17
第5話	〜 退院・居候開始	22
第6話	〜 集う仲間達	37
第7話	〜 互の語らい	47
第8話	〜 航海準備	53
第9話	〜 出航と対潜戦闘	60
第10話	〜 疑心暗鬼	66
第11話	〜 ミサイル巡洋艦はぐるろVS潜水艦	66
第12話	〜 ミサイル巡洋艦はぐるろVS無人機	80
第13話	〜 帰航と調査	87
第14話	〜 つかの間の休息	91
第15話	〜 個人として	98
第16話	〜 デイナー	103
第17話	〜 SPECIAL FORCEの必要性	107
第18話	〜 部隊葬と特殊部隊概要	114
第19話	〜 面会と無能上層部	122
第20話	〜 無能を納得させる最良のプラ	122

第21話	海上安全整備局上層部	129
第22話	繋がり	140
第23話	デート	146
第24話	死地へ	156
第25話	恋煩い	161
第26話	戦果と帰還	166
第27話	帰還と昇格	171
第28話	次世代を担う防人達との邂逅	176
第29話	視察&リラックスする二人	186

第30話	第1へり空母機動艦隊	194
第31話	艦隊を狙う牙	198
第32話	すり減る心	213
第33話	新たな出会い	221
第34話	嫉妬	225
第35話	日本商船タンカー襲撃事件	232
第36話	情報交換	240
第37話	アメリカの要請	245
第38話	守るべき大切な存在	250
第39話	状況悪化、商船撃沈	

第40話	〜デフコン2	〜	261
第41話	〜緊迫の海域	〜	268
第42話	〜報復?!	〜	274
第43話	〜日本海軍VSアメリカ海軍	1	279
第44話	〜日本海軍VSアメリカ海軍	2	289
第45話	〜日本海軍VSアメリカ海軍	3	297
第46話	〜アメリカ政府動く	〜	306
第47話	〜もたらされる報	〜	310
第48話	〜決着	〜	315
第49話	〜アメリカ合衆国大統領来日	〜	321
第50話	〜動き出す未来	〜	327
第51話	〜変わる関係	〜	334
第52話	〜査察	〜	342
第53話	〜受験戦争	〜	350
第54話	〜水上打撃艦隊	〜	360
第55話	〜多機能フリゲート艦FFM	〜	370
第56話	〜調査命令	〜	379
第57話	〜情報交換	〜	387
第58話	〜調査中止と別命派遣	〜	392

第59話 海軍とブルーマーメイド

398

第1話く帰るべき場所のない海軍く

「う．．．う．．．」

目が覚める．．．そこは病室だった。

「あれ．．．俺達はたしか演習海域に向かつていたはず．．．」

それと同時に蘇る記憶、眩い閃光と同時に気を失い．．．一人で考えていると病室に三人の男女が入ってくる。内二人は見覚えがある顔だった。三人は椅子に座り女性
が

「初めまして如月優也さん、いえ如月一佐とお呼びしたほうが馴染みでしょうか？」

「．．．」

その問を俺は無視し

「久しいな、如月まさかお前が艦長になっているとは思わなかった。」

「．．．」

答えないでいると

「全く、俺だ角松洋介元二佐現中佐だ覚えてるだろ？」

そこまで言われ

「はい、先輩の顔を見誤る訳ありません」

答え

「とにかく無事で良かった如月一佐」

角松中佐の横に居るのは梅津三郎一佐た多分大佐だろう。

「話を戻すが、太平洋上で君らを発見した時全員が気を失っていてね緊急搬送した次第だ」

梅津大佐に説明を受け

「すみませんが「はぐろ」は今何処に？」

俺が聞くと

「その事で今日伺いました。」

角松中佐や梅津大佐の横にいる女性が言い

「あんたは？」

俺が聞くと

「初めまして、宗谷真霜です。ブルーマーメイド安全監督室情報調査室所属で、階級は一等保安監督官です。」

言われるが

「ブルーマーメイド？、安全監督室情報調査室？聞いた事ないな・・・あんた俺をおちよ

くつてるのか?」

俺は言うよ

「だからいつたじやないですか、宗谷保安監督官。俺達の世界からきた人間にそんな事を言っても理解できるわけないと」

角松中佐が言い

「すまないな、簡単に言えば私達の世界での海上保安庁と思えばいい」

梅津大佐が説明してくれ

「如月一佐、あなた方が乗艦していたイージス艦「はぐろ」は今現在国防海軍とブルーマーメイドの両管轄に置かれています、如月一佐今貴方の立ち位置は微妙な位置です。お恥ずかしい話ですが我々ブルーマーメイドの上層部が強引に権利を主張しようとしています。」

「なるほど、あなたの上層部が俺達を亡き者にしてでもイージス艦の情報が欲しいと?」

俺は言い

「.....」

宗谷と名乗った女性性は沈黙する。

「沈黙は肯定か.....」

俺は言い

「部下達は」

聞くと

「全員がこの病院に入院している心配ない。海軍の人間が常に警備についている」

梅津大佐が説明してくれる。

「それを聞いて安心しました。」

答えた。沈黙していた宗谷さんは

「ですが私達現場の人間はそれをよしとしません。長い事海軍の方々と一緒に仕事をしてきました。ですので如月一佐にもご協力願いたいのです。」

宗谷さんは言い

「私で出来る事なんて些細なことだと思えますし、それに話を伺っているとどうやら我々は別世界に飛ばされたようにも聞こえます。」

答えると

「話が早くて助かります、此処にいらつしやる梅津海軍大佐や角松海軍中佐がちょうどあなた方と同じことを経験なさっています。」

話を聞き

「救助して頂い事には感謝しますが、我々200名の立ち位置は？この世界での日本において我々は何もない、帰属すべき原隊もそして階級も」

「そこで我々の出番だ。」

梅津大佐は言い

「如月、君達クルーに我々は選択しを二つ提示する。どちらを選ぶも君達次第だ。」

「二つ 私達同様に過去を捨てこの世界で「国防海軍人」として生きていく。これについては防衛省や既に上の首相官邸に君達の事が上がった時点で準備している。君達が了承すれば新しい戸籍と帰属すべき原隊そして階級と全て政府が準備している。我々同様にこの世界で生きて行ける。」

「二つ 君達が拒否した場合はこんな事はしたくないが、傷が癒えたら君達には退去して頂くことになる。無論艦はちゃんとそちらに返すし補給も行う。まあせめてもの情けだな」

梅津大佐が説明した。

「つまり、俺達がいたあの世界に戻る事は不可能と・・・」

「そうだ、「平成」に戻る事はかなわんだろう」

角松中佐が頷き

「如月一佐、私も梅津大佐の仰った通り帰還できる可能性0に近いとも言える現状ですどうか第一の案を飲んで下さい。私達もあなたの方と戦いたくはありません。」

宗谷さんは言い

「宗谷さん、それに梅津大佐に角松中佐わざわざありがとうございます。ですがこれは私の一存では決めかねます。部下達と話しあわねばいけません。」

「いい返事を期待しているよ、如月一佐」

そう言い席を立つ、角松中佐と梅津大佐そして宗谷さん残された俺は一人

「まいったな」

ぼやくことしかできなかつた。

第2話く司令長官来訪く

午前中に俺達は病院の会議室を借受説明し、皆の意見を聞いた

「今示した案以外はない。全てを捨て、此処で生きるかそれとも宛のない海を彷徨うか」

俺は言い

「強制はしない、皆意見を言ってくれ」

俺は言い

「私はどこまでも艦長にお供するまでです。今まで共に苦楽を共にしてきましたし」

副長高本翼二等海佐は言い

「俺も同じだ、辛いことも楽しいことも全部一緒だった。艦長、俺も地獄のそこまでもお供するぜ」

砲雷長加藤貴明三等海佐が頷き

「水癖えぞ、俺達は生きるも一緒死ぬ時も一緒だろ。艦長」

航海長山田祐介三等海佐も言ってくれた。

「そのほか皆も階級など関係なく言ってくれて構わない。」

俺は皆を見回すが皆が

「これも何かの縁、艦長らと共に運命を共にします」

部下達が言ってくれた時泣きそうになった。

「俺は……この世界で生きる覚悟を持つと思うっている。本当にいいんだな」

「「ハイッ」」

皆が頷いてくれた。これでクルーの皆や「はぐろ」を守る事ができる。皆を見回し俺は思った。その後、各々の病室に戻ると

「如月一佐殿客人が見えております」

警備している海軍の方に言われ

「客人？」

病室に戻ると

「待たせてもらっていたよ」

物腰の優しそうな方がいて

「どうぞ」

椅子を出し

「すまんね、病人なのに」

言われ

「いえ」

答えた。それに對し

「名乗つていなかつたな、私は日本国防海軍第一艦隊司令長官大石蔵良だ階級は海軍中將」

それを聞き慌てて立ち上がり

「失礼致しました、閣下」

敬礼をするも脇腹に痛みが走り

「うぐう・・・」

大石司令は

「無理をせんでくれ、如月一佐君達と同じ居遇の梅津大佐や角松中佐から話は伺つていゝる。優秀な海軍士官とも」

言われ

「恐縮です閣下」

答えた。

「覚悟は決まつたようだね、・・・いや盗み聞きするつもりはなかつたのだがこの世界で生きてくと」

大石司令は言い

「はい、全てを捨てこの世界で海軍人として生きていくと自らも悩みましたが部下達と

話全てを決めました。」

そして

「そうか、それと貴官らの艦だがイージス護衛艦と聞いていたが正式に編入後は艦種変更となるだろうあるべき姿に「イージスミサイル巡洋艦」とな」

大石司令は言い

「そうですか……」

俺は答えた。「自衛官」ではなく「軍人」としてこれから先を生きていく。

「ふむ、覚悟が固まった事はいい事だ。この分ならば艦艇も正式に海軍所属になるだろうから宗谷君が言うブルーマーメイド上層部も口出しはできんだろう。我々としてももっとうまくやりたいものなのだがな」

大石司令は苦笑し

「世知辛いですね」

一言言った。

第3話くこの世界の情報く

あの後、正式に自分達の進退を梅津大佐に伝え、入院している内から身分が「自衛官」ではなく「海軍人」に俺達は変わった。政府から新たに与えられた戸籍と住所そして帰属すべき原隊そして階級といたれりつくせりだった。そして海軍とブルーマーメイド上層部で揉めていたイージス艦はぐるの帰属も正式に海軍所属と決まり所属・乗員も大石閣下が気を使ってくれたのか乗組員はそのまま所属も大石閣下指揮の第1艦隊に編入されることになった。そして俺達は

「ふむふむ・・・歴史がてんで違うな、第一次世界大戦に類似した戦いはあっても、第二次世界大戦も存在しないまさにパラレルワールドとは言ったものだな」

俺は病院の図書室に缶詰になっていた。因みに正式に軍属に決まった時点で一般病院から軍病院に転院したのだ。

「しかも国土の一部が水没か・・・これが資源採掘のしわ寄せになったのか・・・」
教本を見て言い

「そしてアメリカと開戦直前まで行ったのがこのオイル関連な・・・一部は同じだな」
しかし、思った事があったそれは世界各国とも陸軍・海軍そしてブルーマーメイドな

る軍と準軍事組織はあるが航空技術が著しく発展が遅れ空軍が存在しない航空戦力の皆無。そして陸軍戦力の縮小である事そしてミサイルの理論や航空機の理論がなかった事しかし、日本では既に海軍はヘリの運用を開始している。ブルーマーメイドにはまだ余裕がないのか配備はおろか人員の教育も始まっていない。

そんな事を調べていると

「如月大佐、また此処ですか？」

振り返ると、ブルーマーメイドの制服を来た宗谷さんとその部下の方々だった

「すいません、今戻ります」

俺は病室に戻り

「すみません、退院前でもこの世界の情報を調べないと思って」

説明し

「それで今日は？」

俺が言うと

「ええ、海軍帰属になったイージス巡洋艦はぐろの件だけ海軍からの情報で解析した所、ハンガーに航空機を積んでることだったけれども。」

宗谷さんは資料を置き

「シーホークの事ですか？正式名SH-60K、分類は中型ヘリに分類され任務用途は

対潜警戒並びに汎用ですかね。場合によっては対潜爆雷を投下したり対艦ミサイルを発射したりします。」

説明し

「梅津大佐も同じ事を仰っていたけれど空を飛ぶのよね」

宗谷さんは言い

「ええ、そうですねはぐろの内部には二機搭載しているはずですよ」

答えた。

「これが空を飛ぶ……すごいわね……」

宗谷さんは言い

「ブルーマーメイドでも運用できれいいのようですが、パイロットの育成には時間がかかります。一応私もライセンスは持っていますので飛ばす事はできますよ」

そう言うとうと

「今度乗せてて頂く事はできるかしら」

宗谷さんが言い

「ずるいです」

「ええ」

部下の方々も異議を唱える。

「えっと・・・」

思っている

「おつとごめんなさい如月大佐、紹介するわこの二人は私の部下で」

「福内典子です、初めまして如月大佐」

「平賀知子ですよろしくお願ひ致します」

お二人からも歴史の事を伺ったりする中

「そういえば、如月大佐は退院後は何処に海軍の士官官舎ですか？」

宗谷さんが唐突に聞き

「それはまだ何も、大石閣下からも何も通達がないもので」

答え

「そうですか」

宗谷さんは言い

「先ほどのヘリの件ですがなんとかなると思います。三人くらいでしたら事実実際に乗って体験して頂く事は大事ですしブルーマーメイドへの配備など検討するのならば実績も多少は必要になるでしょうけれども」

俺は答えた。その後三人は面会の都合上病室から出ていった。

宗谷真霜 side

「えーつと・・・如月優也　年齢29歳　階級海軍大佐　生年月日19XX年10月24日」

資料を見ると

「宗谷保安監督官、なんの資料見てるのですか」

福内が言い

「え、如月大佐のファイル」

答えると

「ちよ・・・それまずいんじや、海軍の最高機密の一つじや・・・」

福内が言い

「まずいですよ、本当に最高機密レベルのファイルを見てるなんて・・・」

平賀も言っただけれど

「ふう、ネタをばらすと大石海軍司令長官が特別に見せてくれたのよ貴女達も共犯よ他言しないようにね」

私は言った。

宗谷真霜 side アウト

その頃

「あ、大石閣下ですかいえいえ此度の配慮感謝しています。ええ艦の所属・に乗員の配置

も・・・え・・・俺の分の空気がない・・・士官官舎の空気がない?!・・・」

一言で地獄に叩き落とされるが

「心配しないでくれ大佐、とある人にしばらく居候させて欲しいと頼んだから大丈夫だ
明日にでもそちらに向いて下さるそうだ。」

そういつたきり大石司令長官からの電話は切れてしまった・・・

第4話く伝説と呼ばれた人く

俺の病室で海軍に支給された軍服に袖をとおした仲間達が集った

「では、如月い．．．いえ如月大佐、またはぐろの艦橋・CICで」

副長の高本翼中佐は軽く敬礼し、その他砲雷長・航海長共に敬礼する

「ああ、そうだな。また艦上で会おう」

俺も返礼する。そうして仲間達が出て行き

「はあくくあ、どうしよう大石司令長官は大丈夫だで行っていたけれどもいきなりホームレスはまづいなあ．．．」

頭を抱えたため息を付いていると

コンコン

ドアをノックする音が聞こえ

「どうぞで」

声をかけると

「失礼します。」

見た目40代前後の女性と宗谷さんと黒いマントのようなものを羽織った女性と計

三人

「如月優也海軍大佐でしょうか？」

「どうやら三人とも宗谷さんと同様ブルーマーメイドの関係者のようで

「はい、お手元の資料の通りです。そちらは？」

聞き返すと

「申し遅れました、私宗谷真雪と申します。海軍の大石司令長官からどうか一つ頼みたいと言われてどのような方かと思いい本日面会にきた次第です。」

丁寧と言われ

「ご丁寧ありがとうございます。知識のみですが伝説とも言える方を前にすると身震いしますね」

俺は答えた。15年前、領海内を荒らし回った武装船団を単艦で殲滅したことから「来島の巴御前」と呼ばれ現役を退いた今も伝説的人物と言われている。

「大佐って言うから年の言った人かとおもってたけどもあんだ年いくつよ」

真雪さんの後ろの黒いマントを着た方に聞かれ

「29歳です」

答え

「29歳?!」

驚いた風に言われ

「真冬、失礼でしょ」

真雪さんが軽く叱るが

「よく言われましたよ、あつちの世界でも。年もそこそこの若造が最年少一佐だと？とね」

答え

「真冬ったら・・・妹がごめんなさい如月大佐」

真霜さんも謝る。

「氣に為さらないで下さい」

答え

「如月さん、大石司令長官よりひとつよろしく頼むと言われたのが海軍士官官舎が空きが出るまで貴方を面倒をよろしくお願いしたいと」

真雪さんは言われるが

「ですが大丈夫なのですか？」

俺は恐る恐る聞くと

「如月さん私達の家族構成は 母真雪そして娘にあたる私達長女真霜そしてさつき失礼な事を言った次女真冬最後に三女真白の4人なので部屋はいっぱいあるから問題はな

いわ」

真霜さんが説明してくれるが

「いやそれまじいような気が・・・女性4人の所にいきなり男が・・・と言うのも」

俺は難色を示したが

「硬いこと気にしすぎだ大佐さん」

真冬さんは豪快に笑い

「あ・・・はははは」

俺もひきつるように笑い

「それに男手が必要な事とかもあるかもしれないですし」

真霜さんも言い

「そういう事です、というよりも選択肢はないに等しいのですから諦めて下さいな」

（ふふ、大石司令長官も粋な計らいしてくれて真霜か真冬あたりとくつついいてくれれば肩の荷が一つ下りるわ・・・）

真雪さんは内心思いつつも言い

「ハハハはは・・・まじか・・・」

居場所がないよりはマシだろうと俺も思い

「いきなりですみませんがご厄介になります、よろしくお願い致します。」

頭を下げる。なんとか退院後の仮住まいを確保し退院を待つのみとなった。
軍病院廊下にて

「かなり好感のもてそうな人ね、」

真雪は言い

「だけど、なんていうか軟弱にも見えるようなきもするけどさあ」

真冬が言ったが

「いいえ、あの大佐は既に実戦を経験しているわ、目を見れば分かる。迷いのない目を見ればわかるわ・・・あの目は「人を殺した目よ」」

真雪は言い

「母さんもそう思った？、私も同じ意見」

真霜も同調した。事実、後に尖閣紛争の事を優也が語るの、また先の話・・・

第5話～退院・居候開始～

「……………」

病室も整理し終わり、支給された海軍の軍服に袖を通す。自衛隊とほぼほぼ同じであり違いも見受けられない。

「大佐……ね……」

軍服を着て荷物をまとめ、制帽を持ち待っていると

「コンコン」

ノック音が聞こえ

「どうぞで」

言い

「失礼しま……す」

俺の制服姿に見とれている真霜さんがいた。

「何処か変ですか？」

尋ねると

「いえ、とてもよく似合っています。」

真霜さんは言つてくれ

「お荷物をお持ちしましようか？」

俺のバックを持つとうとするが

「女性に荷物を持たせて楽するなんてそんなの海軍士官の礼儀に反するよ、自分で持つ」
そう言つてバックを持つ。病院の方々にお礼を言い真霜さんの車のトランクに荷物をほうりこみ

「助手席で寝ていても構いませんよ？如月大佐」

彼女は言つたが

「いや、いい外の風景をみたい此処数週間病院に缶詰で気が狂いそうだった。」

答え

「そつちの上層部はまだ発狂中かな？」

ジョークを言うと

「ええ、そんなところです。今だから言えますけどあの時、あなた方200名が不慮の事故で死んだ事にでもすれば・・・なんて言う案があつたとか」

トーンを落として真霜さんは言つたが

「呆れても物も言えん、同じ海を護る者同士がなにかんがえてるんだか・・・」

俺は言うと

「私も同感です、大佐の仰る通り同じ海を護る者同士なのに上は海軍を敵視する。装備も確かに海軍は優れているイージス駆逐艦・巡洋艦やヘリといった航空機まで揃えている。潜水艦も私達よりも遥かに高性能。私達はその補助機関にすぎないのかもしれない。それでもこの仕事に誇りを持つてる、如月大佐はどうですか？」

尋ねられ

「そうだね、各々が袖の印に誇りと覚悟を持つことは大事だね。俺が梅津大佐や角松中佐らが来た世界と同じ所の人間だと言うのは知ってるよね」

聞き

「はい、身元の確認を行った際に最後の不明だった貴方を確認してくれたのは角松中佐でしたから。」

真霜さんは答え

「自分の世界ではこの世界で海軍にあたる海上自衛隊もそしてブルーマーメイドにあたる海上保安庁も共に手を取って日本の海を守ってきた。なぜそれがこの世界ではできないのか不思議だがな」

答え

「君達はある意味では幸せなのかもしれないな・・・大規模な実戦を経験した事がないのだから・・・」

俺は窓から外を見て言った。

「実戦……」

真霜さんはい

そうこうしているうちに真霜さん達の家につき

「また後でゆつくり話せますか？」

聞かれ

「ええ」

一言言った。

「真霜姉さんお帰りなさい……この人誰ですか？」

中学生？とも高校生とも言えないような年齢の女の子に言われ

「真白、前話したでしょ？お母さんの知り合いで訳あつてしばらく家で居候することになった海軍の士官さんよ」

真霜さんが説明してくれ

「初めまして、如月優也ですよろしくね」

努めて笑顔で話しかける。

「よ、よろしく」

真霜さんの妹真白さんと家の中に入り、一室に案内してもらおう。

「えっと、お母さんから言われてる部屋よ。好きに使っていいって、荷解きが終わりましたら声をかけて下さい、」

真霜さんは言ってしまった。とりあえず俺は自分の荷物を解きこつちに送られていた艦内にあつた私物も一緒に整理し

「本当にもう帰れないんだな・・・平成に・・・」

俺は呟き荷解きを終えた頃

「ボンツ」

音が聞こえ

「なんだ?!」

外に出ると

「あわわわ」

慌ててる真白さんがいた

「何かあつたの?!」

聞くと

「えっと・・・真霜姉さんが・・・台所で・・・」

それを聞いてなんとなく察した。プライベート用の私服に着替え

キッチンに二人で向かうと

「どうして料理ってこんなに難しいのかしらね」

鍋を黒焦げにしている真霜さんがいた

「oh……sit」

俺は言っつてしま

「姉さん……お願いですからいい加減……はあ……」

真白さんがため息をついていた。台所に入り

「何を作ろうとしていたんですか？」

そこに落ちていている料理の教本を拾い

「……カレー……なるほどな」

大体を理解し

「真霜さん交代」

台所の後片付けを行い、冷蔵庫を確認し

「よし……はぐろ特性カレー作れそうだな」

俺は素早くカレーに必要な食材の確認を行い素早く野菜の皮をむき、肉を切りなどこ
なしていく。そして完成し

「完成……」

そう言つてると

「えつと、如月さんは給仕長か何かですか？」

真白さんに言われ

「とんでもない、ただのイージス巡洋艦の艦長だよ」

答えると

「！か・・・艦長・・・という事は・・・」

「あはははは・・・一応海軍大佐かな階級は」

答え

「すごいです・・・失礼ですけどもご年齢は」

真白さんにも聞かれ

「はは、29歳だよ」

答える

「相当なエリート士官つてことなんじゃ・・・」

言われるも

「何処にでも転がってる普通の人間だよ」

俺は言った。自分をエリートと思つた事はない。それよりも

「真霜さん、失礼ですが料理の勉強したほうがいいのでは・・・」

俺は言うとうと

「そうします・・・」

しゅんとうなだれ答えた。その後も付け合せのサラダやスープなどを作り夕食の準備は完了となった。

「如月さんごめんなさい、姉さんがこんなばつかりに・・・」

真白さんは申し訳なさそうに言ったが

「働かざる者食うべからず、でしょ。俺居候の身だし」

と答えた。夕食の支度を終え、軽く打ち解けた真白さんの勉強を真霜さんと見てあげたりしていると

「ただいま」

「ただいま」

どうやらお二人共戻ってきたようだ。だが

「あれ、美味しそうな匂いが・・・」

真冬さんがいい

「そうねえ、何か作ったの？」

俺達を見て真雪さんが言い、そこで

「えっと、真霜姉さんが料理しようとして・・・まあ・・・何時も通りで、如月さんが代

わりにはぐる特性カレーとサラダ、スープと一式」

真白さんが言い

「だははハハハハ、真霜姉また鍋吹っ飛ばしたのかよウケるくくくく」

真冬さんが豪快に爆笑し

「はあー……真霜、あなたねえ……」

真雪さんが頭を抱えている。そんな中、両名ともオードブルやお寿司など結構買ってきていた。夕食の支度が整い

「では、如月海軍大佐の歓迎会を始めます!!」

真冬さんがノリノリに言い

「あははは……はあ」

苦笑しつつ俺はグラスを掲げ和やかな時間が過ぎていき

「このカレー美味しい」

真冬さんはすごい勢いでカレーを食べ

「確かに美味しいわね」

真雪さんも絶賛

「すごく美味しい……故に悔しい……」

真霜さんも言っている。そして夕食後、真白さんが勉強為に自室に引っ込んだのを確

認し居間のテーブルを俺を含み四人で囲んでいる。

「さて、如月さん。いきなり迷惑かけたみたいでごめんなさい」

真雪さんが言い

「先程も真白さんに言いましたが「働かざる者食うべからず」ですからタダ飯を食べるなんて嫌ですし」

答え

「そう言ってくれて助かるわ」

真雪さんは言い

「間違っていたならごめんなさい。如月大佐、貴方の軍歴で実戦の経験はありますかしら」

真雪さんは言い

「そうですね、どちらの実戦経験でしょうか？海軍特殊作戦要員としての実戦経験なのか艦艇の艦長になってからの実戦経験なのかによりますが、まあ艦艇勤務になってからの実戦出動すなわち「防衛出動」の経験ならば二回ほど」

完結に答え

「詳しく聞いても？」

真霜さんが横から言い

「ええ、一度目は韓国との戦闘でしたね、対馬に侵攻した韓国軍を殲滅すべく艦隊は出動

しました。私の艦の戦果としては敵駆逐艦4・潜水艦2をそれぞれハーブーン対艦ミサイル・アスロックで撃沈、陸上部隊の上陸時の艦砲射撃による上陸支援ですね」

説明すると

「ハーブーン対艦ミサイル?、アスロック?」

真霜さんと真冬さんが首をかしげる中

「私も存じています、先のイージス艦「みらい」を保護した際の装備に既存の技術に当てはまらない装備があつたのを覚えています。」

真雪さんは言い

「はい、ハーブーンはさつきも言つたように艦船を攻撃するための対艦ミサイルです。そしてアスロックは対潜戦闘用いわば艦対潜用の攻撃手段です。」

説明し

「イージス艦「みらい」の技術は海軍を飛躍的に能力向上を図ることに一役買った。そして今度は「みらい」を上回る技術を詰め込んだ「イージス艦」が現れた。」

真雪さんは語り、そして俺は話を続ける。

「失礼ながらあえて言わせて頂ければ、基本技術は対して変わっておりません。変わっているのはイージスシステムがバージョンアップしている事とN I F C—C A F T S (海軍統合火器管制—対空)などを搭載している事搭載ミサイルの種類に一部アップグ

リードがなされている事ぐらいです私が知っている範囲ですが」

答える。そして

「二度目が尖閣諸島紛争、対中国でしたがこれは酷かった・・・この世界において尖閣諸島があるか否かは別としてその領有権を巡り日中両軍は衝突しました。我が艦も艦隊の一員として参加、中国は物量が多くそして人の命を紙切れ同然に扱う国ですからこっちの攻撃を躊躇うのを読んでいたようですが、それでも先鋒を担ったのは我々「はぐろ」でした。敵駆逐艦2隻を対艦ミサイルで撃沈、敵潜に至っては味方潜水艦と協力しながらアスロックで海の底に2隻を沈めました。最終的に日本が勝ちましたがギリギリの勝利と言った所ですかね。」

コップのジュースを飲みつつ言い終えると

「真霜、真冬、実戦をそれも大規模な戦闘を二度も経験した艦長を前にして実際に話を聞いてどう思う？」

「なんとというか・・・そのどれくらいの間人を殺したとか考えたことは・・・」

真冬さんがおずおずと手を挙げるが

「殺るか、殺られるかの刹那の中でそんな事は考えた事がないな。強いて言うならば最初の戦闘は絶対に忘れられない、これは言える」

俺は答えた。近代戦闘では最初に撃ったモン勝ち。いわいるアウトレンジシュート

が基本であり、イージス艦も被弾しない事を前提として作られているため一発でも貰えばダメコン次第であるが最悪は沈没・撃沈となってしまう。

「今まで一番辛かった事、堪えた事は・・・」

真霜さんは言い

「ええ、それは艦か乗組員かのどちらかしか取れない状況になった時ですね、真霜さん、真冬さん貴女方ならばどうします?」

逆に聞くと

「そりゃ、総員退艦命令発令だろ。こう見えても私も現役の艦長だ迷いはしない」

「私には選べないわね・・・如月大佐が言っているのは恐らく戦闘中と言うことでしょう」

二人は言い

「二人共甘いですね、結論から言えば私は艦を取った。非常水密扉封鎖命令を出し一区画と別の区画を予防封鎖その結果7名の乗組員が殉職しましたが艦の沈没は避ける事ができ戦闘を継続できました。戦闘能力の喪失を避けるのが戦闘中は優先すべき事と私は心得ています。いくら周りが私を人でなしと批判しても」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

三人とも絶句していた。無理もないだろう。艦長が乗員を見殺しにしたのだ。だが自分はこの判断を間違つたと思っていない。だから言った。

「今でもその部下達の名前は覚えています」

そう言い

「井上 裕二 三等海曹」

「岡田 紳助 海士長」

「大元 大輔 二等海曹」

「佐藤 信二 三等海曹」

「斎藤 康史 一等海曹」

「後藤 康之 海曹長」

「榎本 大河 二等海尉」

「私の命令で犠牲になった部下達です。ひと時も忘れた事はない。もう命日に墓参りに行く事もできなくなりましたが。」

俺は皮肉めいた事を言った。しかし

「そ・・・壮絶すぎだろ・・・艦を失うか乗組員を失うか・・・で艦を取るなんて」

真冬さんは言い

「貴女も実戦においてそれくらい追い詰められればわかりますよ、あの状況でイージス艦を失う事は・・・戦闘の雌雄を決定づけるあの戦闘では。」

答えた。

「すみません、極端な話をして」

謝るが

「いや、あんたの覚悟はすごい。同じ船乗りとして艦長としても」

真冬さんは言い

「究極の決断とも言えるわね。そして貴方は優しい、自らの命令で死なせた部下達の名を一人も忘れず覚えている。うちの上層部の連中に貴方の爪の垢を煎じて飲ませたいくらいだわ」

真霜さんもいった。その後お開きとなり順次お風呂に入り就寝した。自室の天井で

「なあ・・・みんな俺があつちに逝くまで待つててくれよ・・・非難はその時ちゃん聞いてやるからさあ」


独り言をつぶやいていたが

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

廊下で聞かれているとも知らずに。

第6話く集う仲間達く

宗谷家

「~~~~~~~~~~~~」

時計の音で目が覚め

「ふむ、時間通り近場をランニングでもしてくるか」

俺は着替え外にでる。地理感覚がまだ掴めないため近場をランニングし戻って着て
シャワーを借り着替え、朝食の準備を行う

「うーん・・・こんな感じかな」

味噌汁を作りそしてサラダ、ベーコンエッグ、ウィンナーとそれぞれ皿に盛り付けて
いると

「おはよう」

家長の真雪さんが起きてきた。

「おはようございます。今朝食の準備できますんで」

そう言うと

「全く・・・あの子達は、海軍大佐に朝食作らせるなんて何考えてるのやら・・・」

皮肉っぽく言ったが

「いえそれよりも冷蔵庫の中身勝手に使っちゃいましたが大丈夫ですか？」

お伺いを立てると

「いいのよ、真霜が吹っ飛ばすか、時たま真白がなにか簡単に作るくらいだからでもごめんなさいね、」

真雪さんが言っていると

「おはよー母さん」

「ういー母さん」

「おはよう」

三姉妹が起床し

「ほら三人とも早く顔を洗ってらっしゃい、シャキっとする」

そうしてテーブルに料理を置く。

「」「頂きます」「」

皆で言い

朝食を食べ始め

「美味しいー！」

真白さんが言ってくれ

「おかわりも十分にあるからね」

そう言い

「如月さん何時に起床したの？」

真霜さんは言い

「朝の四時ですかね、軽く近所をランニングして戻ってきてシャワーをお借りして着替えてすぐに朝食の支度をはじめました。元々ずっとやってきた週間なので体に染み付いて」

俺が答えると

「真霜姉や真冬姉よりも健康的な生活週間ですね、真霜姉は家事は昨日の通りですし真冬姉はお酒飲み始めるとキリがありませんし」

真白さんは言い

「ははははしようがないよ。人それぞれだからね。でも人の上に立つ人間という自覚は必要かな」

俺は答え

「うぐ・・・」

「あははは」

真冬さんと真霜さんは苦笑していた。そして朝食後、軍服に着替えさせて行きますかと

思っていた時に

「あ……俺の足がない……」

そう俺はこの世界の日本では車を持っていない、アホな事を思っていると

「ごめんくださいッ」

玄関から声が聞こえ

「何かしら？」

真霜さんと向かうと海軍の軍服を着た若者が三名

「如月優也海軍大佐殿はご在宅でしょうか？」

聞かれ

「如月は俺だけでも」

答えると一瞬三人とも驚いた顔をするも

「失礼致しましたッ」

三人とも綺麗な敬礼をし、俺も返礼する。

「大石蔵良司令長官閣下の指示でお迎えにありがとうございました、今後は大佐殿の送迎と警護を担当致します」

三人は言い、俺も荷物を持って行こうとした時

「待つて、貴方方本当に大石司令長官から寄越されたの？海軍の身分証を提示してもら

えるかしら」

真霜さんはさっきの顔から一気に仕事の顔つきになり三人の身分証を見る。そして

「ごめんなさいね、疑って」

そう言うと

「いいえ、同情します。上が無能ですと苦勞しますから」

三人は言い

「名乗りもせず失礼しました如月大佐。私ドライバーの坂崎良介海軍二等兵曹です。辺は言い同じくドライバー兼護衛の篠田晋也海軍三等兵曹です。最後ですが護衛として派遣されました佐藤陸海軍少尉です。よろしくお願い致します大佐」

三名から自己紹介を受け

「大石閣下から聴いてるとは思うけど改めて如月優也ですよろしく。」

俺は言い

「では行きましようか、クルーの方や司令長官がお待ちです」

そう言われ

「すみません、真霜さんでは行ってきます」

そう言い

「ええ、いつてらっしゃい」

見送られ俺は車に乗り出発した。車内では

「如月大佐、先程は失礼致しました。」

佐藤少尉は言い

「いや気にしてないよ」

答え

「データで拝見はしていたのですが、実際に会うとこれほど若い大佐はいないもので

言われ

「ははは、確かに」

俺は言い

「どこまで知ってる？」

聞くと

「全てと申しておきます。司令長官自ら我々を指名しそして大佐殿の全てを我々にお教えくださいました。ですが我々国防海軍の人間は新たな仲間200名と新鋭艦を謹んで迎えます。」

佐藤少尉はいった。その後、海軍の基地に付き車内でもらった身分証を提示し基地内へと入り

「まずは会議室ににと命令を受けています」

仲間と言われ

「ありがとう、兄弟」

そう言い会議室に行くと既に仲間達が集まっていた。

「これで全員揃ったな」

俺が言うと

「ああ、全員びつちりな」

副長高本翼二佐もとい中佐が言い俺も席に付く。そして待っていると大石司令長官始め将官の人間が入ってくる。俺は

「起立ッ、敬礼」

号令をかけ大石司令長官も敬礼し

「皆着席ッ」

大石司令長官は言い皆が座る。そして

「初めまして、第1艦隊司令長官の大石蔵良中将である。まず艦隊を代表し歓迎の挨拶をさせてもらう。諸君らの境遇は聞き及んでいる心配はいらないこの海軍内部において貴官らを後ろ指を指して言う者はいない、そして諸君ら200名の優秀な乗組員と最新鋭の艦迎え入れられた事を我々は歓迎する。」

そして副司令長官原元辰少将からも挨拶が終わると

「如月大佐、高本中佐ちよつといいかな」

大石司令長官と原副司令長官に呼ばれ

「なんででしょうか？」

俺と翼はお二人の元に向かい

「午後に造船所に行くのだがお二人にも来て欲しい」

言われ互いに顔を見合わせ

「了解しました」

そう言い午前中は各基地内の施設や立ち入り制限のある場所など一通り説明を受けた。そして午後大石閣下や原閣下らと造船所に向かい俺達が見たものは

「……………これは……………」

艀装完了間近のイージス艦だった。

「如月大佐、高本中佐これからはこの船がイージス巡洋艦はぐるになる。」

原少将が言い

「どういうことでしょうか？」

俺が言うと

「うむ、この船は元々みらいをベースに拡張型として作られていたがそこに貴官らが現れた、これはいわばはぐるのコピー艦と思って欲しい。」

大石閣下も言い

「はぐろのコピー艦」

俺達が言っている

「そうだ、装備ははぐろとほぼ同じだが、はぐろになかったECM対電子戦対抗手段
装備が入っている。乗組員らも安心して乗艦できるように防御性も底上げされている
貴官らの乗ってきた船のような紙装甲でもない。」

原少将は説明し

「海軍問わずブルーマーメイドにも採用されている3重の安全装備が採用されている。
簡単には沈没・撃沈されたりはしない。まあ大和の砲撃でも喰らえばわからんが」

大石司令は言い

「貴官らの最初の任務はこの巡洋艦はぐろの就役式に置いて就役並びに海軍旗を受け取
りそして出航だな。そしてまあ申し訳ないが出航と同時に防衛の空白ポイントにて不
審船警戒の任に付いて貰う事になる」

説明を受け

「了解しました、ですが司令質問よろしいでしょうか？」

俺は言い

「なんだ大佐」

大石司令は言い

「これが新造艦として就役し「はぐろ」として任につくのは理解しましたが、我々が乗船してきた「はぐろ」はどうなるのです。」

言う

「うむ、あの紙装甲で任につかせるのは非常に危険でなあの船はあのまま海軍の練習艦になる。だがはぐろの技術は大いに役に立つ。それは誇ってもいい事だ。」

説明を受け俺達は造船所を後にする。そして一日の業務を終え官舎住まいは官舎にそして俺は居候先に帰宅する。すると

「如月さん．．．助けて下さい．．．」

玄関で真白さんが駆け寄ってきた

「なにかあったのか?！」

俺は聞くと

「姉さんが．．．．．ぐすん」

それで察した．．．

「はあ．．．大変だな」

俺はそのまま家に入り夕食等の準備の手伝いを行った。

第7話く互の語りく

「私の部屋どう一杯？、色々と聞きたいこともあるし」

夕食後に真霜さんに誘われ

「お酒は結構です、……すみません癖で」

答え

「ノンアルコールは？」

尋ねられ

「それでなら」

答え真霜さんと部屋に向かう。互いに飲み始め

「そういえば、つい最近知ったのですが海上安全整備局の現在の事実上のトップが貴女と知りましたが」

俺は言い

「あははは、びっくりした？こんなズボラなトップで」

笑いながら言い

「いえ、そんな事はないです。自分も幹部官舎に住んでいた頃は休暇などは結構ずぼら

に過ぎませんでしたし・・・仕事は仕事、プライベートはプライベートでいいんじゃないですかね」

答え

「でも現場では互いに責任を負う立ち位置にいる。これは変わらないことですかね、ただ一巡洋艦の艦長と組織のトップでは責任の重さも違います」

ノンアルコールビールを煽り

「それは違わないとおもうけどな私は」

真霜さんも言いながらビールを煽る。

「でも貴女には借りがあると思っています。この世界で生きていけるようにクルーやはぐろを守ってくれた。」

そう言う

「私はあの上層部の責任の擦り付け合いやことなかれ主義が嫌だからあの連中に睨まれようとも正義は貫き通したいと思っています。でなければ現場に申し訳が立たないですから」

真霜さんは言い

「正義を貫く覚悟か・・・何を持って正義というのかそれは見方によつて変わりますがね」

眩くと

「変な事かしら」

真霜さんは言い

「いえ」

一言言い

「どうです？そちらは」

言うと

「一言で言えば退屈・・・かな毎日がほぼデスクワークだし」

真霜さんは言い

「そうですね、こっちは神経をすり減らし過ぎますけれどもね」

答えた。200名の部下を預かる責任と重圧は波半端なものではない。だが真霜さんの場合は組織の部下全てを統括する立ち位置にいる責任の重さも違う。

「堅っ苦しい話も此処まで、プライベートな事聞いても良いかしら？」

真霜さんは言い

「構いませんよ？」

俺は言い

「あちらでのご家族は？」

真霜さんは言い、若干躊躇ったが

「天涯孤独です。兄弟はいませんし、両親も軍務で殉職しました。私は施設育ちです。」

答えると

「……ごめんなさい……」

真霜さんは申し訳なさそうに言い

「暗い顔しないでくださいよ、せつかくの美人顔が台無しですよ」

おちよくり

「そんなジョークも言うのね」

真霜さんは言い話が重くなるので

「さあて、俺も早いトコ独身からおさらばしたいし休暇は部下達とどっかにしやれこまないとな」

更にビールを煽り

「如月さんはまだ独身で？」

真霜さんは驚いたような顔で言い

「ええ、元々両親が居なくていじめを受けた時もありましたけどそいつらの心ごとへし折ってやったりなんやかんやで出会いらしい出会いがないまま自衛官になったもので年齢〓彼女なし歴です」

頭をかきつつ言い

「こんな良物件ほおつとく女がいるなんて信じられない・・・」

真霜さんは言うが

「そうですか？年柄年中海の上そして家には帰れない、いい事と言えば給与が良い額をもらえること。自分の場合だと必要に迫られ覚えた家事スキル。後は社会的ステータスですかね」

皮肉たつぷりに言い

「それに何より、海軍の軍人の妻は中々務まるものじゃない。私の世界でもドロドロの不倫や離婚など先輩方を腐るほど見てきていますからね。」

言っていること

「趣味は何を？」

真霜さんは話を変え

「うーん、休暇とつてる時は音楽鑑賞・アウトドア全般・季節限定であればウィンタースキーですかね。よく副長と二人で行くもんです。何処かいい場所ありますか？」

聞き

「私もウィンタースキーなら冬によく行くわね、今年の冬あたり一緒にどう？中々家族でも時間が合う時なくてさ」

彼女はいい

「自分でよければお供致します」

答えた。その日の晩は二人である程度飲んだ後お開きとなった。

真霜 side

「家族がいらないなんて・・・気の毒な事聞いちやったな。この世界とあの人が居る世界は全くの別物、か。苦労して生きてきたのね・・・」

真霜は思い

「今度の休暇あたりどっかに誘ってリフレッシュしてもらおうかな。きっと気を貼りっぱなしだと思っし」

真霜は思っていた。

真霜 side アウト

部屋に戻り自分ひとり考えていた

「この世界で俺は本当に一人になっちまったな・・・部下達がいるとはいえ」

孤立無援とはこの事と実感していた。

第8話〈航海準備〉

「朝から上機嫌ですね」

いつも通り朝食を準備していると真雪さんがいい

「ええ、艦の就役もほぼ間近海上での生活に戻ってくると思うとやはり」

そう思っていると

「そういえばこの前真霜と部屋で飲んでいたようですけども何を話して？」

聞かれ

「あ・・・すいません、互いに責任のある任についている事やプライベートでの趣味やそんな所です」

答え

「そうですか・・・」

なぜか残念がるような顔をされるが

「??」

はてなしか浮かばなかった。そしていつも通り5人で朝食をとっているとニュースでブルーマーメイド殉職隊員の葬儀の一部が放送されていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

テレビの画面を見てポツリ一言いった。

「元いた日本なら今頃全員殉職認定で二階級特進かな・・・一等海佐から海将か・・・」

苦笑していると

「朝から暗い話はなしです」

真白さんに言われ

「そうだな、すまない」

食後に部屋で荷物の出航し任務に伴う荷物の確認をしていると

「真霜です、いいですか？」

ドアの外から聞こえ

「はい、どうぞ」

答えると真霜さんが入ってきた。

「そろそろ日用品が必要かと思つて」

彼女は言うが

「うーん、日用品というより今回の出航、そのまま任務に付く間の荷物で足りない物が

少々」

答えると

「買い物に行くなら車出しましょうか？」

答える真霜さん

「ありがたいけれども、まだ給料もらってないからお金もないよ」
恥ずかしそうに言う

「全部私が立て替えますよ、今回は」

真霜さんが言ってくれたが

「いや．．流石にそこまでは．．．」

渋っていると

「艦長なんですからビシツとしないと」

そのまま真霜さんに引き摺られ

「かあさーんちよつと如月さんとドライブ行ってくる」

真霜さんがいい

「気をつけて行っていくのよ二人共」

真雪さんの声が聞こえ

そのまま真霜さんの車に乗り近くのショッピングモールへ

「へーこんなにいっぱい．．．」

感心していると

「航海で男物だと……これと……これと……これかな……後は……」

真霜さんは必要そうな物を片っ端からカゴに入れていたが

「そんな必要ないですよ!!」

そう言うとうと

「航海後の生活で着る物も入ってるのよ?」

真霜さんは言ってくれ

「そこまでは考えてなかった……」

俺もいった。そして俺も

「今回何から何と世話になりっぱなしで申し訳ないです。給与が入ったらダイナーにで

もどうです?」

買い物終わりに行ってみると

「いいですね、楽しみにしています。」

真霜さんは言ってくれた。

帰った後、自室から消えた海軍の制服を探していると

「アイロンがけしとききましたよ?」

真霜さんが既にやっていた。

「すいません……」

その夜夕食後部屋で荷物を整理していると一枚の写真が出てきた。

「……………」

眺めていると

「今いいかしら、」

聞こえ

「どうぞで」

彼女とこの前同様に話し出す。

「家族って良いですね」

俺は言い

「どうしたの突然？」

真霜さんは言い

「いえ、この世界で縁あつてこの日本でそしてこの家に居候とはいえお世話になつていて毎日、語らい辛いことがあれば慰め、そしてたまに喧嘩がしても仲直りして色々と思ふ所がありました。本当に……やはり護るべき価値のある日常だと。」

俺は言い

「まあ……私達は少なくとも他人とはおもっていないかな……」

真霜さんはいった。

「やっぱり、人は一人では生きていけませんね．．．本当に」

答え真霜さんがテーブルに置いていた写真を見つけ

「これ、如月さん友人？」

聞かれ

「高校まで一緒だった幼馴染です。卒業の時「これを私だと思って持ってて欲しい」って写真を寄越したんですよ」

「．．．．．」

真霜さんは写真を見て

「帰る事のできない平成と言う時代の思い出ですか」

そう言うと写真を置く。そして

「そうそう忘れるところでした、この間仕事帰りにこれ神社で買ってきたんです。願掛けもしてきたものですけども。どうか無事に今回の航海と任務が終わりますようにと」

真霜さんからお守りを貰い

「ありがとうございますごいまます本当に」

俺はありがたく受け取り

「さっきも言ったけれども他人とは思っていないよ、私は家族も同然と思ってる。だか

ら無事なる航海を」

そう言い残し

「また明日。」

真霜さんは行ってしまった。その後荷物を準備し就役式に備えた。

第9話～出航と対潜戦闘ツ～

就役式典などを終え俺達200名を乗せたイージス艦はぐろは所定の警戒ポイントに向けて航海を続けていた。

イージス艦はぐろCIC

「何事もなければいいがな・・・」

俺は呟くと

「艦長、なにか不穏な事でも？」

副長の高本中佐が言い

「お前は式典を見てて気付かなかったか？」

言い

「なぜ海軍のイージス艦の就役式典に海上安全整備局の上層部が来てる？海軍と何か関係があるか？」

俺は言い

「あ・・・」

翼も言った所のため息を付き

「しつかりしろ、仮にも副長なんだぞお前」

式典前に真霜さんにも言われていた。上は何をしでかすか分からない。海に出てしまえば助けてあげることができない。それに今回は間が悪く、イージス艦に随伴する対潜警戒駆逐艦「あさひ」の整備が間に合わずあるう事かイージス艦単艦での出航となった。

「なるほど・・・イージス艦でも対潜戦闘はできますがメインは対空戦闘ですからね」
翼は納得したかのように言い

「まさか艦長、洋上に出てしまえばどうとでもなると我々を消そうと・・・」

焦ったように翼は言い

「俺がお世話になつている家の方の娘さんがブルーマーメイドの事実上のトップだが上層部が俺達を殺して艦を奪うという事もありえたと教えてくれた。なんでも現場と上層部はいざこざが絶えないとか・・・上が無能だと苦労するのは現場なんだがな」

俺は言った、同時に何とも言えない嫌な予感がしていた、優也は無線を取り・・・

その頃

????

「艦長、本当に海軍のミサイル巡洋艦を撃沈するんですか？仮にも味方ですよ！」

海中に置いて優也らイージス艦はぐるを追跡している一隻の潜水艦があった。

「上からの命令だ。海軍の連中に対しての警告にもなるだろうとか」

艦長は苦笑しながら言い

「馬鹿げている、味方同士殺し合いをするなんて」

それに対し

「私もそう思うよ副長だが命令は命令だ、確かに上は間違っている海を護るのに海軍もブルーマーメイドもホワイトドルフィンもないというに、彼らには申し訳ないが此処に沈んでもらう。」

しかし

「艦長ツソナーの探針音です!!ダメです発見されます。」

ソナーマンの声に

「何?!読まれていたと言うのか」

艦長が焦るのも無理はない。

「イージス艦搭載の哨戒ヘリのディップピングソナーか!!!」

???
アウト

はぐるCIC

嫌な予感がした優也は搭載ヘリに対潜警戒を命令

「副長、シーホークに即時待機準備出来次第直ちに発艦、列びに対潜警戒を厳となせ」

指示を出し

「了解ッ、即時待機準備出来次第シーホークは直ちに発艦せよ、対潜警戒を厳となせ」
警報と同時に乗組員らは各セクションにつき

「艦長、副長各セクション配置よし報告しだいでは直ちに対潜戦闘に移ります。」
砲雷長からの報告に

「了解ッ」

俺も翼もそれぞれ椅子に座る。

「俺の思い過ごしなればいいが……」

緊張の時間が経過する中

「！艦長ツシーホークより艦後方6時の方角距離500にて所属不明潜探知ッ」

報告に一気に緊張が走り

「艦長……」

横を見ると同じく緊張している翼が俺を見ていた。嫌な予感は当たってしまったようだ

「対潜戦闘用意……こいつは演習にあらず」

各セクションが配置に既についているためすぐに行動に移せたのは不幸中の幸い

だった。」

「Mk137列びに対長魚雷デコイ準備よし」

「短魚雷発射管準備よし」

「SUM・VLA発射準備よし」

普段からの演習とそして先の尖閣紛争で中国の潜水艦となんちやっつてイージス艦を沈めた自信だろうか自信を含めた乗組員に迷いはない。

「こちらの対潜戦闘準備が完了したと同時に

「艦後方距離500、60。魚雷発射音探知ツ」

報告に

「(しまったツ、先手を打たれた)」

俺も翼も顔を見合わせ

「回避運動開始ツ、Mk137デコイ発射ツ」

命令を出し

「横須賀の艦隊司令部に報告、我雷撃を受け回避行動中、攻撃許可を求む」

「はいッ直ちにッ」

目まぐるしく変わる状況に

「眠れない一夜になりそうだな・・・」

眩
いた。
た。

第10話～疑心暗鬼～

横須賀・第1艦隊司令部

「今回は本当にお世話になりました宗谷さん」

司令長官大石は言い

「いえ、なんとかなんとか就役式典、出航と此処まで無事にこぎつける事が出来ました
が、上が何を考えているかは本当に理解しかねるところもあります。ですので今後何が
あるのかは私にも予測できません」

私は言った。上はまだ諦めたわけじゃないだろう・・・私達現場は気にしないが上は
海軍との確執がある。大石司令長官の言われる通り海を守りたいその思いに海軍もブ
ルーマーメイドもホワイトトルフィンもないはずなのにそう考えていると

「大変です、司令長官ッ」

ドアを開け海軍士官の方が入ってきた。

「何事だ？」

原少将は言い

「どうした緊急の案件か？」

大石司令長官は言い入ってきた海軍士官の方は私を一瞬見るも

「緊急も何も大変です」

慌てており

「落ち着け」

原少将は言い

「ハイ、取り乱してすみません。先ほど本日出航したばかりのミサイル巡洋艦はぐるり入電「われ、所属不明潜より雷撃を受け回避行動中攻撃許可を求む」以上です。」

報告に

「!!」

私は驚き

「はぐるりに現状は損害はないのか?」

原少将は言い

「通信は報告を最後にありません、防戦に徹しているのか・・・あるいは・・・」

不吉な単語だった「あるいは」それが意味する事は一つ撃沈された可能性である。私も知識では知ってるイージス艦は対空・対艦・対地はほぼ無敵であるが対潜はイージス艦は不向きであると。もしそれを利用したとすれば、今回はまたとない機会でもある洋上であれば証拠が残らない。その上対潜警戒駆逐艦が随伴しないイージス艦単艦での

出航となった今回であれば・・・

「司令、現場海域に至急対潜警戒駆逐艦しらぬいを派遣しましょう。あさひは無理でもしらぬいはいけるはずです司令」

原少将は大石司令に言ったが

「いや、今から現場海域に向かわせても間に合わんだろう。酷な事を言うが、如月大佐ら乗組員の操艦技術と戦闘経験を信じよう。至急連絡「攻撃を許可する。撃退、拿捕が望ましいが最悪は撃沈も許可すると」」

大石司令は言うのと付け加え

「情報部にも徹底的に調べさせろ、必要ならば陸軍にも協力を依頼しろこの短時間で出来すぎている。」

命令を出し

「了解致しました」

敬礼し去っていく。そして私も

「大石司令長官私も個人的に動いてみます、なぜか嫌な予感がします・・・身内を疑いたくはないのですが思い当たるフシが上にありすぎるので」

私はこの時思った「とうとう暴発しやがった」とそれと同時に海の彼方で敵潜と交戦している如月艦長の顔が浮かんだと同時にどうして助けて上げられないのだともどか

しさを感じていた。

第11話～ミサイル巡洋艦はぐるV S潜水艦～

洋上

「艦長、魚雷第一波はデコイに引つかりました、右舷400メートルに沈降」

ソナー要員からの報告を聞き

「艦橋、回頭180。敵潜に正対する、司令部からの応答はッ」

艦橋に居る加藤航海長、列びに通信員に言い

「艦橋了解ッ」

「・・・返答今きました、「攻撃を許可する。可能ならば撃退・拿捕せよ最悪撃沈も許可する。艦長、戦闘許可おりました。」

通信員が言ったとき

「シーホークより第二波魚雷発射音探知ッ」

「どうやら敵は諦める気はないようだ。」

「マスカー開始ッ」

「砲雷長、VLA発射用ッ」

命令し

「撃沈ですか？」

聞かれるが

「いや、目標の距離250メートル手前で自爆するようにセットしろVLAの炸薬量で自爆されれば無傷では済まない。敵に損傷を与え当海域から撃退する。もう1機のシーホークには対潜弾を装備して発艦させろ。敵潜の上空からばら撒いて教えてやれ」「お前らをいつでも殺す事ができる位置に居る」という事を。」

俺が言った時

「艦長、こちらが打って出れば全面的な戦闘になります、それも国内で・・・」
不安そうに副長の高本中佐は言ったが

「翼、敵は既に引き金を引いたそれに既にこの海域は戦場だッ」

俺と翼が言っている間にも

「魚雷接近、距離150 到達まで二分」

ソナー員が怒鳴るように言い

「艦長ッ、VLA発射準備よしッ命令を」

「シーホーク二番機対潜弾装備よし発艦準備よし、発艦します」

各セクションの報告に

「発艦を許可する。上空から盛大に頼む」

言い

「砲雷長、発射を許可する。」

命令を下し

「艦首VLS、一番から六番まで発射ツ七番八番は敵潜直撃で目標入力」

艦首のVLSから六発のASROCが発射され敵潜に向かう。それと同時に

「敵潜魚雷距離120・・・艦長ツ」

ソナー要員は言い

「狼狽えるな、最新装備を信じろッ」

狼狽える乗組員に俺は激を飛ばした。艦長である自分が狼狽える事は許されない。

そして緊迫する中

「・・・魚雷逸れました・・・艦後方300メートルに沈降を確認・・・」

皆が冷や汗をかいた。

???

「艦長、第一波魚雷どうやらデコイに食いついたようです。」

水雷長が言いそれと同時に副長は

「やはり間違っています、艦長こんな事やめましょう!!味方同士で殺し合いだなんてこ

んな事をするために我々は厳しい訓練をしてきたわけじゃないでしょ!!」

艦長に考え直すように言うも

「・・・3番、4番 発射ッ」

艦長は命令し魚雷が再びはぐるroに向けて発射されるがはぐるroもやられっぱなしというわけでもない。

「艦長、敵艦回頭開始ッ回避運動を取りつつ我艦に向けて正対しました。列びに洋上より発射音、恐らく敵艦VLAを発射したものと思われます。着水確認、魚雷6接近」

ソナー員は言い

「高性能魚雷か、ソナー未だに洋上に哨戒ヘリがへばりついているか。」

ソナー要因は

「はい、ソナー音継続、完璧に補足されています。このままですと魚雷を回避しても対潜弾が来ます。どの道我々は此処で殺られます」

ソナー員は報告し

「なおも敵魚雷接近、距離300艦長!!」

水雷長は言い

「距離250・・・」

ソナーが言った瞬間強烈な振動に襲われた。優也が命令した通りにVLAは距離2

50で自爆し爆発を鼻先で食らった敵潜は

「魚雷発射管損傷、一番、四番、七番損傷、魚雷発射不能。発射管室浸水、要員退避列びに封鎖完了。」

それと同時に今度は頭上で爆発が2発

「対潜弾かッ」

水雷長が言うなか

「艦長、各セクションで浸水発生、ダメージジコントロール中！艦長ッ」

副長は損害を報告し

「第二波魚雷、爆発音なしこれも回避された模様」

ソナー員は報告を入れ

「艦長、我々の負けです・・・本艦は戦闘能力を喪失しました。鼻先でのVLAの自爆に
対潜弾の爆発深度も浅かった。艦長チエックメイトです・・・浮上命令を」

副長は言い

「強制浮上か、通常ならば死ぬよりも屈辱的だが・・・そうだな・・・彼らに包み隠さず話
そう。味方同士殺し合う必要はないのだからな通信アンテナを出せ」

???
アウト

はぐるCIC

「艦前方で爆発確認、VLAの自爆を確認、シーホークの対潜弾爆発を確認」
淡々と報告を受けていると

「！艦長、敵潜より通信回線開けのコールです」

通信員より言われ

「よし、開け」

俺は言い

「こちら国防海軍ミサイル巡洋艦はぐる、艦長の如月優也大佐だ。」

無線を開き

「こちら海上安全整備局ホワイトドルフィン所属潜水艦あらしお、貴艦に降伏・投降の用意がある攻撃の中止を求む。」

無線に艦内は困惑する

「なぜ味方が・・・」

「なんで・・・」

乗組員をよそに

「降伏を受諾する。直ちに浮上せよ」

一言言い

「貴艦の好意に感謝する」

そう言い無線が途切れそれと同時に

「艦長も最初から拿捕する気だったんですね」

山田砲雷長は言い

「ああ、V L Aが鼻先で自爆すればただでは済まない。うまくいけば攻撃能力を削げる。そして頭上から対潜弾をばら撒いて警告し相手を諦めさせる・・・もしダメなら止めにV L Aを撃ち込むつもりだったが最悪の事態を避けられて良かった。」

俺は言っている

「艦長、前方400メートル気泡確認敵潜・・・浮上してきます・・・浮上確認白旗を確認しました。」

報告に

「念のためだ、主砲を向けろ。それと臨検隊準備しろ」

命令し

「高本副長、此処を頼む。どれ敵さんの艦長の顔を拝みにいきますか。通信員、司令部に報告「敵潜降伏繰り返す、敵潜降伏」頼む。」

そう言う俺は艦を副長の高本中佐に託し、武器庫で念のため9mm拳銃をホルスターに入れ臨検隊と共にモータボートに乗り浮上してきた敵潜に移る。艦に乗り移ると既に艦長と思しき人が申し訳なきそうに出てきた。

「はぐろ艦長、如月優也海軍大佐です」

俺は言い

「あらしお艦長、五十嵐五郎です」

申し訳なさそうな表情に

「よくご決断して下さいました。我々も味方を殺さずに済みました」

俺は言い

「今回の任務……いえこれが任務と言えましょうか……味方を沈めろなどということが……」

五十嵐艦長は言い

「話してくれますね、全て」

俺は言う

「もちろんです、此処に証拠があります」

俺はファイルを受け取ったそこには

「イージス巡洋艦はぐろ撃沈作戦命令書、列びに概要」と記され海上安全整備局の印が押された書類・封筒だった。そして命令者の欄には連名で名前が記され印も押されていた。

「責任は艦長たる私にある。だが部下たちは……」

懇願する五十嵐艦長をなだめ

「貴方の責任ではありません、現にこちらの損害は皆無ですから、むしろそちらに負傷者が出ていないか気がかりです。かなりの損害を与えているはずですから必要な医療措置等是我々の艦で行います。」

申し出た。

横須賀 第1艦隊司令部

「そうか・・・うむ、わかった」

大石司令長官は頷き

「宗谷君、いまイージス巡洋艦はぐるから司令部に連絡がはいった、敵潜を拿捕したと。ただ如月大佐もショックを受けているのだから私が私も信じたくはない。なぜホワイトドルフィン号の潜水艦が海軍のイージス巡洋艦を狙う？それも如月大佐の報告では命令書・指示書の存在が確認されている。それも上層部からの命令書・指示書の可能性が濃厚だと」

私は

「大石司令長官、図々しいお願いだというのは百も承知ですがはぐるに向かう際に私も乗艦許可を頂けないでしょうか？私も現状を確認したいと思っています。命令書の指

示書の存在と実際に艦長からお話を伺いたいと思っています。」
申し出ると

「こちらとしてもお願いしたい。だが気の毒なものだ潜水艦の乗組員もそして艦長も私
はできれば穏便に済ませたいと思っている。海軍としては話を大きくするつもりもな
いしね」

大石司令長官は言われ

「はぐろについては至急帰港せよと命令を出したヘリの行動半径に既に入るだろう。明
日の朝一にはぐろに向かおう」

それに

「配慮感謝致します」

私は答え

「良かった・・・本当に無事で・・・でもイージス艦で潜水艦を拿捕する能力は一流と
しか言いようがないわね」

私は思っていた。しかし次の魔の手が迫っていた。

第12話～ミサイル巡洋艦はぐるVS無人機～

???

「第一次作戦は失敗です、潜水艦は拿捕されました。」

とある会議室に男達の不穏な会話が響く

「クソツ、たがイージス艦も無傷ではないだろう？対潜戦闘には不向きだろう幾分かダメージを与えたのだろうか？」

一人がいう中

「いえ、残念ながら無傷です。潜水艦はやしおは魚雷発射管室に損傷を受け魚雷の発射不能並びに、洋上から投下された対潜弾でさらに損傷し戦闘機能を消失、降伏・投降したと海軍の無線を傍受しました」

報告が行き

「むう・・・これで雷撃作戦は使えなくなつた。敵は対潜警戒を更に嚴重にするだろう。」

そういう中

「第二次攻撃に移行する許可を頂けますでしょうか？無人機による対艦ミサイルによる攻撃を加えます。いくら「神の盾」と言われていても数の暴力には対処できないでしょ

う」

いう中

男達は考え込み

「解った、許可しようだが必ず沈めろ。このままでは我々の発言力が低下し海軍にとって変わられる。」

そして

「第二次攻撃に移行します。待機している直属艦の艦長らに命令を下します。一つの無人機につき4発対艦ミサイルを装備させています。それを6機計24発のミサイルで必ず撃沈します。」

会議室を後にする、その頃

洋上 イージス巡洋艦はぐるろ CIC

「まさか本気で俺達を消しにくるとは……」

砲雷長加藤少佐がいい

「……………」

俺はまだ考えていた。

「(雷撃が失敗したら……次の手は……通常ならば航空機による対艦ミサイル

による攻撃が来るがこの世界には航空機は足の遅い無人機あとは海軍が保有するヘリだけ、無人機ではヘリのスピードには遠いく及ばない、でももし無人機に対艦ミサイルを装備してくるのだとすれば・・・!」

結論に達し

「加藤少佐、艦橋に連絡対空見張りを厳となせ、第二波攻撃の可能性がある。」

「レーダー士官、目を離すな必ず仕掛けて来る。」

厳命し

「了解、各員対空見張りを厳となせ第二波攻撃の可能性が高い」

加藤少佐はインカム越しに言い俺も

「艦橋、対空見張りを厳となせ第二波攻撃の可能性が高い、ボケっとしてると対艦ミサイルが飛んでくるぞ」

半半ば脅かすように言いますがそれでも警報と共にクルーが対潜戦闘から対空戦闘の配置につきなおす。加藤少佐が

「イージスのレーダー探知圏内は推定500〜600キロメートルただ低空でこられると厄介ですね」

加藤少佐は言い

「ああ、飛来するスピードを計算すると対応可能時間がおおよそ数分だ。そして数の暴

力に対応できるか否かで勝敗は決まる。」

腕を組みながら言い

「尖閣諸島紛争思い出しますね、中華イージスからの対艦ミサイル本艦に8発飛来してその全てを叩き落としたんですよね。」

その時

「レーダー探知、本艦に向けて飛来する目標推定30ん？引き返す・・・訂正、飛来する数24、艦長の読み通り対艦ミサイルです。」

「「24?!」」

俺と副長の高本そして砲雷長の加藤に驚きを隠せないでいた。その頃

???

「距離450^{キロ}まで接近艦長、そろそろイージス艦のレーダーに補足されている頃です無人機のミサイルを発射離脱させましょう。いくらイージス艦といえど24発の対艦ミサイルに対処はできないでしょう。」

艦長に副官は言い

「そうね、良心が痛むけどミサイルをパージし機を至急離脱」

命令を下し着弾を見届けるため6隻のインデペンデンス級が残る。

???
アウト

イージス巡洋艦はぐるCIC

「ECM戦用意ッパッシブモードからアクティブモードに切り替えッ」

加藤少佐が即時に指示を出し

「パッシブからアクティブに切り替えます。」

飛来する対艦ミサイルに目潰しをかけるために強力な妨害電波を照射する。俺も加藤もそして翼もモニターから目が離せない。

「飛来数24から14に減りました・・・ッ目標ロストコンタクト」

レーダー士官は言い

「スタンダードの使用を許可する。」

命じ

「目標再コンタクト14発がこちらに向かっています。」

レーダー士官からの報告と同時に

艦首と艦尾のVLSより7発ずつ計14発の迎撃ミサイルを発射する。

「頼む・・・当たってくれ・・・」

ミサイルの点と向かってくる対艦ミサイルの点が重なる。しかし全てを撃墜できた

わけでもなく

「3発すり抜けました。距離13500対処命令を」

レーダー士官は言い

「主砲で迎撃せよ、本艦、右90。まっすぐ突っ込んでくる」

「発砲ッ」

砲術員の掛け声で主砲の引き金を引き主砲が発砲される。CICにいてもわかるほどだ。

「二発撃墜ッ、さらに一発突っ込んできます」

「CIWSで対処、各員衝撃に備えろッ」

全員が対衝撃姿勢をとり万が一の着弾に備える。依然CIWSのけたたましい射撃音が聞こえ

「撃墜確認ッ、落ちました艦長ッ・・・」

レーダー要員が言い

「助かった・・・」

加藤少佐が言い

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

高本中佐は無言で冷や汗を流し

「ふう．．．」

俺は一言呟いただけだった。

???

「全弾迎撃されました、艦長．．信じられません．．24発全て．．」

艦のレーダー要員は言い

「あちらの艦そして艦長以下クルーが優秀と言う事ね。まいったわ24発全て叩き落とすなんて。それも24発撃って「はぐる」に到達しかけたのが一発のみなんて」

帽子をとり

「回頭180。作戦の失敗の報告し帰港します。僚艦に打電」

直属艦の6隻は海域を離脱した。なんとミサイルの飽和攻撃を辛くも防ぐことに成功したたはぐるだった。

第13話〈帰航と調査〉

第1艦隊司令部

「失礼します」

俺と翼は帰航後司令長官大石中将と原少将がいる司令部を訪ね

「如月大佐以下200名無事にとは言えませんが帰航しました。」

報告を入れ

「まあ、座つてくれ」

大石司令長官に勧められ

「失礼致します。」

俺と翼はかけた。そして部屋にはもうひとりも押し分けなさそうにしている真霜さんの姿があった。

「今回は災難だったな雷撃に対艦ミサイルの襲撃にしかし貴官以下クルーがいかに優秀か証明する機会にもなった。あれだけの襲撃を受け無傷で帰航するとは」

大石司令長官は言い

「恐縮です。」

答え

「まあここに呼んだ時点でおおよそ察しは付いているだろうが」

言い

「例の事件の裏の調査ですか？」

俺は言い

「それに関してはいま海軍そして陸軍の情報部そしてブルーマーメイドの一部そしてはやしお艦長などの協力もあり説明が進んでいるが雷撃事件についてはだが、対艦ミサイルの襲撃事件については宗谷一等保安監督官より説明がある。」

そう言うと彼女は座り

「この度は上層部の暴発を未然に防げずクルー以下200名の方々を危険にさらした事を現場最高責任者として陳謝致します。」

真霜さんは頭を下げ

「本題に入りますよう」

俺は言い

「ハイ、早速になりますが「はぐろ」を対艦ミサイルで襲撃し撃沈を狙ったのは上層部の直属艦隊と推測します。残念ながら直属隊は私の指揮下にありませんのでいつでも動かす事が出来ます。極秘に調査を進めた所以下の6隻が関わっている可能性が出てき

ました証拠に記録にこの6隻が対艦ミサイルの搭載作業を行った記録が此処に残っています。」

真霜さんは言い

「艦長のデータまでご丁寧ありがとうございます。翼、後でこいつらにそれとなく接触してみるか」

俺は言い

「確かに、「俺達はわかっているぞ」って圧力を掛ける事もできるしね」

翼は言い

「大石司令長官、原副司令長官よろしいでしょうか？」

訪ね

「解った、それとなく警護の人間をつけよう」

大石司令長官も原副司令長官も頷き

「戦術としてはこつちの世界ではトリツキーなつもりだったのだろうがあいにくとこつちの世界じゃ音速の戦闘機が対艦ミサイルを撃ってくるから対処としては難しくはなかつたかなでも24発には焦つたな」

翼に言い

「ああ、イージス艦じゃなかったら対処が遅れて今頃海を彷徨ってレスキューを待つか

死んでるかのどっちだったもんな」

翼は答え

「でも同じ海を護る仕事をしてるのに海軍もブルーマーメイドもホワイトドルフィンも
ないだろうにどうしてこうなんなんだ・・・」

ため息を付きつつ答えた

第14話　つかの間の休息

宗谷家

「入室制限・立ち入り禁止」

借りてる部屋のドアにこんな張り紙を貼るのは忍びないがこの家の人達も一応は「敵側」にいる。信用できるとは思っているが万が一というのはありえる。

「やはり、イージス巡洋艦みらいのデータを元に制作された対艦ミサイルか」

データを確認したり個人的には違法行為だが「ハッキング」など要所のデータを閲覧したりなど行う。

「なるほどな・・・海軍のイージス艦の艦艇数が増えれば同時対応できない船には価値はなくなる。それに今までブルマーにホウド両方が守ってきたという変なプライドもある。それを軍に取って変わられるのは屈辱か・・・」

データを確認し

「この6人か・・・いずれも女性・・・ブルマーメイド上層部直属艦隊」

今回の事件の背景にやはり両者の隔たりというか一方的な思い込みがあるように感じた。現場の気持ちは同じでも上層部はまるつきり違う。そう思っていると

「如月さん、夕食です」

ましろさんに呼ばれ

「今行きます」

席を立った。その日の夕食はなぜか空気が重かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

誰も一言も言わずテレビではもう情報が漏れたのか海軍イージス艦襲撃事件と題されて報道合戦になっていた。夕食後に

「大石司令から話は聞いていたけど、申し訳なく感じるわ今回の事件は」

真雪さんが言い

「大丈夫です、イージスは伊達ではないつもりですから」

俺は努めて明るく振舞い

「でも魚雷に対艦誘導弾24発の飽和攻撃を凌いだんだろう、そもそもうちの上層部が開発していた物をそんな事に使うなんて・・・」

真冬さんもどこか暗く

「真霜さんそちらの調査は進んでいますか？」

聞くと

「ええ、雷撃事件に関しては証拠がある上に本人も証言すると誓約してくれたから上は逃げようがないわでも・・おんなじ海を護る仲間を殺しにかかるなんて・・」

やはりシヨックは大きいようだ。無理もない。そんな中

「真霜さん、食後いいですか？ちよつと見て欲しいモノがあるので」

そう言い先に部屋に戻り

「コンコン」

真霜さんがノックし

「どうぞ」

彼女を招き入れ彼女は中に入るなり書類の山を見て驚く

「ちよ・・・この情報どこで入手したの・・全部機密指定がかかっているものじゃない」

真霜さんは言い

「こんな事を言いたくないですけど、目には目を、歯には歯を報復の掟」というやつですよ敵を詳しく知るにはまず情報です。違法行為に該当しますがそれはまあ」

俺は言う

「わかったわ、目をつぶってあげる。でも貸し2よ買い物と言いきれと言いき」

真霜さんは書類を見て

「これはうちでも掴みかけていた情報だったけど試験段階の対艦誘導弾を持ち出すなんて信じられないわね・・・」

真霜さんは書類を見ながら答え

「性能上は問題はなかったと思いますよ、攻撃を喰らったこっち側は」

答え

「早くて今日、遅くても明日連絡をとり例の直属艦の艦長に釘を刺しに行きますけどね

「次は無い物と思えと」

言うつと

「番号は調べてるの?」

いわれ

「その書類に」

一枚の紙を渡し

「参ったわね・・・一人でそこまでするなんて・・・でも関心はしないわね女性を半分は脅迫するようなものだし」

彼女は言ったが

「脅迫程度なら可愛いものでしょう? 本当に殺すわけじゃないしこっちは殺されかけて

ますから」

俺は言い

「ほどほどにしときなよ?」

彼女は言ったその後部屋を後にし俺はとある番号に電話をかけた。数コールの後相手が出る。

「もしもし、どちら様でしょうか?」

それに

「始めてじゃないでしょ? 数日前に殺し合いをしたばかりじゃないですか? みくま艦長の秋元沙雪艦長?」

俺は言うと

「!!」

相手は驚いたような反応を見せ

「作戦はトリツキーで見事なものだった。」

そう言い

「・・・はぐる艦長の如月優也大佐本人?!」

問われ

「ああそうだ、調べるのに苦労はしたがあんたのボスに警告してやろうと思ってな」

そう言うよ

「如月大佐、不躰で失礼ですがお会いする事は」

こつちが言おうとしていた事をいわれ

「構いませんよ、ただし6人全員呼んでくれるとこつちも手間が省けるのだがね、」

俺は言った。対艦誘導弾が24発その前にレーダー士官は言った。「30から24」

つまり6機は無人数という事になる。一艦に1機と仮定すれば6隻の計算に成る。

「承知しました、海域に展開していた僚艦5隻の艦長にも話をとうします。お会いする機会を下さり感謝します。」

電話を切り

「盗み聞きは関心しませんね、真霜さん？」

ドア越しに言うよ、真霜さんが入ってきた。

「もし会うのならば私も同席させていただけるとありがたいのだけれど？」

真霜さんは言い

「一個人としてですか？それともブルマーの一等監督官としてですか？」

俺は言い

「一個人としてよ」

真霜さんは即決した。

「分かりました、同席を認めます。」

俺は言った。後に翼に話を持っていき明日集合だと言い備える事にした。正直謝罪は求めているわけではない、真意を知りたいのだ。なぜ我々が消されなければいけないのか？それが知りたかった。

第15話～個人として～

某喫茶店

待ち合わせ場所に先方が指定してきた場所だ。

「さて先輩、もし先方が対抗策を取ってきた場合どうします？」

副長の高本中佐は言い

「俺は相手を信じたい、ただそれだけだ」

答え

「それ俺もお前もそして宗谷さんも海軍・ブルーマメイドそれぞれの組織とは別に今日
は只の一個人として来ているそれを忘れるなよ」

釘を刺した。それから遅れること数分後六人の女性が入店してくる。対面し

「……………」

彼女らも居心地が悪そうにしている中

「貴方方最初に言うことがあるんじゃないのか？どうなんだ」

翼が言い

「お前は少し黙れ」

俺は言い

「来てくれて感謝する、はぐろ艦長の如月優也海軍大佐だ、こっちはまあ知つての通りでこの喚いたのがすまないな躰がなくなってうちの副長だ。」

俺は言い

「みくま艦長秋元です。以下五名です」

秋元さんは言い

「初めに言つておきたい、我々は謝罪を求めているわけではない。「真実」が知りたいんだ。だから今日正直に話して欲しい。俺達は此処に組織を持ち込んでいない、一個人として来ている。」

俺は言い

「こちらが私達がそれぞれ渡された作戦の概要書となります。理由はあくまで私個人の推測でしかない事を先にお断りさせていただきます」

秋元艦長は言い

「構いません」

俺は言い

「海軍の発言力がこれ以上強くなる事を、装備の差が出すぎるのを上は良しとしていないのだと思います。私達は信じては頂けない事は百も承知ですが気持ちちは如月大佐に

高本中佐そして宗谷監督官と同じです良心が傷まない訳が無い。救いなのは貴艦が全て撃ち落としてくれた事です。例え三重のセーフティーがあつても着弾すればタダじゃすまない。大勢の犠牲者が出る上は自らで手を汚す事を知らない、ですから現場の苦悩もわからない。」

秋元艦長は言い

「分かりました。上が無能だとやはり苦勞は絶えませぬね」

俺は言い

「私の上官は事を荒立てるつもりはないとおっしゃっています。海軍としては穩便にすませたいこれが本音です。我々は互いに協力するべきと思っています。互いにものを補う。相互関係がりそうかと」

俺は語り

「それで貴女達はどうするの?」

真霜さんは言い

「私たちは昨日如月大佐にお電話を頂いた後互に話し合い内部告発に動く事を決めました。事が済めば今現在の役職を辞職し裁きを受けます。こんな汚い事をしてまで上層部直属艦艦長の職に未練はありません。」

彼女らは言うが

「大石司令から伺ったけど貴女達がした事について海軍側から近々ミサイルの追撃実験と称して発表する予定だと」

真霜さんは言い

「上のような無能な連中はどうでもいいが、貴女らのような優秀な艦長を失うのはブルーマーメイドにとっても大きな損失に繋がる。一度しか言わないからよく聞け」

俺は言い

「貴女達は海軍のミサイル追撃実験に参加し協力してくれた「ただそれだけだ」です」
俺は言い高本も

「その機密書類は海軍の情報部が極秘に入手したとでも言えば貴女達に迷惑はかからない。どさくさにまぎれて宗谷監督官の部署に転属すれば逃げることも可能だ。」

翼も言い

「だがこれつきりにしてくれ、一回なら俺達も知らないふりを決め込むだがそれ以上はわかるね」

俺は言い

「翌週待ってるわ、私のオフィスに来て頂戴」

真霜さんも言い

「感謝します・・・」

その後食事をとりつつ口裏合わせや、真霜さんの部署にうまいこと転属し逃げる段取りをしたのだった。そして家に帰った後、真霜さんに

「見逃してくれてありがとう」

言われたが

「彼女らは優秀だ、イージス艦を追い詰めるくらいの技量を持つてる。そんな人間を使い捨てる上層部に殴り込みをかけたいくらいだ」

俺は言い自室に戻り真霜さんにシュレッダーを借り機密書類を破棄し証拠を隠滅したのだった。

第16話〈デイナー〉

某レストラン

「クスッ」

真霜さんに笑われ

「変なトコでもありますか？ いやわかっています。軍服を着てこういう所に入る経験は始めてですから」

頭を掻きつつ答え

「ううん、違うの貴方の海軍の制服とても良く似合ってる、本当に」

真霜さんは言い

「約束通り奢りです」

俺は言い二人でメニューを注文し

「お酒は飲まないんですか？」

真霜さんに聞かれ

「いいえ、基本飲みませんいかなる時も即応できるように」

話しながら食事は進み

「それはそうと、あの海軍の大石長官の発表上層部の連中は悔しがっていたわ試験段階の誘導弾を24発も使ったにも関わらず貴方を仕留めきれなかった事。それだけじゃなく海軍の情報部に例の資料を抑えられた事も。これであの連中はおしまいね」

真霜さんは語り

「これで変わりますか?」

俺は尋ねるが

「いいえ、後釜に座る人間もそれ以上に質の悪い人間でしょう。自らの私腹を肥やす人間、権力に溺れる人間、数えればキリがありません。それに貴方を消し損なった。これは上にとつてもよくない事だと認識されています。」

真霜さんは言い

「どうして、こゝも第二対戦の時みたく隔たりが出来る・・・軍もブルーマーメイドもホワイトドルフィンもなすべき事は同じだろうに・・・」

正直に言つて嘆かわしかった。だがこの話はいつまでも続けるべきではないと感じていると

「そういえばさきほどの軍服を着てレストランに入るのは始めてつて言つたけど前の世界はどうだったの?」

彼女に聞かれ

「前の世界じゃ日本は憲法九条っていう先制攻撃を自ら封じ、紛争の解決方法に戦闘と言う選択肢を永久に放棄、だから自衛隊という存在定義が曖昧な組織が国防を担ってききました。」

俺は語り

「さらに軍服を着て外に出れば後ろ指を指されかねませんし、白い目で見られる。さらには朝鮮や中国の大嘘つき共が喚くくく談話なんて言う自虐史観があつたおかげで政治家も腰抜け揃い。貴方方ご家族にお話した紛争でも政治家の初度対応が遅く多くの戦友が死んだ。政治家にも売国奴が多く「共産党」「社民党」中国や朝鮮と裏で繋がっている連中が国防機密を売ったり、先人達に顔向けなんてできないよ、売国奴に腰抜け何のために戦うのか？自問自答したくなる。」

俺は言った。真霜さんは黙って聞いてくれて

「大変だったのね……」

言ってくれた。

「すみません、せっかくのご飯を不味くしてしまつて」

謝り

「ううん、大丈夫私達も似たようなものだから」

そう言ってくれた。こうして彼女と後半は楽しく話をしながら食事を楽しんだ。今

後優也の役割はどう変わるのか・・・既に優也らは必要とされていた。

第17話〈SPECIAL・FORCEの必要性〉

太平洋洋上

イージス巡洋艦はぐる医療室

「止血急いでッ、」

「ここ抑えるの手伝ってくれッ」

「モルヒネ持つて来いッ、急げ」

「大丈夫だッ、傷は浅い気をしっかり持て」

「輸血用パックまだかッ？」

「手術台はまだ空かないのかッ、急がせろッ」

「ッ~~~~~」

声にならない悲鳴と血が医療室を支配する。あの事件後俺達は再び不審船監視の任についてたが目の前の光景は地獄だ。傷つき声にならない悲鳴をあげているのは全部女性だ。ただの海賊・・・そんな常識は通用せず、皮肉にもこっちの世界に来る前に在籍していた「海上自衛隊特殊部隊員」としての技能能力が役にたってしまった。

M4ライフルとプレートキャリアヘルメットを装備した俺のもとに

「艦長、報告します」

医療セクシヨンの責任者が来て報告する

「死亡9、重症3、軽傷2・・・まるで地獄です」

いわれ

「ああ、地獄だ・・・」

俺は答えた。警戒中にブルーマーメイドの艦の応援要請を受け現場に急行したらもうこの地獄だった。至急艦内の「特別警備隊SBU」経験者を招集し臨時に特殊部隊として「彼女」らの待つ敵艦内に突入海賊を射殺し数名を拘束しかし最悪の結果となった。至急救護艦艇とヘリの出動を要請しているがヘリはいいとして艦艇は間に合うかいなかそんな事を思っていると

「うっ~~~~~」

苦しんでるブルーマーメイド女性隊員を見つけ

「大丈夫だ、しっかりしろ」

俺は手を握るがその隊員は俺を見て

「お・・・お父・・・さ・・・ん」

崩れ落ちる

「艦長変わりますッ、除細動機急いでッ」

医官が指示を飛ばし動く

そこにCICから降りてきた高本中佐が来て

「艦長………」

俺の肩に手を置き

「酷い……惨すぎる………」

言った処置台は血で真つ赤に汚れそして隣の部屋には遺体袋に収められたブルーマーメイドの隊員の遺体。海軍特殊部隊員として戦争も戦ってきた自負はあった。でも此処まで凄惨な光景を見たことがあるだろうか……。俺達はその後拘束した海賊どもをブルマーに引渡し海軍基地に帰投し報告書を提出した。この時に既に脳裏にこの世界において「海軍特殊部隊」の必要性があつたのかもしれない。

宗谷家

帰宅し皆で夕食を食べているとニュースで報道され皆の空気が暗くなる中

「やはり、こういう仕事は海軍に任せるべきですね現場においても女性が足でまといになりかねない生き見本です。」

無意識に手に力が入り

「バキンッ」

音に皆が俺の手に釘付けになり

「如月さん血が……」

ましろさんにいわれ手を見るとスプーンをへし折った衝撃で手を切ったのか血が滴り落ちていた。しかし顔はテレビを見たまま

「貴様らに……命をかけた彼女らの何が分かる……安全な所でだべってるようなお前らに……」

あまりに怖い顔をしていたのかましろさんが怖がり

「ごめん……」

俺は謝った。夕食後自室にこもり

「海軍・ブルーマーメイド内部に特殊部隊を創設するには？」

ノートに書き込み

「装備の見直し？、搭載携行火器の見直し？、人員の育成方法等。女性隊員の育成方法に関して、陸軍との協力体制、「レンジャー過程」の有無の調査……」

色々書いていると

「コンコン」

ドアが鳴り

「どつどつ」

答えると真霜さんが入ってきた。マグカップを持って

「お疲れ様」

そう言い彼女はカップを置き

「今回はキツかったわね、互に」

真霜さんは言い

「……真霜さんブルーマーメイドの装備に防弾装備や重火器は積んでいないんですか」
俺はおもむろに聞き

「痛い所を突かれたわね……私達現場は再三具申してるの上は艦艇の装備を重視する。
今回の事も何とも思っていないかもしれない……」

いわれ彼女は俺のノートに目を通し

「……特殊部隊の創設についての必要性と有用性……」

彼女は読み

「コレって……」

真霜さんは言い

「今回の海賊の射殺、拘束は私が指揮をとりました。今回感じたのはやはりこういった重装備の脅威ある敵に対処するには特殊な訓練を選抜された隊員に施し海軍・ブルーマーメイド僚艦に小隊規模で配置し有事の際には銃撃戦になる可能性のある危険な任

務に従事する事が可能な部隊の必要性です。」

俺は言うところ

「確かにそうね・・・海軍はともかくうちには必要な部隊だわ、犠牲を最小限に脅威の排除、・・・もつと詳しく聞かせて？」

真霜さんは言い俺は自身がこの世界に来る前に所属していた海自特殊部隊の事を話した。危険な任務を専門に従事し「海賊の対処」「非正規任務」「人質救出」「特殊戦」などそして作戦の展開規模が世界全域である事、そこからとつてこの世界においても「特殊部隊」が絶対に必要だという事を話した。

「詳しい説明ありがとう。さしずめ「ボセイドン」ね海の守護者・・・」

真霜さんは言い

「一長一短にできることではありませんが人員を育て対応する事は必要です。そして真霜さんにはその能力がある。能力のある人間はそれを行使する責任がある。私同様でなければ今回の事件で殉職していった彼女らが浮かばれない・・・」

俺は語り

「そうね、大石司令と一緒に相談に行きましょう」

真霜さんは言い

「ハイッ」

答えたのだった。この世界においては小さい一歩でもその一歩が大きな一歩になる。

第18話〈部隊葬と特殊部隊概要〉

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

部隊葬は厳肅な空気の中執り行われた。ミッションの為に、己の責務の為に全てを投げ出す。9名の殉職隊員の遺影と棺が安置されすすり泣く音が響く。俺自身にも自責の念がなかったわけではなかった。

「もつと早く現場海域に付けければ・・・もし「特殊部隊」が存在していれば・・・」

気休めにもならないのはわかっている。皆己の職務を最後まで遂行しようとした彼女達の勇敢な行いがまた日本の海を守った。尊い御霊の犠牲の元に。殉職者の最年少は19歳の女性隊員だった。式が始まる現場の最高責任者の真霜さんと共に前殉職隊員らの遺族に会った際にどのようなお悔やみをと考えていた所

「救援に駆けつけてくれて、娘を救おうとしてくれたその行いだでもう十分です。娘もきつと如月大佐に感謝しています」

「ご自分を責めないでください、宗谷さんも娘は覚悟してこの仕事に付いたんです、娘は私達家族の誇りです」

「大佐自ら指揮を取ったと伺いました、貴方のような方々いらつしやれば日本の海も安泰です。わざわざ今日は娘のために感謝致します。」

我慢の限界だった。それとなく式が始まるまで俺はひと目の付かぬ所でむせび泣いた。自らも軍人として職務を遂行する過程で万が一の事を常に覚悟はしてきた、だが歳半ばの女性らが血を流し激痛にうめき死んでく、俺に出来たことはただ海賊という名の武装集団に怒りと共に銃弾の雨を浴びせ返す事だけだった。そんな時

「大丈夫ですか?」

後ろから真霜さんの声が聞こえ涙をハンカチで拭き

「すみません、みつともない所を見せてしまったようで」

そんな時後ろから抱きつかれる形になり

「貴方は優しい、組織が違えど彼女らの為に涙を流せる彼女らの為に尽力しようとしている。こういう人間がこの先必要になります。彼女らに報いる為に。」

こうして俺も真霜さんもそして翼に合流し、彼女らを見送った。見送る際、敬礼しつ

つ
「(貴女らの尊い犠牲は無にしません、どうか御霊よ安らかに・・・)」

やはり自然と涙が頬を伝っていた。それは翼も、真霜さんも同じだった。

海軍司令部

「この概要書は読んだが、如月大佐海軍とブルーマーメイドに同規模の特殊作戦部隊を創設するとあるが任務内容が同じならば海軍に設置すればいいのではなかね？」

幕僚クラスの将官が俺と真霜さんを囲うように言うが

「皆さん、我々海軍は多種多様な任務に従事しています。いつでもブルーマーメイドの方々に援護、支援できるわけではありません。ですので互いにこのような重装備の脅威に対して対応できる部隊は必要であり、また抑止力という観点からも「特殊作戦部隊」の存在は有効と確信しております。」

周りを見て力説し

「確かに如月大佐の言う通りだ。今回の事件は我々海軍も胸を痛めている事は確かだ。報告にもあったが如月艦長らがその「特殊部隊」経験者という観点から臨時に経験者から部隊を編成し事に対処した。大佐らがいなければもつと死傷者が出たかもしれない」
そう言うとうと

「ふむ、報告書を読ませて貰ったが今回亡くなられた隊員らには同情を禁じえない。ろくな防弾装備も持たず、拳銃とサブマシンガンでアサルトライフルや軽機関銃と戦えと

いうのは無茶苦茶もイイ所だ。海上安全整備局の上層部は何を考えている。」

一人の将官が言い

「私の能力不足です、彼女らに顔向けできません」

真霜さんは言ったが

「いや、宗谷君はよくやっている。現場の最高責任者として問題なのは上層部だろう。これだけの損害を出してなんの対応策を提示しないなど犠牲になったご遺族の方々も納得はしないだろう。」

大石司令は答え

「その意味でも対応策として現場を知る如月大佐はこのような重装備の脅威に対応できるように「選抜」された人員による「特殊」かつ「高度」な戦闘訓練を施した選抜部隊「特殊部隊」が必要だというわけだ」

原副司令も言った。

「如月大佐の言いたい事は大いに解った。海軍としては大いに結構だ。無駄な犠牲を出さぬように適材適所というわけだ。規模に関しては艦に小隊規模の隊員を配置か、海上安全整備局には同説明するつもりだ如月大佐？」

尋ねられ

「元より、彼らに選択の余地はありません。彼らは現場の声に耳を傾けなかったその結

果がこれです。ですので私のプランに賛同するか独自に対応プランを練るかのどちらかのみです。私が入層部に分かせます、「命」は駒でないという事を」

答えた。海上安全整備局にも俺が自ら出向き国防の「こ」の字もわからん馬鹿共に叩き込んでやるつもりだ。

夜・・宗谷家

「これが貴方の考え」

真雪さんにも話を聞いてもらい

「特殊作戦部隊・・・危険な任を専門に扱う精鋭集団。選抜過程や基準使用する基本となる武器まで細かく指定されているけれどこれはもはや・・・」

真雪さんは言い

「ハイ、もと居た時代で所属していた特殊部隊をベースにしています。」

語った。SBUはアメリカ合衆国海軍特殊部隊SEALsをモデルに創設された主たる任務は最初は不審船への対処だったが時代が幅広く柔軟な対応を求めSBUも諸外国と同様な海軍作戦コマンドに成長していった。真冬さん案を見て

「うはあ・・・うちじゃ採用できない高価な武器ばかりだなM4にSIG226にMP5

にMP7対物狙撃銃に高性能防弾ベストにヘルメットにサポートプロテクト・・・」

真冬さんは言ったが

「装備はお金で買えますでも「命」はお金では絶対には買えない。隊員らを護るならばこれくらいの装備は最低限揃えるべきだ。」

俺は言い

「なるほどな・・・これは言えるな船を増やしても人がいないんじゃないし」

真冬さんは言った。

「なるほどね、大体はわかったわでも誰が指導教官を務めるの?」

真雪さんは言い

「一応私の所属する艦の乗員は私をや副長、砲雷・航海両長らその他乗員がSBU経験者ですしカリキュラムもなんとかします。ですが「特殊部隊」という以上生半可な選抜訓練にはなりませんけれども」

一応言った。

「そうね、やる以上は完璧を目指さないといけないものね」

真雪さんは言ってくれたが問題は山済みだ。装備を調達するための予算枠そして指導方法の改訂など最初の難関がほぼ敵愾心をむきだしにする海上安全整備局をどう黙

らせるかこれが重要になる。

夜 自室

「うーん・・・第一段階で基礎カリキュラム、第二段階で応用カリキュラム、第三段階で実戦戦闘を想定した戦闘カリキュラム。あとは士官・下士官・兵毎の教育にブルーマーメイドも幹部とそれに準ずる人間の教育など細かくしないとな・・・」

やる以上半端な事は許されない、半端イコールすなわち「死」に直結するからだ。そうしているとう

「コンコン」

ドアのノックの音が聞こえ

「どうぞ」

答えると

真霜さんが入ってきた。

「こんばんわ・・・進んでる?」

聞かれ

「ええ、進んでいます。」

答えたがその手にしている物を見て気づいた

「あの……その寝袋なんですか？」

聞くと

「なにか手伝おうと思って、いつも任せつきり出し確かに私自身「特殊部隊」に詳しいわけじゃないから大変かもしれないけど何か手伝える事があると思って。」

言ってくれた

「でしたら、お願いした事があるのですがあの事件で入院している隊員への面会許可を頂けないでしょうか？現状を詳しく知らないといけないので」

頼み

「わかったわ、直ぐにでもそれと書類の整理手伝うよ」

こうして真霜さんと一晩かかって大まかな概要を纏めた因みに朝珍しく起きてこない俺を心配してきた真冬さんに「いけない事しちゃった？」と言われ俺達は全力で否定するがネタにされる事になるのだった。

第19話～面会と無能上層部～

某病院

此処に俺と真霜さんは来ていた。身分を表すために真霜さんはブルーマーメイドの制服俺は海軍の制服制帽をかぶり二人で病院に入り

「すみません、この方に面会可能でしょうか？」

真霜さんが看護婦の方に訪ね、後ろにいる海軍の制服をきた俺を見て

「大丈夫です、どうぞ」

案内されたのは個室の病室だったが既に先客が居た、招かれざる先客が

「ていのいい左遷のつもりですかッ」

「娘は命懸けでやったんですよッ」

病室から怒鳴る声が聞こえ、病室に入ると海上安全整備局上層部の人間数人が来ていた。そして俺を真霜さんを見ると

「これはこれは如月海軍大佐に宗谷一等保安監督官」

嫌なツラを下げた連中は

「今回は貴官に感謝せねばなりませんね、海軍のお陰で我々は赤っ恥を欠かずに済んだ。

最低限の装備をしているにも関わらず9人も死んだ。これではいくらお金をかけてもま……」

その時その幹部の胸ぐらを俺は掴んでいた

「これ以上俺を怒らせるな、ふざけた事言うのもいい加減にしろよ……最低限の装備?……あんなもん最低限以下の装備だろうが、お前ら無能と違い前線は現場は命懸けなんだよッ此処まで命をかけた人間を侮辱し故人を侮辱する貴方方の事といいあの時のことといい「上」に報告しますよ?」

俺は脅し

「なんのことかさっぱりだね、如月大佐」

そういう中

「哨戒艦みなみの中を我々が知らないとしても?「我々は全て知っています」今度そちらに私が出向きますので国防とは何とやらを教えて差し上げますよ「ど素人君」」

俺は言い切った。あの艦の内部を見たものとしてはあれはそのままにはできない。

「グッ……。如月大佐お待ちしております、では」

そう言い残しスーツ姿の男達は出ていく。隊員のご家族だろう俺という存在に警戒しているが真霜さんが紹介してくれ

「由希江さん、大丈夫彼はあなた方を救出に向かったイージス巡洋艦艦長如月優也大佐」

紹介すると

「覚えています、艦内で処置を受けていた時に意識を失いかけていたとき手を握ってくれた方ですよ、まさか艦長さんだったなんて」

彼女牧原由希江さんはい

「元氣になられて良かった」

俺と真霜さんは備え付けの椅子に座り

「由希江さん何も隠さなくていい、俺達はほとんど知っているだから心配しないで質問に答えて欲しい」

俺はい

「あ、あの大佐さん私達家族も同席しても？」

おやおおと聞かれ

「ハイ、娘さんの事でしょうから知る権利があります」

俺は答え質問をした

「海賊と撃ち合う時の装備は火力不足で防弾装備も最低限以下だった？」

聞くと

「.....」

最初こそは無言になるが、意を決したように

「はい、私達の武器は良くてサブマシンガンと拳銃そしてピストル程度の弾丸を防弾する程度の防弾チョッキとヘルメットでした……」

答え

「どっぴー」

真霜さんに聞かれ

「合ってる、現場に最低限以下の装備を押し付けあそこまで損害が出るのは予見できなかった。火力不足、防御力不足」

俺が言っていると

「娘がやはり何か悪いのでしょうか？」

心配されたように横から聞かれ

「いいえ、ご息女やお仲間が死力を尽くして任務を遂行しようと命をかけたでもそれに見合う装備が最初から積まれていなかったという事です。」

言うと

「どういふことですか？」

聞かれ

「ご息女が相手にしたのは確かに武装集団ですが持っていた武器が更にタチが悪い」

答え

「軍用の小口径、高速ライフルに対テロ用サブマシンガンで戦えなど無茶を通り越して無茶苦茶です。言い方が悪ければ使い捨ての駒です」

いい

「クソツ・・・あの小役人共」

さらに話を聞き

「ボディーアーマーの更新期限が切れていたのを上が無視した？」

これは初耳だった

「はい、みなみの艦長に聞けばわかります。艦長も上に再三具申していたそうですが無視された」と

由希江さんは言い

「あの如月さ・・・すみません大佐教えていただきたいんですが最終的にどのような結末になったのですか・・・あの事件は」

聞かれ真霜さんを見るが頷き

「君を含めた突入チームは9名が死亡し3名が重症、軽傷が2名気の毒だ。」

俺は答え

「相手は・・・」

更に聞かれ

「拘束2名他全員射殺」

答え

「みんな……」

涙を流し始め

「すまない、俺達の力が及ばなかったせいで君の仲間を救えなかった、本当に申し訳ない」

俺は頭を下げた。現場で指揮を取り突入作戦でも指揮を取った。だからこそ責任を感じた。

由希江さんは慌てて涙を拭き

「あわわわ、お顔を上げて下さい命の恩人なんですから」

由希江さんは言いそのほかも話を聞け

「分かりました、どうもありがとうございます。ごゆっくり養生してください」

俺と真霜さんは言い外に出てそのまま哨戒艦みなみ艦長にも話が聞け帰り道

「聞けば聞くほど怒りがこみ上げてくる……早急に「特殊部隊」の創設を急がないといけない。これ以上あんな光景は見たくない……」

俺は言い

「現場の声を無視したずさんすぎる体制もやはり何とかしないと。」

隣で真霜さんも言っている。

「前途多難ですね」

互いに言い、それぞれ調べる所を調べ家に帰るのだった。

第20話く無能を納得させる最良のプランく

海軍基地 如月優也大佐オフィス

「これじゃダメだ．．．これはこういった枠組みで．．．」

あーでもないこうでもないと唸りつつ海上安全整備局の上層部に説明するためのプレゼンを考えていたが

「やはり、これしかないですよ大佐」

オフィスにいる高本中佐もいった。

「やはりそうなるか、そうなるとお前に当分俺の代理をしてもらう必要がある。そうするとSBU経験者を最低30人1個小隊分の人数を引つ張っていつてブルーマーメイドの哨戒艦に乗船し実際に「戦つて」その有用性を示すしかない。恐らくはこの手段を取ればあいつらは俺達を今度こそ本気になって殺しに来る。かなり危険度の高い任地に駆り出される。」

俺は言った。表向きにはあの事件は解決したが海上安全整備局は納得はしてはいないだろうすなわち今度こそ「合法的に」俺達を殺す機会が巡ってくる事になる翼は

「本当は反対ですが最悪は仕方がないですね．．．」

そう言い紙を見て

「共同司令部を立てるんですか?」

言い

「ああ、そのほうが軋轢が生じずに済む。司令官をブルーマーメイド側からそれを補佐する側としての副司令官を海軍から」

説明し

「あくまで仮の案だ本案ではない。とりあえずどれほど有用性が合って犠牲を最小限に防げるかこれが狙いだ。」

俺は言い

「そうですね、やはり「戦う」しかないんですね」
そういった。

夜 宗谷家

「え?!・・・一時的にブルーマーメイドの哨戒艦に配置してもらえないって?!」

真霜さんが驚いたように言い

「なんか考えがあるんだろう?」

真冬さんも続き

「聞かせて頂戴」

真雪さんも言った。そこに

「如月さん、なんか用事であるんですか船に？」

ましろさんにいわれ

「ほら、勉強の時間だよ？」

真霜さんが言い

「もう、そんな無下にしないでいいじゃないですか」

言いながら自室に引つ込む。それを確認し

「上層部に分からせるためでもありますが、ブルーマーメイド哨戒艦に海軍特殊部隊員らを一時的に乗艦させ海賊などの武装集団との戦闘の際には全てこちらで引き受けま
す、能力を知ってもらうためです。もちろんこちらにもリスクがありますがそれを侵さ
ねばまた「あの時」の事件の二の舞になってしまう。」

説明し

「なるほどな、あの無能な連中に分からせる為に戦うってか」

真冬さんは言うも

「正直おすすめはしないな。そうならば今度こそ本気であんたを殺しに来るぞ、上層部

は。それも「合法的に」

真冬さんは言い

「それが結果なら私は軍人です甘んじて享受します。自らの能力不足で死ぬのなら」

答え

「認められないわ、ブルーマーメイドの艦艇で海軍の隊員それも高級将校を死なせたらそれこそ大問題になる。私は責任を負うのにやぶさかではないけれども前にも言ったでしょ「貴方は必要な人間」だとむぎむぎ死にいくような方法を私が許すとも思う？」

真霜さんに言われ

「私も半分は同感ね如月さんを死なせる訳には行かないわね、でもこれは一部使える案である事には間違いないわ」

真雪さんが言い

「お母さん?!」

真霜さんが言い

「能力は戦ってみないと分からない」

次の一言が被る

「「実戦に勝る訓練はない」」

俺も真雪さんとハモるように言い

「お分かりですか？」

聞き

「ええ、訓練と実戦はてんで違う。実戦に勝る訓練はないならばどの程度の能力を持っているかを証明するには戦うしかないでしょう」

言うも

「まあでも現場の最高責任者は真霜だから真霜が許可を出さねばこの案は使えないと思うけどもね」

真雪さんは言い

「もう・・・わかったわよ。但し、その説明には私も同席するからね。連中がどんな無理難題を押し付けるか解ったものじゃないから」

真霜さんは言い

「それで構いません」

俺は言った。

自室

「選抜メンバーは・・・これでよし・・・武器もこれでよしあとはどのくらいの派遣期

間かによるなだな」

考えてると

コンコン

律儀にノックする音が聞こえ

「どうぞ」

書類を見てると後ろから気配を感じ振り返ると真霜さんがいる作業を止めると彼女は

「本当に行かないとダメなの？、それしか本当に手段がないの？」

言った。

「部下達だけを行かせて何かあれば俺は絶対に後悔する。それにこの時代に来た時部下達と決めた「運命を共にする」と」

真霜さんに答えた。

「正直に言うとう貴方に行つて欲しくない、あの事件の時最初の「イージス巡洋艦襲撃事件」の時攻撃の一報を聞いた時感じた、「どうして守って上げられないのだろう」すごくもどかしかった。」

真霜さんに言われ

「その気持ちだけで十分です、いつも人生は自分の判断で切り開いてきた。今回もこの

判断が最善だと思つてゐるからこそです。」

答えた。ミスは許されぬ、ミスを犯せば俺仲間が死体袋に入る事になつてしまふ。そう言う瞬時の判断が求められるのが特殊部隊でもある。

「二つ約束して、私も貴方もリスクを犯すでも必ず帰還する事部下を全員連れて私は彼女たちを守つてあげる事ができなかつたでも貴方なら出来る。」

真剣な表情で彼女は言い

「約束するよ、誰一人部下を死なせず無事に戻る。あんたの期待や上層部の連中に一泡吹かせてやる。」

真剣に言い

「解つた、説明する時最悪の状態になつたらさつき案を使う事で構わないのね？私も最善を尽くすわ。絶対」

そう言い残し彼女は部屋を去つた。

第21話～海上安全整備局上層部～

海上安全整備局

「如月大佐、貴官の概要は読ませて貰ったが我々はこのような部隊を必要とは思わない」
一言言われるが、これは想定範囲内だ

「此処にいる皆様は現場の状況をご存知でしょうか？まずはこちらをご覧下さい」
艦艇内部の装備を見せる

「まず臨検用の装備ですがこれでは正直話にもならない、防弾ベストの更新期限が全て過ぎていく上に防弾能力を示すランクも全く見当違いの物を装備している。そして戦闘に使用する火器も又然りです」

説明し、大石司令長官が今度は立ち上がり

「我々海軍としても今回の事件は胸を痛めている、優秀な隊員らが死んでいくのを黙って見ていくだけなど我々にはできない。同じ海に生きるものとしても海を守るものとしても」

大石司令は言い続けて

「この防弾ベストを」覧下さい、ブルーマーメイドの臨検要員や非常用に着用するベス

トになります。が、どれもレベルⅠ良くてレベルⅡこれでは9mmパラベラム弾やマグナムは防げて他は貫通してしまう、ましてこれに経年劣化による劣化が加わればないと変わりません。こちらが我艦に置いてあるプレートキャリアですがこれはレベルⅢAK47などの自動小銃の弾丸まで防ぎます。これくらいのレベルの防弾装備が必要にも関わらず準備されていない。武器も臨検を想定するならばお粗末である。アサルトライフルに対して良くてサブマシンガン中にはリボルバーも確認されました。」

説明し

「艦艇にお金を回す余裕が有るならば乗員のための装備を整えるべきと思われます。まともな装備もナシに敵に立ち向かった彼女らは「英雄」共言えるでしょう、言っても分からなければ貴方自身が体験するのもよろしいでしょう」

俺は言っていると

「宗谷君、君の意見はどうなんだ？現場出身だろう」

上層部幹部は言い

「はい、私は大石司令や如月大佐に全くの同感です。此度の事件において優秀な隊員、ブルーマーメイドの未来を背負ってくれるはずだった隊員など優秀な人材を失いました。私は再三に渡り具申したはずですが、「艦艇が優先なのですか」とそのつけがこれです。私は現場の隊員を守る責任がある。上層部の貴方方が現場の意見を無視し続けた結果が

この最悪の結果に繋がりました。私は特殊部隊創設に全面的に賛成です。」

真霜さんは言ってくれたが

「うむ……しかし書面には「選抜」した人員に「特殊」かつ「高度」な戦闘訓練を施すと書かれているがこれはあまり例を聞いた事がない。」

これを聞き俺も大石司令も真霜さんもアイコンタクトを取り
「モデルケースが必要ですか？」

真霜さんは言い

「そうだな、高価な装備を使用し能力が発揮できなければ意味がない。それに成功する宛があるのかね？」

一人が言い

「やはりこのような理解しがたい非現実的な物よりも艦艇を増やすことが先決じゃないのかね？我々は海軍に遅れを取っているこれは事実だ」

その物言いに

「あなた方は自身の組織のプライドの為だけに平気で部下を「使い捨ての駒」にできるのですか？私はその考え自体が理解できない」

言い

大石司令も

「モデルケースが必要ならば如月大佐以下30名の特殊要員を期限付きで「海上安全整備局にお貸ししよう。彼らは「ここに来る前の時代」で「特殊部隊員経験者」だった。とりわけ如月大佐は実戦経験豊富な指揮官だ。此度の貴方方の尻拭いも彼が直接指揮を取った。これならば十分なモデルケースになるだろう？」

大石司令は言い

「くっ……それならば、認めましょう……」

モデルケースが必要とされる事を見越して既に経験者内から人員の選抜や装備の準備までを済ませていた。そして

「入って頂戴」

真霜さんが言うが入ってきたのは何と哨戒艦みくま艦長の秋元沙雪さんだった。

「宗谷」等保安監督官の指示で如月大佐ら「特殊要員」のエスコートを仰せ使っておりすよろしく願います。」

挨拶を受け

「ご厄介になります」

俺は答えた。こうして正式に許可が降り部隊は行動できるようになった。海軍の基地で少し訓練をし任務に当たる事になる。

第22話～繋がり～

海軍室内戦闘訓練所

「ダメだ、後5秒は縮められる」

俺達は徹底的に感を取り戻すために訓練を行っていた。射撃、射撃、射撃そしてまた格闘、格闘、格闘と。格闘、格闘、格闘と。

俺自身が手本を見せるため準備し

「GOGO」

スタートの合図と共にフラッシュバン、そしてMP7、ナイフと装備を的確に使用し室内のクリアリングや射撃などを片付ける。そしてコースを一通り終えモニターリングしている仲間達の所に戻るとそこに宗谷さん親子に大石司令も来ていた。

「隊長には敵わないですね」

一人が言い

「隊長は何秒短縮した？」

部下が聞き

「聞いて驚くなよ、俺達には5秒縮めろと言ったが隊長は7秒縮めてる。それも誤射ゼ

口室内クリアリングミスゼロ 完璧だ。」

部下達は言い

「流石だね、如月大佐」

聞こえ、大石司令の存在に皆気づき

「敬礼ッ」

皆敬礼し

「これが海の守護神とも言える特殊部隊の実力かモニターを拝見させてもらっていたがターゲットはどれもこれも頭に穴だらけだ。いかなる状況においても一撃で制圧する、全員が如月大佐クラスの実力者と言う訳だ」

大石司令は言い

「とんでもない実力者ね艦の指揮を取りそして現場での作戦の指揮も取れる。そんな優秀な人間はそうそういなわね」

真雪さんに言われ

「私達が最終的に目指すのがこの領域ね・・・何年かかる事か・・・」

真霜さんは言ったが

「一長一短でなくとも良いんです、自分達もここまで来るまで相当な訓練に次ぐ訓練そして実戦に次ぐ実戦と戦ってきましたから」

俺は答え

「大石司令長官、装備の予算要求や部隊創設にかかる予算等通りそうですか？」

MP7からマガジンを抜き訪ね

「そこは心配ない、貴官が詳しくまとめあげてくれた資料のお陰でただ装備品等に関しては一気に全部とはいかないやはり高価な武器ばかりだから、今大鷹総理とアメリカのドラルド大統領と交渉しているそうだ。」

話を聞き

「そうですね、当分は既存の武器で頑張るしかありませんね」

答えた。この国の国産ないしライセンス武器のほとんどが俺の知りうる武器だった。主力小銃が89式小銃の固定銃床式と折曲式であり拳銃もSIG220事9mm拳銃だが不思議な事に海上安全整備局にはこの武器の納入記録がないつまりは使用されていないと言う事になる。その後、装備品と武器を纏めあとは出航する時に持ち込めるように準備を整えた。最後に大石司令から明日明後日の二日間は骨休めをしろとの事で派遣要員らには休養が告げられた。

夜 宗谷家 夕食後

「今のうちに言っておかないとフェアじゃないから言っておきたいのだけどあなたの派

遺場所……」

真霜さんがためらいながら言ったのは重要な所だったが

「真霜姉やつぱりそこか、上層部の連中結局使い捨てのコマ扱いかよ」

真冬さんが言うが

「事前に調べていましたが、確かにある程度の危険度はありますが私の時代の所に比べれば遥かに低い、そして部下達の練度や経験を考慮しても十分に対処できる。」

言い切った。ソマリアの海賊に比べれば可愛いもんだとも思えた。無論舐めて掛かっているわけでもない。

夕食後に自室でとある物を書いていたまあ実戦に赴くならば書くのが当たり前だが俺には・俺達にはあいにくと家族がない。でもしたためて置く。「遺書」を

そうこうしていると

「空いてる？」

声が聞こえ

「どっぞや」

慌てて遺書を隠す。真霜さんは部屋に入ってきて座り

「なんか片付いてるね？官舎もう空いたんだっけ？」

聞かれ

「いや空いてないよ。ただ片付けただけ」

すつとぼけたがこれはいわば後腐れないようにと思つてやった事だ。もし「戦死」したとしても元々この時代の人間ではない俺は失う物は少ない。むしろ在るべき所に帰るだけかもしれない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

真霜さんは無言になったかと思うと

「ねえ今日は語り明かしましょう明日と言いま後日と言いまこのプロジェクトに関わつてる私も半半ば強制的に休まされてるし、寝袋持つてくるからさ」

言われ

「構いませんよ」

俺は答えた。こうして真霜さんといろいろな事を話した。そして・・・・

真霜 side

「ようやく眠つてくれた、こんな事するのは好きじゃないけど明らかにおかしい昨日の今日でこんなに部屋がきれいになつてるし」

寝袋から起き上がりそつと部屋を見て気づいた、引き出しが半分空いている。これに気づき引いてみると

「ごめんなさいッ」

内心思い引いてみるとそこから出てきたのは

「へ．．．．遺書」．．．」

私はその二文字に固まった、しかしよく考えれば当然だこれが覚悟の差なのかもしれない。私達もそれは覚悟はしているでもここまで明確な意思表示を見たのはあまりない遺書をそつと戻しお手洗いに行ったかのように装い部屋を出て戻りまた寝袋に戻る、そして彼の寝顔を見て

「どうか無事に帰って来てくれますように．．」

私は思った。それと同時に心のモヤモヤ感がより大きくなってきたのを感じた。

「何なんだろう、このモヤモヤ感は」

そう思いながら眠りについた、彼の手をそつと握りながら．．

第23話～デート～

朝、意識が覚醒に向かうにつれ違和感を感じた。体が動かない……まるで何かにガツチリと押さえ込まれているかのように

「????」

目が覚めると真霜さんに抱き枕にされているのがわかる

「起きて下さい……起きて下さい……」

耳元で言うも効果なし。しょうがないので無理やり引き剥がしに掛かりそれと同時に目が覚める。

「う……ん……?」

目が合いそして彼女も現状が飲み込めてきたのか

「(ぎょ)めんなさいっ」

彼女も顔を赤くし離れる。そして朝食時俺は真雪さんに

「突然で申し訳ありません、ですがこれをお預かり頂けないでしょうか？」

真冬さんに真白ちゃんそれに真霜さんがいる中昨夜の書いた「遺書」を差し出す

「お……お……」

真冬さんが言い

「如月さん……」

真白ちゃんも言い

「……」

真雪さんは無言で受け取る素振りも見せないため

「無理を言っているのは重々承知しています。」

言うところ

「一応お預かりは致します、ですが必ずお返し致します。意味わかりますね？」

真雪さんは真剣な表情で言われ

「ああ……なるほど必ず生きて帰れって事なんだな……」

思っているのと横から手が出て

「お母さん、この遺書私が預かってても？」

真霜さんがすこぶる怖い顔で言い

「ええ、構わないわよね如月さん」

真雪さんは言い

「構いません」

俺は言いつつがなく朝食が進み後片付けをし今日はゆっくりしようかと思っていた。

明後日からの準備は既にできている為。

「(今日どう過ごすかな・・・)」

一瞬ボケーつとすると

「今いいかしら」

背後から真霜さんに声をかけられ

「はい、構いませんよ」

答え

「自室に来て頂戴」

そのまま彼女に引きづられるように自室に連れて行かれ

「覚悟ができてるのは私もわかる、軍人だし方が一という事がないとも言切れないでも・・・それでも必ず此処に帰ってくると言つて欲しい前に私言つたよね、「他人だとは思ってない」と」

真霜さんは相変わらず怖い顔をしている。さすが現場最高責任者、一巡洋艦艦長とは違ふと関心しつつ

「それでもです、必ず帰れる保証など何処にもない、現場を経験なさっている貴方ならおわかりでしょう?」

俺は言つたが

「じゃあ、約束。遺書は責任もって預かるでも期間終了後、帰還後に必ず貴方に返す
良いかしら?」

真霜さんは言い

「解った、約束する」

一言言い

「この話はおしまい、でも明後日から行っちゃうんだよね・・・最後の骨休めというわけ
ね」

真霜さんは考えるかのように言い

「よし、ドライブに行きましょう」

彼女は言い俺が返事するのを待たずに着替え始め

「私の着替え見たいんですか?」

意味深な事を言い、慌てて自室に戻りそれなりの外出着に着替える。そして俺は彼女
の車の助手席に座りサンングラスをかけ外の景色を楽しむ。

「サンングラスなんて必要?」

運転しながら彼女は言い

「腕利きの狙撃手は目にも気を使うんだよ」

答える。彼女は色々な所に連れて行ってくれた。海・美味しいカフェに色々な所に。

そして夕方彼女は灯台がある場所に連れてきてくれた。

「幼い頃、此処から妹達と母を．．．大和を見送ったものだったわ．．．」

彼女は言い俺も水平線の先まで眺める。

「そうか．．．．．」

俺は終わりのない、見渡す限りの水平線の先までを眺める。

「海とは．．．こんなにも綺麗なものなんだな．．．．．」

海をゆつくりと落ち着いた状態で見た事はなかった。常に俺が見てきた海は人が死んでいった海、命が散っていく海、血で汚される海．．．自衛官として常に領土を守る為にそして国民を守るために特殊部隊員として艦艇の艦長として戦ってきた。

「．．．．．」

「．．．．．」

二人で沈みゆく夕焼けを眺めて居ると真霜さんが

「寂しくなりますね．．．それに貴方の美味しいご飯が食べられなくなるかと思うと」

真霜さんは言い俺が何か言おうと振り向くと彼女が抱きつき顔をうずめ

「今だけは．．．こうさせて．．．お願い．．．．．」

彼女は．．．真霜さんは泣いていた。

「．．．．．」

ただ俺は泣き止むまで彼女を抱きしめてあげることしかできなかつた。その日の夕食は彼女の好きそうな物を振舞う事にし俺はハンバーグ・コンソメスープ・サラダ・にご飯と食卓に並べた。

「すごいわね」

真雪さんが言い

「おいしそうです」

真白ちゃんも入っている

「イージス艦の艦長にして元特殊部隊員そして海軍のエリート士官。料理や家事全般は完璧これで擦り寄る女がいないのが信じられないわな・・・」

そして

「この料理が食べられなくなるかと思うと・・・本当に寂しい・・・」

真霜さんはテンションが下がってる

「あれ?!しくったか・・・」

思いつつ

「食べましようか」

俺は言い

「」「」「頂きます」」「」

食べる。

自分も食べ

「うん……いつも通りだ美味しい」

食べ

「サラダやスープもおかわり作ってますよ、後はハンバーグもパンとサラダでハンバーグにできますからどんどん食べて下さい」

俺が言うのと真霜さんが半分ヤケ食しているかのようにあれこれと食べるそれも半泣きの状態で

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

俺達は半分口が相手塞がらず、周りも同じだった。

夕食後

真霜 s ルーム

「どうしたんだよ真霜姉様子へんだぞ」

真冬が真霜に言い、真霜に言い

「笑わない？」

真霜は言い

「ああ、わかつたつて」

真冬が言い

「私……如月さんに胃袋掴まれちゃったかも……」

恥ずかしそうにかつ真つ赤にしてい言う真霜に対し

「……へ?!……」

真冬は言い

「真霜姉……それまじ……」

真冬が聞くが

「……うん……だつて……彼の料理じやないと満足できないもの……以前のようなジャンクフードばっかの生活じやもうダメかも」

言うと

「はあ……鉄壁の女が恋ね……やつとと言うかようやくというか……だつたら先制攻撃あるのみでしょ。あの人がどういう女性が好きか知らないけどいま現状真霜姉は論外だと思ふよ、仮にだよ……仮に結婚するにしても相手は海軍士官それも現役のイージス巡洋艦艦長、現場勤務まあ准将とかに昇給して現場から離れればいいかもし

れないけどそれ以前に家事は？子供が生まれて子育ては？正直真霜姉壊滅状態じゃん結婚は理想論では語れないけどだから、真霜姉はずぼらな性格自体を直さないとスタートラインにすら立てない」

真冬に現実を突きつけられ

「もしかしたら今回の航海で嫁さん捕まえてきちやうかもよ．．．案外人気だし出しね本人は知らないけれども。あの若さで海軍大佐、いずれは将官に昇給するのも時間の問題。家事スキルは万能。仲間思いケチのつけようもない経歴だし」

真冬は言い

「ほかの女に取られなくなけりや、女を磨くしかないでしょ。まず家事そして料理そして性格」

真冬に指摘され

「なんとかしないと．．．」

そんな事を思っているその頃

優也 s ルーム

「いよいよサイは投げられたか．．．俺達が勝つか俺達が負け死体袋の山になるか」

そんな事を思いつつ先ほどの事を思い出し

「真霜さん大丈夫かな．．．」

珍しくも任務外の事を考えていた。まあまだ任務に就く前だし良いだろうと思っていた。向かう任地がこの世界においてはかなりのやばさを誇るホットゾーン・危険地帯というのが俺達特殊部隊員を殺る気にさせる。「遂行できぬ任務はない」と思える程にそして必ずやり遂げ帰還するとも思っている優也だった。

第24話～死地へ～

哨戒艦みくま艦内

「装備よし・・・銃器に異常なし・・・」

武器庫を確認し鍵を閉め

「ありがとう」

同行してくれたブルーメイアの隊員に御礼を言い次にヘリが二機鎮座している格納庫に趣いた。格納庫では既にパイロットがチェックを進めており

「敬礼ッ」

俺に気づいた一人が言ったが

「気にしないで進めてくれ」

俺は言った。当初連れて行く部隊は一個小隊にするつもりだったが艦内の志願者が多くかつ人員が多い方が良いと判断され「はぐろ」の要員は今現在陸上勤務に変わり艦内のメンテナンスを行う為にドック入りしたのだった。そのため連れてきた兵員は二個小隊60人多少な大事でも対処可能な人数だ。ローテーションで回すこともできる。

「ついてきてくれて感謝してるぜ相棒」

本来ならば残る筈だった高本中佐も付いてきてくれた為にベスト状態のチームと言える。

「どうだ異常はないか？」

高本中佐が聞き

「はい、中佐異常はありません。燃料の方もみくまの貯蔵庫にあるそうで助かります。」

一人は言い

「装備はM2とM134ミニガンですが大丈夫ですかね」

重火器をチェックする要員が言った。この海域計りの危険度らしい調べもしたが主にはびこってるのは「中国人武装集団」という名の海賊がはびこっている。狙われるのは主にタンカー・客船などであり身代金を要求する。経済的に余裕のある所は自衛手段として武器を使える人間を雇ったり大国であればブルーマーメイドによる護衛が就く。だがこの連中はタチが悪い重火器を装備している為ろくな装備を持たない艦艇は太刀打ちができない但し軍用艦を除く。だが俺達特殊部隊は違う。今回は陸軍も協力してくれ重火器の一つ85mm無反動砲まで横してくれた。

「ふう・・・装備品はひとまず異常なしか・・・とりあえず待機室に戻るか」

高本中佐に言っていると

「如月大佐、艦長と副長がお呼びです。こちらへ」

一人の隊員に案内され

「解った、高本中佐頼む」

俺は言い

「了解です」

俺は彼女の案内に従い艦長室にてノックする

「海軍特殊部隊指揮官如月優也大佐です」

すると

「どうぞで」

声が聞こえ中に入り中に入ると艦長の秋元さん以外にも一人女性がいた。

「初めまして、みくま副長藍原詞乃です。」

副長藍原さんが自己紹介し

「お噂はかねがね優秀な艦長とも私も艦長も「身を持って体験済みです」

彼女が言い

「なるほどね・・・あの事件時に現場海域にいたものな」

俺は言い

「でも君らが優秀な指揮官、副官である事に変わりはない。最新鋭のイージス巡洋艦をあそこまで追い詰めるとはね大したもんだ、俺達も傲りがあつたかな「イージスは万能」

だと」

俺も正直に褒める。しかし彼女も

「いえ、私達はいわば執行猶予の身表沙汰になれば全員は処罰を受けるのは必須だった。にも関わらず如月大佐が庇って下さった。私達クルーは一度死にそしてもう一度生まれ変わって此処に居ます。ですのでみくまクルーは全員が大佐の味方です。今回の作戦前にも私と艦長で全クルーの調査を独自に行い結果上層部と繋がっていた新顔を三人排除して居ます。資料はこちらになります」

藍原さんによこされた資料を見て俺はまた呆れた

「はあ……これ本当か？今度はみくまを沈めるのか、懲りない連中だ」

俺は言い

「この件、宗谷さんには？」

聞き

「既に報告済みです、今頃尋問されているのでは？」

彼女は言い

「オー怖い怖い」

俺は言い

「短い期間ですがよろしくお願ひします如月大佐」

彼女、藍原詞乃さんと出会い俺達を乗せた艦はこうして任務を開始した。

第25話〈恋煩い〉

「……………」

夕食中に視線は真霜に向かうが気付く気配がなく

「真霜、どうしたの?」

真霜は言い

「……………え?……………何でもないよ?」

真霜は否定するが

「お母さん、ようやく真霜姉にも遅先の春が来てるんだよくくく」

笑いながら真冬は言い

「どういう事?」

真雪は真冬に言い

「真霜姉いわいる恋煩い状態になってるのさ、今まで美味しい料理を作ってくれる如月さんが居たけど、任務で離れてしまい真霜姉は尚の事本人を意識してしまう。そしてこの残骸」

真冬は説明し

「あらあら、いい事じゃない」

真雪は言い

「如月さんが家にこのまま婿養子に来てくれれば安泰ね」

真雪は納得するが

「お母さん、それは無理だと思う」

以外にも真白が意を唱えた

「真霜姉に如月さんは勿体無い。あんなに若くしてイージス巡洋艦の艦長に抜擢されるほどのエリート将校な方ををズボラで家事のこともできない真霜姉さんを押し付けるなんて言語道断だよ、苦勞するのも見えてるしそしたら確実に真霜姉は如月さんのお荷物になるもん」

真白は言い

「私も同感だ、第一仮に如月さんが真霜姉でも良いと妥協してくれたと仮定しよう、結婚すれば当然子供も生まれるだろうし色々とかかるその度如月さんにおんぶに抱っこでは愛想つかされるのもわかりきっている、まあ私も人の事を言えた義理ではないけど」

真冬は一旦切ると

「だから、真霜姉を矯正するんだ仕事のパフォーマンスにできるなら炊事や家事ができないわけがない。ボケっとしてると本当にかっさらわれて行っちゃう。あんな超が付く

ような最優良物件は逃す手はない。」

真冬は言い

「そうね、それに如月さんに炊事は任せきりに近い状態になっていた物ね」

真雪さんは言い

「うん．．．．私やるよ．．．」

並々ならぬ闘士を燃やした目をした真霜は箸を置き

「上等よ．．．．彼が帰国するまで何ヶ月だったかしら」

真霜は言い

「えっと．．．．二ヶ月弱のはずだけど」

真冬が言い

「わかったわ．．．それ位くらいの時間があれば上出来よ．．．さつきから黙って聞いてれば真冬も真白も酷い言い草ね．．．完璧なまでに全てをこなして見せようじゃない。」

これには真冬、真白の二人も

{あ．．．．やばい．．．．}

真冬が思い

{あ．．．．．．．．．}

真白も感じたが後の祭り

「二人共言い過ぎよ」

二人を宥め、流石に二人も

「でも如月さんと真霜姉さんとか・・・そしたら如月さんの事をお義兄さんってよべるね」

真白は言い

「なるほどな、確かに・・・ブルーマーメイドの家系に海軍士官それも高級将校が婿入りなあ・・・」

真冬がふざけた事を入っているその頃

南シナ海 哨戒艦 みくま 艦内

「ふう・・・」

バックから最初の航海時に真霜さんから頂いたお守りを俺は取り出し

「約束は必ず守るよ・・・必ず全員連れて生きて帰る・・・君のもとにね」

出航前に交わした彼女との約束を思い出すそうしていると

「如月大佐、夕食の準備が整いました、幹部食堂までよろしくお願いします。」

ドア越しに言われ

「分かりました、士官の連中連れて伺います」

答え、お守りを胸ポケットにしまった。

第26話〈戦果と帰還〉

日本

海軍横須賀基地 第一艦隊司令部

「ほう、如月大佐らはこれほどまでに多大な戦果を挙げてくれてか」

大石司令長官は言い

「はい、司令長官。このままいけば海上安全整備局も「特殊部隊」の有用性を認めざる負えないでしょう。如月大佐の大手柄です」

原少将は言い

「そうだな、彼は色々とプランをだし要員の選抜方法や教育法なども既に確立済みだと言うのだから司令部も驚いていたものだ」

大石司令は言い「コーヒーをのみ」

「如月大佐にも早いですが准将の昇進の話が出てきていますが？」

原少将は言い

「なるほどな、だが彼は辞退するだろうな」

大石司令は言い

「彼は現場主義の人間だよ原少将」

大石司令長官は言った。ミサイル巡洋艦「はぐろ」は先の戦闘で細々とした所の修理や使用したVLSのミサイル補充・そして要員らは指導教官として派遣されている。

「如月大佐らが帰還すれば艦は直ぐに現場に出れる状態になっています。」

原少将は言った。

「うむ、帰還が待ち遠しいな」

大石司令長官も満足げに頷いていた。そこに

「そういえば、司令士官官舎ですが空きが出たと報告があります。大佐には移ってもらいましょう」

原少将が言い

「う・うむ」

歯切れ悪く言うのであった。

所変わってブルーマーメイド司令部

「へえ、すごいわね大佐らも。片っ端から海賊の拘束やシージャックの解決など功績は大きいわね」

哨戒艦「みくま」から送られてきた報告書に全て目を通し満足げにデスクに座る宗谷

真霜はみた。

「海軍の方に伺ったのですが、如月海軍大佐には帰還後に准将に昇進の話が既に上がっているとか。もし実現すれば最年少での海軍准将に昇格になります。」

部下の福内と平賀は言い

「最年少……か」

真霜は言い

「昇進とかそういうの以前に無事に帰ってきてくれればそれでいいよ……うん、無事に帰ってきてくれれば」

真霜は言い

「……………」

「……………」

平賀や福内はその言いように言葉を失うが

「ごめんなさい、それで哨戒艦「みくま」の帰還は今日の何時頃かしら」

真霜は言い

「はい今日の午後0600時頃になります」

福内が言い

「今日の夜には帰ってくるのね、ありがとう」

真霜は言った。

「二ヶ月の特訓の成果を見せる時ね」

真霜は内心思っていた。その頃日本領海に入り軍港を目指していた哨戒艦「みくま」は

哨戒艦「みくま」

「長いようで、短かったな」

思いながら荷物を纏めていた。二ヶ月で数多の武装集団の無力化・そしてシージャツクの解決に大きく貢献でき安全な海にするために最善を尽くせた。そして部下達も無事に連れ帰れた。言う事はない。そう思っていると艦長と副長の二名が部屋を訪れ「如月大佐、今回は共に仕事ができ、光栄でした。海の精鋭の実力を目の前で拝見でき大変になりました。乗組員に対する熱意あるコンバット指導など数々のご教授感謝致します」

彼女らは言い敬礼し

「俺達も大変有意義な二ヶ月を過ごさせてもらった。また一緒に仕事をする機会があれば是非よろしくお願ひしたい」

俺も敬礼する。二ヶ月の間にこれだけの成果をあげればあいつらも何も言えない

と俺は思っていた。そして夜、哨戒艦「みくま」は帰還俺達は誰ひとりとして欠けること無く祖国日本の土を踏みしめたのだった。

第27話〈帰還と昇格〉

宗谷家

「かんばーい」

声が響く中ダイニングには料理が並んでいた。

「これを真霜さんが?!」

海軍の軍服を着たまま俺はぼかんとして言い

同席している大石司令も

「大佐、失礼だろう? わざわざ作って下さったのに」

窘められ

「すみません、司令でもびっくりした。たった二ヶ月でこの腕前は……」

真霜さんを見る

「お口に合うといいけども」

言い、俺も大石司令も箸を付け

「う……うまい……」

俺は言い

「うむ・・・美味しいね」

司令は言った。ほかの料理共にケチのつけようがないレベルだった。それだけでなく部屋の掃除やそのた家の家事も完璧にこなして居るのだから驚く。そこに大石司令から爆弾が二つ落とされた。

「如月大佐、帰還早々だがまずは最初におめでどうと言っておこう」

大石司令は仰り

「何がですか？」

俺が言うと

「今回の君のいや君達「クルー」の働きは抜群に良かった、「特殊部隊」の創設案に「隊員選抜案」そしてその選抜人員の「教育案」そして「装備」そして実用性の証明。全てをこなしてくれたその功績は大きい昇進だ「如月准将」

言われ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

イマイチ理解が追いつかない中

「おめでどうございませす、如月さん」

真白さんが言ってくれ

「おめでどう、貴方のように若くて実力のある人は年齢なんて関係はないのだから」

真雪さんも領きつつ言い

「そうだな、まさか本当に昇進しちまうとは」

真冬さんも領きつつ言っている

「おめでとう」

真霜さんも笑顔で言ってくれるが

「司令、将官になるという事は・・・」

俺自身昇進はありがたい事だとも思っているが懸念事項があつたが

「心配せんでもいい、君は准将になるが現場勤務のままだ。まあ異例だが艦長職はその
ままだ。」

大石司令は仰り

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少し考えた後

「謹んで拜命致します。」

俺は答えた。要は准将に昇格はするが現場でもつと経験を積むと良い。と言うこと
なのだろう。そしてもう一つ

「それとな、海軍の士官官舎だが空きが出たという事でな如月大佐官舎に移つてはどう
かと思つてな。」

大石司令は良い

「へっ?!」

驚いたような声をだし真霜さんは言い

「如月さん帰っちゃうんですか?」

真白さんも寂しそうに言い

「晩酌してくれるやつが居なくなるとこれはこれで寂しいがな」

真冬さんは言い

「貴方がよければまだ居ても全然いいのよ、部屋の空きもあるしね」

真雪さんが言ってくれた。でも規則は規則だし

「皆さんそこまで言ってくれてありがとうございます。でも私も海軍士官です規則には従いませんと部下達に示しがつきません」

言うつと

「もう将官だろ」

真冬さんに突っ込まれるが

「そこ突かれると痛いですね」

言い

「司令、でしたら私は官舎に移動という事で・・・」

言おうとしたが

「如月大佐、残念ながら空きはたった今なくなつた。貴官は引き続き此処でお世話になりましたまえ」

大石司令は言い

「へっ?! さつき空きが空いたつて司令がおつしやつたじゃないですか?」

状況が飲み込めずに言うが

「無いものはないのだよ、そういう事だ」

そう言われ

「・・・・・・・・・・・・・・・・もう少しお世話になります・・・・・・・・」

言うと

「もう少しなんて言わず居れるだけいろ」

真冬さんが言い

「あはははは・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・」

ため息をつくしかなかった。結局このまま俺は滞在延長が伸びた。なぜか真霜さんが嬉しそうにしているようだった。

第28話～次世代を担う防人達との邂逅～

「結局報告書上げないといけないのね……」

げんなりしながら防衛省から出てくる。だがこの世界は本当に良い。軍服を着ていても白い目で見られない。支給され早速着用している海軍准将の服をまじまじとみて

「准将ねえ……実感ないな……」

制帽を被り門を出る。

「腹減ったな……どつかで飯でも食ってくかな……」

そんな事を思っていると

☒~~~~☒~~~~☒~~~~☒~~~~

携帯がなり

「ん？真霜さんからだ」

電話に出ると

「ごめんなさい、今日夜遅くなりそうで夕食作れそうにないの代わりに頼んでも良いかしらっ？」

言われ

「オツケー、作つとくから仕事片付けてらっしやい」
電話を切り

「さてと、適当なところで昼食を済ませて帰るか」
そう思つてると

「やめて下さい」

「もかちゃん！」

二人の少女がチンピラに絡まれているが悲しいかな周りの人間は見て見ぬ振りをしている

「全く……いい事ばかりじゃないってか……」

ため息を付きつつ

「おい、真昼間から情けない事してるんじゃない大の大人が」

腕を掴みそいつらは俺の方を見るが、軍服の効果が凄まじいものだとかわかつた瞬間でもあつた。

「か……海軍のじゅ……准将……」

腕を離し

「ナンパなんぞさ泣けないことしてないでやる事あんだろうが」

一喝するとそそくささ行つてしまった。向き直り

「大丈夫かい？」

尋ねると

「えっと、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

二人の少女は言うが若干怖がっているかのような感じだったため

「ごめんごめん、怖がらせちゃったみたいだね。私は如月優也海軍准将だおふたりは？」

聞き

「知名もえかです」

「岬明乃です」

二人の少女は言い足元に落ちている教科書や筆記具たりから勉強でもしているものだろうと推測できた。筆記具や教科書を拾い

「はい」

二人に渡し

「ありがとうございます」

二人は言い

「海軍の方ですか、将来お仕事を一緒にできるといいですね」

知名さんは言い

「うん？君海軍志望かい？」

尋ねると

「いいえ、私達はブルーマーメイド志望です」

二人は答え

「そうか、そうだな将来どこかで一緒に仕事ができるといいな」

そう言い

「おっと、そろそろ戻らなきゃあまたどこかでご縁があれば」

言い残しその場を去った。二人は

「すごい若い准将さんだね」

明乃は言い

「相当なキャリアエリートな方なのかもね」

二人も言いその場を後にした。昼食を取り家に帰った。そして久しぶりにキッチンに立ち夕食の準備を始める

「冷蔵庫の中は……」

確認すると

「ふむふむ……これとこれがあるから……いけそうだな」

ひとり呟き

夕食の準備を開始した。そうこうしているうちにましろさんが学校から戻り

「如月さんが今日の夕食の準備ですか？姉さんは？」

聞かれ

「仕事を立て込んでるから遅くなるかもしれないとき」

俺は言い

「はい、おやつ」

最初にデザートに作っていたプリンを一つ渡し

「わぁーありがとうございます」

ましろさんはスプーンを片手にダイニングに行った。そして夜、意外にも真霜さんは皆に比べ少し遅れる程度で戻ってきた。しかし顔を見ればわかるがあまりよろしくはない

「ほんとに美味しいわ」

夕食に作ったビーフシチューを食べつつ言い

「この計画なんだけど貴方は知っていた？就役まじかなのだけれど」

とある資料の束と写真を渡される

「へり空母建造計画書」

真霜さんに渡され

「これは……」

一旦受け取り

「後で部屋でじっくり読ませてもらいます」

言ったが

「説明して欲しいのだけどいいかしら？」

言われ

「もちろんです」

気づけば二人で話す事が増えてきていた。

優也自室

「なるほどな……いずも型ヘリ搭載型護衛艦をベースにしたヘリ空母か。海軍での効率なヘリの運用方法を考えた結果がこのプランに至った訳だな……」

真霜さが見ている中計画書と実際に偽装中の艦の写真を見て言い

「現実的にはアリだと思う。ヘリの行動範囲が大幅に広がるし移動基地にもなる航空燃料や装備品なども纏めて持ち運べる、でもメリットもありデメリットもある。」

言い

「デメリットは？」

真霜さんは言い

「空母は単独では動かない。と言うよりも単独で動けば自殺行為に等しい。空母の対空・対潜兵装は少ない。大概C I W SとSea R A Mが自艦防衛用火器になってるだけから護衛する駆逐艦・巡洋艦が随伴するし海中でも潜水艦が数隻。現状の海軍の艦艇の数からしても大体三個艦隊は運用が可能と思われる」

説明し

「でも俺が知りうる所で違うのは後甲板にM k 4 I V L Sを配置してるのは違う所だな」

写真を見つつ解説する。それを聞いている真霜さんは

「うちの上層部がこの話聞きつけてまた発狂しちゃっててせつかく貴方が体を張って証明してくれた「特殊部隊」プランが危うく白紙になりかけたもの」

ため息を付きつつ真霜さんは言い

「なるほどな・・・すまない迷惑をかけた」

謝り

「ううん、ありがとうでもへり空母があればいろんな分野で活躍できるわね災害派遣や救助また海賊の対処も」

彼女は言った。

「空母ねえ……へり空母機動部隊を組むような大事になるような事があれば困るがまあ抑止力としてもないよりはあったほうがいいかもね」

俺は計画書と就役間近の間の写真を見て言い

「空母なんて単語は貴方が説明してくれないとまるつと分からないわ、私達海上安全整備局の人間は」

真霜さんは言い

「そうだよな、そもそも空母は固定翼機を運用するものもあるがこの世界には航空機なるものがない空母を持つにせよへり空母がいい所だ。」

言い

「さて仕事の話はもうおしまい。」

真霜さんは言い

「明日どこか行かない？せつかくの休みだし」

彼女は言ったが

「そうだな……大丈夫でしょう予定もなんにもないし」

答え

「そう、わかったわ」

そう言うのと彼女は部屋のクローゼットから布団を取り出し

「お部屋の掃除のついでに持ち込んでおいたの、仕事関連のお話をする私達じかんわすれちゃうじゃない部屋に戻るのも面倒くさいからさ」

真霜さんは俺の横に布団を敷

「貴方を信頼しているから出来る事よ分かるわね」

彼女は言い

「海軍士官たるもの常に紳士たれです」

俺は布団を敷

「着替えるんであっち向いててくれますか?」

真霜さんに言い結局互いに背中を向けつつ着替え布団に潜り込み

「おやすみなさい」

真霜さんは言い

「ええ、良い夢を」

言い意識を手放した。

真霜 side

あつさりと規則のいい寝息をたてて寝てしまう彼を横目に

「(クスッ・・・本当に良かった・・・無事に戻ってきてくれて。)」

彼の寝顔を見て思った。ハンガーに掛かっている制服を見て

「准将……か。本当に最年少で将官の一人になったのね……」

制服、制帽に至るまで一士官とは全然違う

「いつまで一緒にいられるのだろう。彼が官舎に入ればそれで私達の関係はおしまいだものね。」

一人勝手にいい勝手にテンションが下がるが

「一緒にいたい……」

言葉にしてようやく気付く。仲間思いで、誰かの為に涙を流せるほどに優しく。それでいて仕事は鋼の意思でこなす。半分は私と同じなのだ気づく、そこに私は男女の感情が混じっているのだ。

「おやすみ……」

私は既に眠っている彼に一言いい意識を手放した。

第29話～視察&リラックスする二人～

海軍造船所

「……か……」

休日にもかかわらず俺は海軍の軍服、彼女はブルーマーメイドの制服俺達は事前に連絡をいれ、例の新造艦の艤装状態を確認しに来たという名目上で艦を見に来ていた。

「失礼、身分証を」

ゲートでは一応制服を着ているとはいえ止められ互いに海軍・ブルーマーメイドの身分証を渡し

「失礼しました、准将閣下」

ゲートを警備している海軍の警備要員に敬礼され

「……苦勞」

一言いい

真霜さんと共に中に入る。そして中で海軍の案内が付き

「如月准将自ら視察に訪れるとは何っていなかっただもので、海軍の士官とブルーマーメイドの幹部が視察に訪れるとしか伺っていなかったものですから」

案内に言われる中

「この艦の発案は角松中佐が？」

伺うと

「はい、正確には角松中佐と梅津大佐のお二人ですが」

案内はいい

「へりは大体この大きさと20から30くらいかい？」

尋ねると

「はい、准将。大体予備機を入れれば40と言った所でしようか。その他に航空燃料に各種兵装などですね。」

案内は説明し

「自艦防衛用火器は定番かい？」

聞き

「ええCIWS×2にSeaRAM×2それに一応Mk41VLSですかね」

書類を持ち説明を受ける

「ちなみにVLSは対潜兵装用か？」

聞くと

「えっと……そうですね ESSM(短SAM) VLA(SUM)と任務に分けて

入れ替えることができますが主にVLAがメインですかね」

説明する。

「なるほどな、僚艦に対空防御を任せて対潜ならばヘリと連携をとりつつ自艦のVLSを使うわけか」

納得していると

「ちなみに、随伴する艦は何隻ですか？」

真霜さんが言い

「はい、現状の計画ですとイージス駆逐艦2隻にイージス巡洋艦2隻この4隻が艦隊の前衛ですねそれに後衛が汎用駆逐艦が4隻内対潜警戒駆逐艦が2隻ですね、潜水艦も3隻付きます」

俺も聞いていたが

「随分と多いな、前衛4に後衛4洋上だけで8隻それに海中にも3隻か空母一隻の護衛のために駆逐・巡洋合わせて8隻海中の潜水が3隻合計11隻とは」

言い

「まあそう思いますがまだ本決まりではありません。」

そういう中

「……上に一応伝えてみてくれ、まあ一応現在の海軍の状況を考えてみた上だが」

言うど直ぐに案内はメモ用紙を取り出し

「はい、准将どうぞ」

言い

「前衛はイージスを3隻内訳は駆逐2巡洋1、後衛は汎用駆逐艦が3隻内訳は汎用駆逐が2

対潜警戒駆逐が1の合計6隻、海中も潜水艦の数を2隻に変えるのもありだと思ふ。」「意見を上げてみる。

「ふむふむ・・・なるほどバランスが取れていますね」

メモをとりつつ言われ

「艦隊を何個作るかはこつちまで情報が来てないから分からないが一つの空母に護衛用の艦を多くつけすぎると通常時に支障が出かねないだろう」

言い

「ごもつともで」

苦笑しつつ言われる。その後も艦内を案内してもらい

「大きいな、格納庫だ」

「ええそうね・・・かなりの大きさだわ」

真霜さんも言い

「一応聞きたいのだけれど三重の安全装置はこの艦にも?」

真下さんが言うと

「ええ当然です、なんといつても「ヘリ空母」ですからね。どれほどの防御力があるかは機密事項ですので言えませんが、一応「魚雷の2〜3発程度」では沈んだりはしませんと言わせて頂きます。」

自信満々に言い

「ほう・・・かなりの防御力だな」

俺も言った。一通り案内を受け

「本日は如月准将閣下自ら来て頂けるとは光栄でした、就役も間近ですので楽しみにして下さい。」

言い

「楽しみにしているよ、今日は忙しい中ありがとう」

「恐縮です」

礼を言い造船所をあとにし真霜さん宅に戻った。

真霜自室

造船所から戻ったあと制服から私服に着替え彼女の部屋でお菓子やお茶を飲みなが

ら

「実際に見たけれども大きかったね、私達のインデペンデンス級なんか豆粒に見えてしまいうくらいね……」

真霜さんは言い

「まあ初めてへり空母を見たわけですし」

言い

「でも……この世界で「へり空母」の出現は大きなことですよ。他国ではこぞって情報収集していいのではないですかね。今までは海上での艦同士の間闘でしたが日本はその何歩も先を行っている。それも空から航空機による攻撃を可能にした装備の開発に成功した、さらにあれを発展させれば揚陸艦にもなり得る、陸上兵力を第三国に移送する事も可能になる手段の一つになります。……あまり手放して喜べないのが本音です。日本は……日本海軍は地球の裏まで行って「戦う」道具をもってしまったのですから」

皮肉めいて言った。この世界に来る前に既に空母同士の戦闘を経験している俺からすればいい事などないからだ。

「やっぱりムズ痒いなあ……准将なんて……」

言い

「そうかな・・・若くても十分に能力があつて実績も十分だと評価されている証拠じゃない」

真霜さんは麦茶を飲みながら言い

「貴方は十分に能力がある。人としても上に立つ人間としてもできている。でなければまず艦長職は務まらないわ。」

真霜さんは言い

「まあでもせっつかくの休みだしリラックスしましょ。」

そう言うのと彼女は大の字になり俺も彼女に習い大の字になり寝転んだ。

「ふー・・・落ち着く」

普段から気を張っているなだけにこう言う周りを気にせずリラックスできるのはありがたい。言っているのと

「貴方が居るだけで落ち着く・・・うん。」

真霜さんに言われドキツとするが自身にも思い当たり

「・・・私もです・・・なんででしょうかね」

同じ仕事をし、所属は違えど立場を超えて互を理解できている。むしろ傍に居るだけで落ち着くこの感覚をなんと言えばいいのだろうか？今まで抱いたことのないような感情があつた。その数カ月後、「この世界で初」となる「ヘリ空母」が就役し世界が驚

愕する事になる。

第30話～第1へり空母機動艦隊～

その日、俺と真霜さんは新造艦へり空母「しょうほう」の海軍引渡し並びに就役式典二参加していた。「しょうほう」は無事就役し配置は第一艦隊に配置され状況により、へり空母機動艦隊を編成する事になる。予定としては二番艦、三番艦と年内に就役する予定との事だ。今日は艦の就役と処女航海のために集まったのだからなみに「しょうほう」艦長は秋津孝大佐、副長兼務航海長は新浪俊也中佐の二名だ。そして艦隊司令は涌井啓吾少将が勤める。

「大きいわね」

真霜さんは言い

「ええ、でもこの兵器が守りに使われるのか、殺戮に使われるのかは俺達次第とと思っています」

言い

「そうね、この艦の就役で世界の海軍の戦力図が一変したといつてもいいわ。攻撃型のへりに対潜哨戒用に輸送用海軍の遠洋能力は飛躍的に向上したと言えるわ」

真霜さんは「しょうほう」を見て言い

「でもこの艦が日本をひいてはそれぞれの大事な物を守る為の切り札になるなら、何か言いたげだったが」

「ううん何でもないです」

彼女は言うなか

「どうです、真霜さん視察ついでに「しようほう艦隊」の処女航海に同行しますか？」
聞くと

「へ……」

驚いた顔をし

「というか、各艦に一人づつブルーマーメイドの隊員が同行する事になってるんですがうちの「はぐろ」、真霜さんが担当なんですよね」

俺は言った。艦隊の防空体制の中に一枠あるイージス巡洋艦の枠が「はぐろ」なのだ。その他のイージス駆逐艦は「あしたか」・「いそかぜ」の2隻が随伴する。

「では行きましょうか？」

そう言い俺は「はぐろ」に真霜さんを丁重にエスコートする

イージス巡洋艦「はぐろ」CIC

「宗谷一等保安監督官に敬礼っ」

号令がかかり、驚く真霜をよそに俺も翼もかかたとを鳴らし真霜に向き直り敬礼する
「おっと」

真霜さんも綺麗な返礼を返し

「艦長、総員配置につきました。」

副長高本中佐が俺に報告し

「本艦はこれより出航し所定の艦隊陣形を組む、僚艦の位置に留意しつつ配置に付く、両舷前進最微速」

命令しそれを高本中佐が復唱し航海長に伝わりゆつくりとイージス巡洋艦「はぐろ」は動き出す。そして同じく動き出したへり空母「ほうしよう」の前に位置ドリその両舷にイージス駆逐艦「あしたか」・「いそかぜ」が位置に付き

「艦長、「あしたか」・「いそかぜ」艦隊配置並びに速度同調完了、艦隊後衛も同様に問題ありません」

報告を受け旗艦の「しようほう」に報告を入れる。

「はぐろ」CICより「しようほう」CIC、艦隊前衛予定の配置に付きました。問題ありません。」

報告し

「しようほう」CIC了解、このまま所定の航海を続行する。」

艦隊の陣形を無事に組むことに成功し

「ふう、各員一息入れてくれ」

無線で言い

「宗谷保安監督官にコーヒーでもお持ちしてやってくれ」

言い順調に進む航海を楽しむ自分がいた。その後へりを飛ばしてみての実際の戦闘訓練や被弾による艦の応急処置訓練（ダメージコントロール）など一通りの訓練を済ませその日は当海域で遊弋する事になった。士官室で夕食を取り

女性隊員に

「宗谷保安監督官の部屋に案内してやってくれ」

言い真霜さんの案内を任せる。これから俺達は夜通しで交代交代で海域で監視を行う。最初に俺は仮眠を取るために副長の高本中佐に任せ、自室の寝具に横になる。

「なんだろう・・・このデジャブ・・・嫌な予感が・・・」

裏腹に緊張の糸が切れ睡魔に襲われ目を閉じて行く。

第31話～艦隊を狙う牙～

???????

「レーダー、海軍の艦隊の編成と陣形はどうだ？」

第1ヘリ空母機動艦隊の遊弋する遙か先に彼らは陣取っていた。

「艦隊前衛は………イージス艦で固められていますね、内訳が巡洋1、駆逐2」

レーダー要員の答えに

「艦種は把握できるか？」

艦長の問いに

「はい……イージス巡洋艦「はぐろ」にイージス駆逐艦「あしたか」・「いそかぜ」の3隻が前衛を固めています。後衛は汎用防空駆逐艦「はるつき」・「ふゆづき」そして対潜警戒駆逐艦「しらぬい」の3隻です

レーダー要員の返答に

「ほとんどミサイルフリーゲートで固めているようなものか海中を含め対潜警戒もぬかりなしか、中でも厄介な艦と言われているのがイージス巡洋艦「はぐろ」か……」

艦長は言い

「海軍の打撃型新型イージス巡洋艦にして艦長は最年少准将の如月優也准将が努めています、伺った話だと知将であり勇将でもあると。普通ならば艦隊の副司令官を任されるくらいの階級であります但本人たつての希望で今の配置のままと」

砲雷長が言った。

「臨機応変な対応がとれるという事か、だがその艦を沈めねばヘリ空母を叩く事は出来ん。イージス艦の撃破は必須だ、そして相手は海軍のなかでもとりわけ優秀な艦長と言ふことか。ふむ、相手が最新鋭のイージス巡洋艦ならば相手にとって不足はないこちらも最新鋭艦どっちが上か・・・」

艦長はほくそ笑んでいたそして直ぐに

「レーダー敵陣形は？」

問い

「はい輪陣形です、ヘリコプター空母「しようほう」を真ん中に前衛がイージス艦3隻が固め後衛は汎用駆逐艦3隻内訳は「防空駆逐艦」「対潜警戒駆逐艦」です」

表示されている情報を見

「艦隊後衛は「汎用防空・対潜警戒駆逐艦」・・・後ろも守りは絶壁だな・・・隙はない、となるとやはり本艦のステルス性を利用しミサイルの数に物を言わせて強引に突破するしかないか」

艦長は言い

「よし、敵艦隊に先制攻撃を掛ける、総員対水上戦闘用意ッ」

優也らが知らぬ所で戦闘の火蓋が切つて下ろされようとしていた。

イージス巡洋艦「はぐる」

俺は艦長室の寝具で寝ていたが、突如として鳴り響いた警報とうるさいほどにけたたましく鳴り響くCIWSの射撃音で寝具から落ち急いでCICに趣いた。

「何事だつ、誰が発砲を許可したっ」

どやしつけるように言うが

「艦長、報告します」

副長の高本中佐が俺により、艦隊がミサイル攻撃を受けたと報告を受け

「ハーブーンだど?!」

俺は言い

「はい、明らかにヘリ空母「しようほう」を狙って発射されたモノと推測しています。今本艦並びに僚艦の「あしたか」・「いそかぜ」が発射ポイントのデータ解析を急いでいます」

高本中佐が説明し

「了解した、警戒レベルは？」

聞き

「全艦共に対空・対潜警戒を厳となせ」

旗艦「しようほう」より命令ができました。

高本中佐は言い

「わかった、ありがとう引き続き対空・対潜警戒を元となせ」

命令を下し艦長の椅子に座り

「ふう、寿命が縮むな」

言っている

「何事ですか、先ほどの警報音とCIWSのけたたましい射撃音は?!」

真霜さんも慌てた様子でCICに入り

「艦隊はどうやら正体不明の武装集団から攻撃を受けているようです」

説明していると

「ダメです艦長、発射位置特定できません、僚艦「あしたか」・「いそかぜ」共に同じ結果

です」

レーダー要員は言い

「ジャミングの有無は？」

高本中佐が言うが

「いいえ、電波妨害の類もありません」

報告を受ける中

「ミサイル探知、数6発敵目標「ほうしよう」」

言い

「各員役目を果たせ、対空戦闘用意ッ目標敵ハーブーン」

命令をだし各艦共に「ヘリ空母」を守るために対空戦闘に突入した

????

「どうだ、海軍のヘリ空母艦隊は潰せそうか？」

会議室に大人数の男達が集まっていた。

「だが厄介な艦もある。」

一人の男が言い

「イージス巡洋艦「はぐろ」か？」

もう一人の男は言い

「あの艦の艦長、如月優也海軍准将は年齢にそぐわぬ冷静さと想像もつかないような方

法で危険を回避してきた。その上奴は「宗谷」とも繋がりがあ

言いもう一人は

「最悪「しょうほう」は潰せなくとも彼には消えてもら

そう言っている

「ご心配なく、このためにこちら最新鋭艦を実戦投入しましたうまくいけば如月准将だけでなく宗谷一等保安監督官にも退場して頂くこと……くくく」

男達はほくそ笑んでいた。

艦長??????

「艦長、こちらを敵艦隊は全く補足できていないようですね」

敵艦副長は言い

「いくらイージスと言えど「見えていれば」最強の盾だろうが見えていなければこちらが有利な事に変わりはない。」

そう、優也らが相手になっているのは優也の世界でも実戦配備された事のない「ステルス艦」であったのだ。

第1へり空母機動艦隊 旗艦「しょうほう」CIC

「おかしい……情報解析や同時目標処理能力に優れているイージス艦が全く解析できないとは……」

艦長の秋津孝大佐はいぶかしみ

「たしかに変だ、だが早く對抗策を見出さなければ今はなんとかイージス艦が踏ん張って防いでいるがVLSの残弾には限りがある。」

新浪俊也中佐が言い

「うむ……」

艦隊司令の涌井少将も唸るその頃

イージス巡洋艦「はぐろ」CIC

「……」

補足できない敵からの攻撃に翻弄され防戦一方の中

「如月准将、何か……何か對抗策はないの?!」

真霜さんも焦り始めているのがわかるが

「さて、しようがない「秘策」を使うか……本当なら貴女の前で使いたくはなかったが」

俺は言い

「艦長、「アレ」をやるんですか?」

砲雷長の加藤少佐は言い、俺は

「そうだ、この状況を切り抜け艦隊の安全を最優先するには「アレ」しかない
言い真霜さんに振り返り

「この日本の海の海域は津波ブイを浮かべていますか？」

聞き

「ええ・・・」

真霜さんは言い

「俺の・・・いえ「はぐろ」が使う手はもつとシンプルです。不測の事態に備え「あつち」の世界にいた時から対米軍相手の演習での常套手段の一つとして使ってる。」

俺は言い

「僚艦「あしたか」・「いそかぜ」に連絡、艦隊防空を任せる、本艦は「敵を叩く」と伝える」

通信士に言い

「了解しました艦長」

イージス駆逐艦「あしたか」

「何?!、敵を叩く如月准将、おかしくなっちゃったんじゃないだろうな」

「あしたか」艦長山本中佐は言い

「本艦は艦隊防空に徹せよと命令が出ています。攻撃を「はぐろ」に任せて我々は防御に徹しましょう」

副長は言い

「たしかに、手段がないんじゃないでしょうか。如月准将に任せよう」

イージス駆逐艦「いそかぜ」

「わかった、さて最年少准将のお手並み拝見と行きますか。補足できない相手をどう仕留めるか……」

「艦長……」

「本艦は攻撃する「はぐろ」を含め防空に徹する、「しょうほう」、「はぐろ」を守れ就役。そうそう沈めるわけにも行かん」

「いそかぜ」艦長田中中佐は答えた。

その頃

ヘリ空母「しょうほう」CIC

「何?、「はぐろ」が反撃に出ると」

新浪中佐が言い

「うむ、手を拱いていても全滅するだけだ。やると言うのなら私の責任の元許可しよう」

艦隊司令の涌井少将が言い

「了解しました、「はぐろ」に攻撃許可を下令します」

艦長秋津大佐は言い

「通信士、「はぐろ」に攻撃命令を下令」

言い

「了解、攻撃命令下令します」

「しようほう」から「はぐろ」に攻撃命令が下令されたのだった。

イージス巡洋艦「はぐろ」CIC

「艦長、「しようほう」CICから本艦に対して攻撃を許可すると、全力で叩けとの事です」

高本中佐が言うなか

「こんな手があったなんて・・・また汚いやり方を・・・もう」

真霜さんは驚愕と呆れ半分半分だった。SPYの電源をカットし国際海洋気象庁のデータをグリットに表示しその上にチャートを表示する。

「非常事態の際にレーダーに頼らず攻撃出来る極秘戦術の一つです本来ならば第三者の居る前で使うべきではないのかもしれませんが、今は「非常事態」ですので使用すべき

と判断しました。宗谷一等保安監督官言わずともわかると思いますが」

言い

「わかっているわ、口外はしないわそもそも私達の艦じゃこんな芸当できないし対艦誘導弾もそんなに配備されていないもの」

真霜さんは言い俺は加藤少佐に

「加藤砲雷長、どこのブイが沈んでる？」

言い俺と加藤砲雷長はモニターを見る。すると

「………あつた……E-37、I-22、……ん？ここだ少し離れてB-11の三つ、つまり目標は3隻です艦長」

加藤砲雷長は言い

「さて、此処で実際に問題になるのは撃沈するのは骨が折れるという事だ、この世界の艦は三重の安全装置が装備されている。だがこのままにもできない、ならば航行不能にするしかないな」

加藤砲雷長と話し

「対水上戦闘用意ッ、目標座標E-37、I-22、B-11の敵艦に攻撃を加える、ハーブーン攻撃始めッ………てえッ」

轟音と共に四連装発射筒から対艦誘導弾が発射されて行く。

「……………」

「……………」

俺も真霜さんもモニターを見る中

「着弾まで20秒」

加藤砲雷長はモニターを厳しい表情で見ながら言い

「……………」

CICに居る乗組員もモニターを見る

?????

「レーダーコンタクト！ミサイル探知ッ」

レーダー要員が叫び

「大丈夫だ、盲撃ちだコイツはステルス艦当たらんよ」

艦長は余裕を持っていたが

「……………！艦長オ、コイツは本艦や僚艦共に命中コースです！至急回避行動を」

レーダを覗き込んでいた副長が言ったが

「待ち合いません、命中まで残り7秒ッ」

レーダー要員は叫ぶように言い

「総員衝撃に備えろッ」

艦長が叫ぶと同時に艦に大きな揺れと振動が襲ったのだった。

「ば・・・化物が・・・」

警報音が鳴る中、艦長は眩き

「被害を報告しろッ」

「僚艦2隻共に被弾ツさらに浸水航行不能」

通信士は言い

「本艦の被害は・・・」

頭を抑えつつ言い

「対艦誘導弾1発が被弾、浸水航行不能ですさらに僚艦共に被弾損傷した事によりレールダーに本艦が表示補足されません。」

副長は言い

「イージス艦に・・・いやイージス巡洋艦に完璧に負けた。最新鋭のステルス艦が本艦が・・・一度会ってみたいものだ、如月優也准将に・・・」

苦笑しつつ言い

「司令部に報告、本艦は作戦は失敗、本艦含む3隻共に航行不能並びに浸水発生ステルス機能の消失を伝えてくれ」

通信士に言い

「了解です・・・」

通信士は通信文を送ったのだった。

?????

「何?! 負けた・・・負けただと?! ステルス艦がか」

会議室は無言になった。

「どうなってる、如月海軍准将は化物か・・・見えないはずのステルス艦をどうやって仕留めた。いや信じられん」

言うなか

「どうするんだ、貴官の責任は重いぞ! 最新鋭のステルス艦まで持ち出したあげくに負けたと言うのなら同責任をとる」

「何を言ってるんだ、勝てる確率を上げると言ったのはそっちだろう。だから俺達は出来る最善の方法を取ったんだ。100%勝てる戦いなんてそうそうあるわけないだろう現場にだってリスクつてもものがあるに決まっているだろう」

「そのリスクを含めて何とかするのが君達の仕事だろうが!!」

会議室は見苦しい責任の擦り付け合いが始まっていた。

イージス巡洋艦「はぐろ」CIC

「……………命中しました……………3隻ともに」

加藤砲雷長が言い

「旗艦「しようほう」より入電、着弾と共に各艦でのレーダでも捉えたとこれより艦隊は乗組員救助に入るとの事です」

「了解した」

俺は言った。後味の悪い戦闘だったが、俺達はその後航行不能になっている敵艦乗組員救助のために赴きそこで敵が「海上安全整備局」と知ることになったのはまた別の話

第32話くすり減る心く

海軍第一艦隊司令部

「ふむ・・わかったありがとう如月准将。今回の判断は難しい判断だったのだが貴官らしか知らない「極秘戦術」というのは我々にもご教授していただきたい同じ海軍の人間としても」

上層部の将官は言い

「もちろんです、ですが海軍内部において機密事項指定して頂かないうちはそうそう教えられるものでもありません」

答え

「そうだな、だが戦術的には素晴らしいの一言だ、目には見えない・レーダーで補足できないステルス艦を航行不能に追い込むとは、それと「はぐろ」は今現在点検とVLSのミサイルの補充を受けている。艦隊がまさか処女航海で戦闘になるとは想像もしていなかったからな」

もう一人の将官も言ったが

「私から言いたいのですがよろしいでしょうか提督」

言い

「ああ構わんよ准将」

言い

「なぜ・・・なぜ味方同士殺し合いをする必要があるのでしょうか？ 私には理解できません。ご存知の通り私はこの時代の人間ではありませんから「甘い」と言われてもそこは甘んじて享受します。しかし納得いきません」

吐き出すように言う

「・・・そうだな、准将の言うとおりで。なぜ同じ海を守る者同士殺し合いをする必要があるのか。ここにいい皆も分からないだろうな。准将、向こうも今わ混乱しているらしい公安が本格的に「海上安全整備局」の捜査に乗り出した。今回の事件は大鷹総理の総理大臣命令により最高機密扱いされる。もし外部に漏れれば国内が混乱する味方同士殺し合いをしていたなんて事が公になれば、わかるね」

諭すように言われ

「もちろん心得ております、私の口から口外する事はありません。それは「はぐろ」の乗員も同じです」

言った。

「では如月准将、聴取はこれで終わりだゆっくり休んでくれ。本当にご苦労だった」

提督らに言われ

「ハッ、失礼します」

制帽を脇に携え外に出るとそこには真霜さんがいた。

「大丈夫？」

言われたが

「攻撃に対してのお咎めや処分の類は一切なし。あとは公安に丸投げで終わりのよう
だ」

俺は言い

「そう・・・私もさっき聴取が終わったところだけでも大事になってるはこっちも」

真霜さんは疲れたように言い

「そっちは大丈夫？」

聞くと

「現場のほうは大丈夫だけれども「海上安全整備局」の方は無事では済まないでしょう
ね、何人逮捕者が出るのか、頭が痛いわ」

ため息を彼女は付いている。

「帰りましょう」

俺は言い

「もう何が何だかわからなくなってきました、何が正しくて何が間違っていて誰が味方で誰が敵なのか……」

言うと

「そうね……私ももう頭の中ごちゃごちゃ」

俺達はそのまま帰宅し

真霜 s r o o m

「チクシヨーめー、やってられつか・ばーやろー」

「そうよ現場を預かる身にもなれー」

二人で日のあるうちに海軍・ブルーマーメイドの軍服・制服を着たままビールをかつ

くらっていた

「俺たちが何したってんだ、バカヤロー」

「私達は何も悪いことしてないのにーふざげんなー」

部屋の中はカオス状態になっていた。溜まりに溜まった日頃のストレス、鬱憤が爆発

していた。

「何が「海上安全整備局」だそんなに俺達海軍が気に入らなけりやてめえらが侵略された時に最前線に立ってってんだ、ろくな装備もないくせに言うことだけはいつちよ前つか」

もう俺自身自分がわけがわからん状態になっていた。その後も俺達は互いに愚痴を言いきり次々とビールの缶を開け飲み途中で俺達の意識は途切れた。

夜

「あ……あれ？」

気が付くと俺も真霜さんも毛布をかけられ仲良く寝ていた。

「気がついたかしら」

真雪さんに声をかけられ体を起こそうとしたが

「まだ辛いでしよう、そのままが良いわ。」

言われ

「夕食食べられそう？」

尋ねられ

「はい、大丈夫ですすみません」

言い

「何があつたか知らないけれどすごかったわよ真霜の部屋からお酒の匂いがするから真冬と見てみたら貴方達が海軍の軍服とブルーマーメイドの制服を着たままビールの缶を握ったま酔いつぶれているもの」

真雪さんから言われていると

「めえ覚ましたか、大丈夫か？ほら薬と水真霜姉はこうなつたら起きないから優也だけでも夕飯食べちまえよ、真霜姉には後で下りてくるように言うか部屋に飯を直送するか
らよ」

真冬さんに言われ

「すみません、迷惑かけます」

言い

「なに、いいつて事よそれにもう家族みたいなもんだしな」

真冬さんは言ってくれ、ジーンとくるものがあつた。その後俺は部屋に真霜さんを残しダイニングに降り夕食を食べていた。

「大変だつたんでしよう、話は私も聞いていたけれども」

真雪さんが言われ

「それ、こつちでも聞いたし持ちきりだよ。まさか上がステルス艦を建造していたなんて現場クラスの人間は知らなかったからな」

真冬さんがため息を付きつつ言う

「私のいた時代でもステルス艦なんてのは聞いた事はありましたが実物を見たのは始めてでした」

言い

「でもそのステルス艦相手に航行不能まで追い込んだのが、イージス巡洋艦「はぐろ」だつて言うからには「准将」がいかにも優秀かが「バカども」にもわかつただろうさ」

ビール片手に真冬さんも言い

「そうね、リーダーに反応しない艦をいかに補足しそしてピンポイントに攻撃したか従来の戦術では出来ない事をやってのけたのだから」

真雪さんも言ってくれた。でも

「どうして・・・味方同士殺し合いをするんですかね・・・互いに助け合えばいいのに」
ぼつんとこぼすと

「確かにな・・・海軍が歩み寄ってくれているのにうちの上層部は歩み寄る気配すらないしな。これじゃ何が敵で何をすべきか全然分からないしなやるせないよ」

真冬さんが頷いた。

「明日から少し休みならリラックスしたらいいんじゃない？思いつめると体に毒だぞ」
言われ

「そうします、今日は早めに休みます」

俺は言い夕食後、自室に戻り制服をハンガーにかけ

「何が正しい・・・か、やめやめ」

考えるのをやめて布団を敷きさっさと寝る事にしたのだった。

第33話く新たな出会いく

気を紛らわすために俺は外出しマンガ本を二冊ほど購入し夜………

夜

「だあくく頼むから話してくれっ」

「そんなこと言わないで下さい、私を助けると思つて………」

「そんな事したら俺の首が飛ぶし君も自分をもつと大事にしなさいな」

言い合いが続き

「ええい、もう此処で会つたのもなにかの縁だ、君名前は？俺は如月優也 職業は海軍の

軍人だ」

俺は言い

「えつと、私は牧瀬栞菜です……職業は一応漫画家です」

彼女は答え

「ふう、とりあえず落ち着こう、な？」

言葉を選びながら言い

「落ち着いてるほど私に余裕はないです………」

牧瀬さんは言い

「どうして?とにかく外じゃあれだ喫茶にでも入ろう」

彼女を連れ近くのスノーバックスにでも入り

「ブレンド二つ、後彼女にケーキ」

彼女と話

「なるほどな……だからあんな真似を……」

ため息をつき

「ごめんなさい……」

彼女は言い、ふと俺の持っていた書店の袋に目がいったのか

「本読まれるんですか?」

言い

「まあね、息抜き程度に」

俺は言った。そして牧瀬さんは色々話、なぜ「あんな行動」に出たかも言い

「なるほどね……早まった真似をしちゃあいけないよ」

言い、彼女の話聞きつつ

「なるほどな……たしかに甘くはないだろうからその世界は」

運ばれてきたコーヒートケーキを食べながら牧瀬さんも言った。

「諦めたくない」

とそんな彼女のまつすぐな思いに傍から見れば「お人好しのバカ」と思われるかもしれないが

「わかった、俺が君のスポンサーになろう。幸い職業は軍人出し収入もまあライフラインを支払う分は大丈夫かな．．．どうせ軍で衣・食・住・はなんとかなるから」

言い

「会ってそんな見ず知らずの人にそこまでしてもらうのは気が引けます」

牧瀬さんは言ったが

「いやいや、さつきみたいなお事されたら周りも困るしまず牧瀬さん自信が怖い目に会う事も否定できないだから仕事に集中できるようにしてあげるよ、此処で会ったのも何かの縁かも知れないしね」

俺は言い

「．．．．．」

彼女は考え込んでいたが

「分かりました。よろしくお願い致します。」

頭を下げ

「とりあえず、細かい相談とかは後日しよう。これ俺の携帯番号。勤務時間帯と艦隊演

習や派遣任務の際は出れないというより出ないからさ」

彼女に電話番号を教え

「分かりました」

互いに電話番号を交換しスノーボックスを出たがその光景を間が悪い事に真冬さんに目撃されてしまっていたのだった。当然真霜さんにもこの目撃談は伝わる事に。

第34話〈嫉妬〉

宗谷家

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も変わらないはずの一日だったがどうにも朝から居心地が悪い

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺も無言になり5人で朝食を食べる中

「昨日は随分とお楽しみのようでしたね、准将」

真冬さんの突き刺さるような視線に言われ

「はあ？」

間拔けな声を出す

「身に覚えがないのでしたら結構です」

そう言うと真冬さんは朝食を終え行ってしまふ。

「何かしたか俺？・・・・・・・・」

朝食後、自室に戻るとスマートフォンに

「栞菜です、如月さん今日お時間よろしいでしょうか？例の件でご相談したくよろしくお願ひ致します。」

メールを見て

「おっと・・・そうだったな」

俺は着替え、外出する。

市街地

「今日はありがとうございます。よろしくお願ひ致します。」

栞菜さんと合流し不動産屋に向かうがこれがまた軽率な行動になってしまう。

「ふむ・・・これでこの家賃ね・・・敷金礼金は無しか」

紹介された物件を二人で見ても

「栞菜さんはどれが良い？いろんな物件見たけど」

俺は言い

「・・・これですかね」

彼女は指さした。

「ふむ．．．俺も同じだ。」

話していると

「ご案内しましょうか？」

不動産屋に言われ俺達は部屋を実際に見てみた。

「へえ．．．なかなかいい部屋だね。広いし．．．うん壁もしっかりしてるし」

納得し

「私もそう思います。」

部屋を決め引越しの準備やその他の日取りを決め

「決まったら呼んで、手伝うから」

そう言い俺は

宗谷家に戻るが

「如月さん、見損ないました。」

真白さんに言われ

「??」

頭に？を浮かべていると

「ふうんッ」

次の瞬間には真霜さんにビンタをくらいさらに状況が飲み込めなくなる。

「これ貴方の荷物、言わなくともわかるでしょ？」

吹雪のように冷たい目をしている真霜さんは言った。そしてひとつだけ理解できたのはどうやら俺は此処から追い出されるといいう事だ

「待ってくれ、俺が何をした？状況が全く飲み込めないんだが」

言うところ

「言い訳なんてますます見苦しい」

今度は真冬さんに言われわけがわからぬまま追い出されてしまった。

荷物を持ったまま

「全くどうなってるんだよ・・・ハア〜」

ため息をつきつつも

スマートフォンから電話帳を呼び出し

「もしもし、俺優也だけど翼お前の部屋に泊めて貰うこと出来るか？突然ですまんが」

電話するも

「そうか、いや突然すまん」

電話を切った。

「さてと・・・ホームレスに逆戻りですか・・・どないしたものか・・・」

街中をバックを持ったまま歩き回りコンビニに入ると

「あ……」

「あ……」

ジャージ姿の栞菜さんと合い

「どこかに行くんですか？バックなんてもって」

彼女に言われるが

「まあ……ねちよつとワケアリで」

そう言うと

「立ち位置が今度は逆ですね、まあ立ち話もなんです部屋にどうぞ」

彼女はいい断ろうとしたが彼女に引きづられる形で、彼女の部屋に転がり込むハメになった。理由を話すと

「え……それって殆ど私のせいじゃないですか。」

言われるが

「すまん、イマイチ理解できない」

答えると

「鈍感って言われたコトありませんか？」

栞菜さんに言われるが

「まあ、今更どんな事いっても言い訳にしか聞こえんし上官に話通して海軍士官官舎に入居手続きしてもらうから心配しなくても大丈夫だからさ。一応軍人だしね。野宿したって死にはしないよ」

葉菜さんにいい

「それでもダメです。今日一晩でも良いので此処に苦って行つて下さい。命令です拒否権はありません」

彼女に言われてしまいその日は厄介になる事に。

ところ変わって宗谷家

「本当に追い出しちゃったの?！」

真雪さんは言い

「当たり前だ、真霜ねえの気持ちに気づかないだけじゃなく外で女作つてる奴なんて」
憤慨したかのように真冬は言い

「それで真霜・・・あんたはビンタをかましたと」

「ええ」

言い

「でもお母さん見損ないました。如月さんは海軍の将官、海軍の方々は紳士な方々なの

に

娘達の声を聞き

「ふむ……果たしてその真冬が目撃した女性が如月准将の彼女さんなのかはてまた何らかのトラブルに巻き込まれていた所を運悪く真冬に目撃されたか……私見で言えば圧倒的に後者ね誠実な彼がそんなことを本気で思う？もつとよく考えなさい」

真雪さんは言った。

「わかったわ、本当は違法行為ギリギリだけど准将個人を調べてみようかしらね。彼の名誉にも関わることだしね。でも大変ね「特殊作戦要員」経験者を尾行したり調べるのは」

頭を抱える真雪だった。

第35話～日本商船タンカー襲撃事件～

翌日

「さい．．．．．きて．．．．．い」

意識が覚醒に向かい目を開ける。

「あ．．．．おはよう」

目をこすりながら起き

「さてと、着替えたいんだがどこで着替えると良い？」

尋ね

「脱衣所使ってください」

栞菜さんに許可をもらい海軍の軍服に着替える。

「様になってます．．．」

朝食をご馳走になる際に言われ

「ははは」

苦笑し

栞菜さんがテレビをつけると

「日本商船がホルムズ海峡付近で攻撃を受けたと一報が入りました。船の損害や乗組員の安否は等などの情報は入り次第逐一ご報告します」

現地キャスターが言っており

「はあ……大事になったな。」

俺はため息をつき、そんな事を言っていると

「ホントですね」

彼女もご飯を食べている。

「しかし、美味しいな……本当に。」

おかずなどを食べ

「ふう……さてと出勤しないとな」

そうこう思っているとチャイムが鳴り

「あ、私です」

彼女が出ると、予想どおり

「へ……は、はいいますお待ち下さい」

そう言い血相変えてくる。

「如月さん……海軍の准将だったんですが!!!」

驚いてるが

「ごめんね、隠すつもりはなかったんだが」

「そう言い玄関に向かいその後車内で」

「ごめんごめん探すの大変だったでしょう。訳はちゃんと話すから」

佐藤少尉らに事情を説明する。

「………准将………災難でしたね。で今はこの牧瀬さんにお世話になってると」

聞かれ

「まあ……な」

「そうこうしているうちに基地につき」

「迷惑かけたね、この借りはそのうち」

俺は言い車を降り基地に入り

「如月准将、朝の件見たね？海軍としても至急対策の検討が急がれている。」

原少将に声をかけられ

「ええ、もし相手が国ならばこれは「宣戦布告」と見なさなければいけない危うい自体で

す。」

答え

「そうだ、会議室に海軍の幹部と海上安全整備局の面々が着ているこれから対策の検討が始まる。准将も参加してくれ。」

言われ

「了解です」

答え

ロッカーに荷物を起きオフィスに行き高本中佐を伴い会議室に行くそんな中、廊下で真霜さんと真冬さんとすれ違うが

「あ・・えっと」

何か言おうとしている真霜さんに対し俺は無言で会釈し後にする。

会議室

「(なんでこうなる・・・)」

予想通りと言うかなんというか紛糾していた。

「艦船の護衛ならば我々海上安全整備局でも行える。海軍の世話にはならん」

「此処でそんな事を言っている場合ではないだろう、事は民間人の命に関わることなんだぞ」

海軍側と海上安全整備局側で揉める。ちなみに不幸が災いしこの中で階級が最先任なのは准将の俺になっている。向こうは言うまでもなく真霜さんだが

「如月准将、此処は一つ貴官の意見を聞きたい。」

海上安全整備局側の高官が言い

「はい、私の考えで一つ今回の攻撃が武装集団による物でしたらそちらでも対処は可能かもしれません。ですが国であった場合そちらの装備では到底太刀打ちはできないでしょう。その際は我々海軍の出番と心得ています。」

すつぱりと言い切った。

その物言いに

「待って下さい」

今度は真霜さんが嘸み付く

「准将は今おっしゃいましたが、海軍と我々ブルーマーメイドが束になってかかっても意味はないと?」

真霜さんは言ったが

「……貴官は単なる武装集団との戦闘と国同士の戦争がお分かりか? 国同士の戦争となれば正直言えば貴官らは我々の足でまといでしかない。適材適所という言葉をご存知か?」

言い座る。真霜さんは驚いたような顔をしつつ椅子に座る。その後一旦休憩に入り「先輩、先ほどの発言は結構向こう側に効いたんじゃないですか? というより言いすぎなのでは?」

高本中佐は言ったが

「翼、俺達は経験しただろう。国同士の戦闘を。たしかに彼女らもこの国の国防を担う一翼ではあるが。正規の戦闘となれば海軍のイージス駆逐・巡洋艦や汎用駆逐艦・潜水艦装備の開きがある上に大規模な戦闘の経験がない。犬死にして欲しくないからこそキツめにさつきは言った。それに……戦場で死ぬのは男だけでたくさんだ……」
俺は窓から外を見て言った。

「……先輩……」

そう言っていると

「結構な言い分だな、准将さんよ」

真冬さんと真霜さんの二人が俺たちに話しかけてくる。

「さつきは痛い所的確についてきてくれたけども、私達では正規の戦闘は足でまといだというのは貴方の本心かしら」

真霜さんは言うが

「同じ事を言わせるな」

一刀両断し

「貴女達がその仕事に誇りを持つてるのは知っているだが、今回の事は既に外交案件レベルに達してる。ヘタをすればそのまま戦争に突入しかねない危険な案件だ。下手を

すれば大勢の貴女の部下を死なせる事になる。貴女らも「戦闘」は理解していても「戦争」イマイチピンと来ないだろう。俺達はそれを経験している。経験の裏付けに物事を言っている。消して差別して言っているわけではない。」

俺は言いコーヒーを飲んだ自販機のカップをゴミ箱に入れ

「指揮官は常に冷静に状況を判断を行わなければならぬ。さもなければ部下を大勢死なせる事になる。それは貴女らも同じだ。「荒波を避けて船を進めよさもなくて破滅の淵に沈む」

二人に言い残し翼と共に去る。

「はい准将」

「今のなんだ？、真霜ねえ知ってるか？」

真冬は言い

「ホーマーよ」

真霜は答えた。

「ホーマー？」

なにそれとでも言わんばかりの顔に

「貴女も勉強したらどう？今からでも遅くないわよ」

真霜は言い

「大事にならないように祈るだけね」

制帽を携え会議室に戻るのだった。結局その日は話が纏まらなかったが翌日「同盟国」が横槍を入れに来るとは誰も思わなかった。

第36話〈情報交換〉

夜

「ごめんなさいね、呼び出してそれとごめんなさい。」

真雪さんに謝られる中同伴している栞菜さんも

「紛らわしい行動とって誤解させたのは私です。本当にすみません。」

謝り、経緯と訳を話し

「なるほどね・・・それじゃあ真冬が誤解するわけね・・・うん分かりました。」

真雪さんが言うなか

「今は互いに冷静な状況じゃないでしょうから話しても無駄だと思っただけです。このまま海軍の官舎に入居の手続きを取るつもりです。時間はかかるとは思います。」

言うと

「でしたら、如月さんご迷惑をおかけしたお詫びとして官舎に入居が決まるまでこの間契約した部屋に居て下さい。何かと不便かもしれませんが」

栞菜さんは言いだし

「いやそれだと真霜さんや真冬さんの怒りに油を注ぐ事になりかねないと思うんだが」

言ったが

「野宿よりましです。事情は必要でしたら私もお二人に説明致します。貴方は潔白なのですから」

言い切られ

「まあ・・・しようがないか・・・」

思い

「私のほうも一度大石司令長官から貴方をお預かりした身娘達の勝手な都合で貴方を放り出すなんてコト出来ないから娘たちに今の事をそのまま言うつもりよ貴方にはもどつてき欲しいからね」

真雪さんに言われ

「ご迷惑をおかけします。頭を下げ

「いいえこつちこそほんとにごめんなさいね」

真雪さんに謝られる。

「栞菜さん好きなもの頼んで」

俺は言いメニューを頼む。

「それ以外にも言いたい事があるのではないですか？」

俺は真雪さんに言い

「さすがね、准将。アメリカのブルーマーメイドから情報が寄せられたけれども米海軍は本気でイランを疑いそして同盟国や友好国の海軍の艦隊で有志連合結成を目指しているようね日本にも負担を要請してくるわ。おそらくは「第一へり空母機動艦隊」の派遣を要請してくると思われるわ。」

真雪さんは言い

「空母機動部隊の派遣をですか・・・やはりこの世界での航空機は効くんですね」

俺は苦笑しつつ言い

「ええ、まして一個艦隊を送り込めば相手に対する圧力は計り知れないわ」

真雪さんは頭を抱え

「なる程・・・アメ公の目的は「空母機動部隊」の能力とデータを取ることだな。この世界で「空母」を保有しているのは「日本」だけつまりは米軍は艦隊のデータと空母の能力を図りたいわけだ。やってくれるな・・・アメ公め」

俺は言ううと

「えつと・・・お二人共・・・料理届きましたよ・・・」

おずおずと葉菜さんが言い

「おつとすまない、一旦この話はおしまいにしよう」

俺は言い

「そうね」

真雪さんは言った。そして食後

「つまりあすの会議に米海軍の連絡官も同席すると」

「ええ、そこでおそらくは艦隊の派遣を要請してくると思うわ」

言い

「痛い所を突いてくるな……日本の商船である以上当事者である日本国は艦隊の派遣を渋れない。だが空母を出すわけには行かない。かと言ってブルーマーメイドの艦隊では荷が重すぎる。装備の差がありすぎる。」

「空母抜きの一ージス艦や汎用駆逐艦と潜水艦で切り抜けるにはむずかしいわね」

真雪さんは俺を見つつ言う

「とりあえず分かりました。」

俺は答え、栞菜さんを伴いファミレスを後にする。

「大変ですね、海軍の准将だと」

帰り道栞菜さんは言い

「いやもう慣れたというべきかな」

苦笑し答えると

「でも軍の人達や海上安全整備局が頑張るから私達は安全なんだと思っています。」

彼女は言い

「その一言でまた頑張れそうだ」

答え帰路につく。その頃

宗谷家

真雪は真霜・真冬・真白に説明していた。

「はあ?!」

「え．．．．」

「あちゃ．．．．」

三人とも頭を抱えた。

「つまり貴女達の早とちりって事、説明や弁明の機会も与えないまま追い出したって事になってるの。今はその「人」が責任を感じて居候させてくれているそうよ」

答えると

「う．．．．」

真霜は気まずそうな顔をし自分の手を見る優也を殴った手を．．．

第37話くアメリカの要請く

海軍基地 会議室

「大統領は日本海軍に以下の要請を行いたいとの事です」

米海軍将校 ステラ・エステリード海軍中佐が言い

「日本艦隊特に空母機動部隊の作戦参加を要請します。」

ステラ中佐は言い

「キサラギ准将返答願います。」

真霜さんや海軍の仲間が俺を見る中

「エステリード中佐、なぜ空母機動部隊なんだ？事はイージス駆逐・巡洋艦や汎用駆逐艦・潜水艦で事は足りる」

俺は言う

「准将、最新鋭の航空機搭載型航空母艦は世界中で注目されています。無論同盟国の我々もですが相手に貴国の商船を襲撃したイランに本気度を見せるべきです。圧力をかけられる物は全て導入すべきと考えています。」

エステリード中佐が言うなか

「米国はやけにイランを犯人と決めつけいるようだが証拠でもあるのかねエステリード中佐」

俺は言うな

「映像をお持ちしました。我国の無人機が撮影した映像ですが」

そう言いスクリーン上に映像が流され説明を受ける。

「ふむ……この一連の犯行がイランの革命防衛隊の仕業だと米国は言っている訳だ。高本中佐どう思う？」

俺は翼に話を振った。

「はい、准将ですがこの映像だけではイマイチ説得力に欠けます。これでは我海軍やブルーマーメイドの精鋭達を危険地帯に派遣する正当な理由にはなりません。」

翼は切つて捨てた。他の海軍士官やブルーマーメイド側の幹部らも同意するように頷き

「エステリード中佐、我々の現場の意見としては艦隊の派遣は推移を見守り万が一の際には再度検討致します。これが我々の総意です。」

そう言い

「分かりました、そのように一度本国の艦隊総司令部に報告させて頂きます。日本側は艦隊を派遣するのは状況を見極めてからと」

エステリード中佐と数人の米国海軍士官らは退室し会議も今日はお開きになった。

米軍 side

「中佐、なんと本国に報告を入れますか？空母艦隊の派遣を要請までは良かったですがキサラギ准将があそこまで事を慎重に見る方とは思いませんでした。」

一人は言い

「これでは空母を含めた艦隊のデータは取れません。本国から日本に圧力をかけてもらいますか？」

もう一人が言うが

「いいえ、それも別に問題ないわ」

エステリード中佐は言い

「准将は確たる証拠がなければ話にならないと我々につきつけた。ならキサラギ准将がグウの音も出ないような証拠を突きつければいいのではないかしら？」

そういった。

米軍 side アウト

その頃俺はというと

「ホントにすまねえ」

「ごめんなさい」

真霜さんや真冬さんに謝りだ押されていた。

「お母さんから話全部聞きました。」

真霜さんは言い

「厄介事に巻き込まれていただけなんて知らないで早とちりしてしまつて詫びの言葉もねえ」

頭を下げられまくり

「もういいですよ、それに軽率な事をして誤解を与えてしまったのも自分の責任ですし」

俺は言い

「部屋はそのままにしてあるからできれば・・・戻ってきてもらえないかな・・・」

真霜さんは言い

「本当だ、何もいじつちやいない。」

真冬さんも言い

「いえ、戻つていいのなら是非に戻らせて頂きます。」

言うのと二人共明るくなった。しかし牧瀬さんの事が少し引つかかっていたが

「どうせならうちに呼んだら？お部屋は余つてるし仕事の機材おいても構わないし一人

よりも皆の方が楽しいじゃない？」

真霜さんの提案を受け

「とりあえず話してみないとどうにもならないのでは？」

俺はいいその日の晩に牧瀬さんに話彼女はOKで俺は荷物をもって追い出された宗谷家に戻る事ができた。

第38話～守るべき大切な存在～

宗谷家 夜

「えっと、牧瀬栞菜です皆さんよろしくお願い致します。」

ペーリと彼女は頭を下げ

「堅苦しい挨拶なんて抜き抜きもつとフランクにしましょう」

真霜さんはい

「如月さんに加えてもう一人増えるなんてホントに賑やかになるわね」

真雪さんは言い

「お酒イケる？」

真冬は早速お酒をすすめ

「栞菜さんはお仕事は？」

真白ちゃんが聞き

「えっと・・・漫画家です」

答え

「料理大丈夫～」

真霜さんに言われ、キッチンで料理している俺は

「今終わったところ、持ってくる」

そう言い、皿を運びダイニングギリギリに皿を並べる。

「流石だわ。」

真冬さんが言い

「美味しそう……」

栞菜さんも言う。皆で夕食を食べ俺は数日ぶりの自室に戻る

「？」

テーブルに手紙が置かれてあり

「疑ってごめんなさい、真白。追伸、真霜ねえさんがお花を飾ってました。」

ましろちゃん置いていったようで

「気にしなくてもいいのに」

思っていると

「ほんこん」

ドアをノックする音が聞こえ

「どうぞで」

言うとき真霜さんが入ってきた。

「えっと……………」

気まずそうにしているが

「まあ座って下さい」

互いに座り

「……………」

真霜さんは無言で俺の左頬をさすり

「ごめんね…………痛かったでしょ……………」

彼女の手を取り

「ううん、紛らわしい事した俺にも責任あるし真霜さんでも真冬さんでも誰にでもいいから一言相談すべきだったよごめん軽率な事をしたと思ってる。」

俺も謝る。不幸な誤解が招いた事だからだ。

「……………」

「……………」

互いに無言になる。

「やっぱり、貴女がそばにいと落ち着く……………」

ふとこぼす。何故だか知らないが真霜さんと居るのが、一緒に過ごすのが当たり前になつてしまったからなのか分からないがそう思っていた。

「!!」

真霜さんは面食らったような顔をし

「えっと反応に少し困るんだけど・・・」

彼女をみると顔が赤くなっていた。しかし、一点彼女は仕事の顔になり

「今日のアレどう思う?」

言い

「米海軍は俺達の海軍の遠洋能力のデータが欲しいんだろう、いくら同盟国とはいってもね。聞けばこの世界でのイージスシステムは日本が開発に成功した事になってるしそれを米軍にライセンスで売って儲けているようだし。だから米軍としても面白くないんだろう。日本海軍の遠洋能力が向上するのは」

言い

「なる程ね・・・」

真霜さんは言い

「今回の件が仮に本当にイランの仕業だった場合本当に海軍は出動すると」

ズバリ聞く中

「確実的な証拠があればね、恐らくは米国はでつち上げてでも上げてくるだろうから情報部あたりにも映像解析機でも借りないといけないだろうけどもね」

答え

「俺達の世界でも米軍はそんな汚い手段を講じたと思われる痕跡はある残念ながら確たる証拠がつかめないのが口惜しかったがね」

俺は言った。

「……………」

真霜さんは何か言いたげなようだったが。

「今日はありがとう。明日からよろしくね」

彼女は行ってしまう。たまたま目に入った花瓶を見て

「リナリアの花……………！……………まさかね……………」

こっちの世界に来る前に幼馴染がやたら花言葉に詳しく俺に色々と吹き込んでいた。だから

「……………この恋に気づいて……………」

まさかね……………風に揺られてなびくりナリアの花を見て思っていた。

真霜 side

「私の気持ちに気付いてとは言わない、でも意識して欲しい……………」

内心は感じていた。

真霜 side アウト

翌日さらに事態は悪化している事を知る事になるとはこの時知らなかった。

第39話～状況悪化、商船撃沈～

翌日何時も通りの日課を終え、戻ってくると既にダイニングで真霜さんと栞菜さんの二人が朝食の準備をしていた

「やる事ないと落ち着かない・・・」

そんな事を思いつつテレビをつけると

「ご覧下さい、タンカーが沈没して行っています。日本商船とイギリス国籍の商船の二隻が沈んで行きます救命ボートも山のように・・・はいはい・・・ただいま入ってきた情報によりますと、攻撃は魚雷とも機雷とも言われて情報が錯綜しています」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺も真霜さんもそして栞菜さんも開いた口がふさがらなくなった。朝食後に出勤そして会議室に置いて米軍提供の水中において撮影された映像を元に

海軍高級士官・将官・海上安全整備局幹部・米海軍士官

「イランの犯行を疑う余地はない、事は一刻を争う艦隊の編成を急ぐべきだ」

海上安全整備局の高官は熱くなり

「キサラギ准将、事態は急迫しています。艦隊の派遣は避けられないと思われませんが」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

米海軍エステリド中佐は言うなか

「発言よろしいですか、准将」

真霜さんが手を挙げ

「宗谷一等保安監督官どうぞ」

俺は言い

「今回の攻撃についてですが、イラン海軍による機雷での攻撃でならば可能性はあるでしょうが機雷でここまでの大穴が開くでしょうか？」

真霜さんは言い

「続けて」

俺は言い

「はい、この攻撃は魚雷での攻撃の可能性が濃厚かと思われませんがイランに雷撃可能な潜水艦はあったでしょうか？」

その一言で俺や高本中佐以外の海軍側はハッとしましたような顔になり

「私も同じ事を考えていました。イラン海軍にここまでの攻撃能力が果たしてあったか

いなかを機雷ならば可能性は濃厚でしょうしかしここまでの損害になると魚雷の可能性も捨てきれない。」

言い

「情報提供感謝します」

エステリード中佐に謝意を述べ

「諸君、流石にここまでの被害が出ては我々も看過はできないだろう。状況の推移を見つつ上層部に艦隊編成を進言するものとする。異論のあるものは？」

周りを見つつ言い誰ひとりとして異論を挟むものはいなかった。米国側も満足そうだししかし奴らは気付いていない。誰も「空母機動部隊」派遣を進言するとは言っていないからだ。会議終了後

「如月准将、」

真霜さんに呼び止められ

「さっきの艦隊編成進言って本当？」

言い

「本当です。ただ、通常編成で「空母」は出すつもりはありませんが」

ニコツとすると

「貴方って人は……」

真霜さんも言い

「アメ公を嵌めてやりましたがね」

言い

「それでは失礼」

俺はそのまま後にし

「司令官室」

「なるほどな、アメリカ海軍は「ヘリ空母しようほう」のデータが欲しいとだからしつこく空母艦隊の派遣を進言するように貴官に求めてきたわけか」

大石司令長官は言い

「司令、そのような要求は突っぱねるべきです。イかな同盟国とはいえ国防機密に該当するそれをおいそれと出すわけにはいきません」

原副司令も言うなか

「一応、艦隊編成を進言します。ただ通常編成ですが」

言うとは大石司令はニンマリと笑い

「なるほどな、アメリカを嵌めた訳か、准将」

大石司令がいう中

「どういう事です、司令」

原副司令が言い

「明確には言わずただ「艦隊編成」を進言すると如月准将は言い恐らくはこの発言で米海軍は「ヘリ空母しようほう」が出てくると踏むだろうがその実は「通常編成」つまりイービス艦数隻と汎用駆逐艦数隻そして潜水艦数隻の通常編成というわけだ」

大石司令は言い

「上手い事やったな准将」

原副司令も言い

「ええですが、事と次第によつては「ヘリ空母しようほう」の出番もあるかと思つています」

伝えると

「そうだな、私もそれはあると思つている。」

大石司令長官も頷き同意した。しかし事態は思わぬ方向に動き出す。

第40話くデフコン2く

海軍港

艦隊出航の準備を急ピッチで進めている。事態は切迫した状態にまで進んでしまつた。

イージス巡洋艦はぐる

「大事になつたな、副長デフコン2が発令されるとはな」

俺はVLS・四連装ハーブンプン発射筒にミサイルを艦首・後甲板のCIWSに20mm機関砲弾を補充している作業を見つつ

「ええ、これはもう艦隊派遣以外に選択はありませんからね」

高本中佐も言い

「ああ、まさか日本の船が拿捕されるとはな。そこまでの事態に発展する事を読み切れなかつた俺の責任も一端はあるだろう」

言い

「そこまで責任はありませんよ」

彼は言い二人で左右の艦も見る

「あしたか」・「いそかせ」の両イージス駆逐艦も装備の補充や整備等急ピッチで進めています。「はぐろ」よりは準備が遅れています。また汎用防空駆逐艦「はるづき」そして「ふゆづき」が装備の積み込み中尚現段階ではVLSの補充作業中そして対潜警戒駆逐艦「しらぬい」は魚雷の積載が完了し最終チェックも作業完了です。随伴する潜水艦「たつなみ」「やまなみ」の2隻も準備完了です。」

報告を受け

「ご苦労、我々の「切り札」は？」

聞き

「へり空母しようほう」は各種へりの積載は完了・予備の燃料・弾薬その他装備の積み込み作業中作業完了まであと一日はかかりません。」

翼は淡々と報告する。

「そうか・・・出番が無い事を祈っていたが「へり空母機動部隊」の出番が早々に来ってしまうとはな・・・」

俺は言った。艦隊の任務はイランに対し最大限の圧力をかける事、万が一の際には敵の地对艦ミサイル陣地や海軍軍事施設にミサイル攻撃を掛ける。最悪の事態になればデフコン1になるすなわち「戦争」になるという事だ。

神妙な顔をしていると

「こんな異常事態見た事ないわ……」

タラップを伝い真霜さんが登ってきていた真冬さんを伴い

「准将、まるで戦争に行くみたいだぞ」

真冬さんは言い

「さっきの艦隊の補充作業見ていたけども各艦CIWSも20mm通常弾を取り除いて全部実戦用途用の「20mmタングステン弾」を装備していたし、VLSも実戦を想定した各種ミサイル選り取りみどりの重装備そして潜水艦も魚雷を満載にしてそしてへり空母も出動する事が決まったみたいね」

真霜さんも言い

「米国・日本・英国商船が拿捕されてこつちもだんまりというわけには行きませんかからね」

俺は言った。まるで一日は艦隊出航準備に潰えさす事になる。話は前々日に遡ることになる。

前々日 夜中

優也ルーム

「ZZZZZ・・・ZZZ・・・ZZZ」

「ZZZZZ・・・ZZZ・・・ZZZ」

あれ以降真霜さんがこっちで寝る事が多くなり俺も気づけばさして気にしなくなっ
ていった。そんな中

「大変です～～」

栞菜さんが部屋にノックもなしに入ってきた。俺も真霜さんも目を覚まし

「どうしました?・・・むにゃ・・・」

目をこすり

「どうかしたの?・・・夜中の2時よ・・・」

真霜さんも目をこすりながら時計を見て

「二人共イチャついてる場合じゃないです」

言いたい事はあつたが栞菜さんに俺も真霜さんも引きづられるように彼女の部屋に
行きテレビを見ると

「嘘・・・」

「これは・・・まずい事になったわ・・・」

俺も真霜さんも言った。眠気なんてぶっ飛んだ。テレビに映ってるのはイラン海軍

に拿捕され拘束されている船員たちだった。

「……これでもうチェックメイトだ……艦隊の派遣は避けられない。いやデフコンがかかる可能性もある……」

画面を見つめて呟き

「……………」

真霜さんは言葉を失い

「はぁ……明日から寝られない日々が続きそうだな……」

こうして今に至る。

「艦長、本艦の整備・各種ミサイル・CIWSの弾薬積載完了しました。」

乗組員の報告を聞き

「了解した。……………」

あの時の感覚が蘇る。尖閣紛争時のあの時の感覚が。

「今現在本艦を含めた「はぐろ」・「しらぬい」・「はるづき」・「ふゆづき」・「たつなみ」・「やまなみ」は準備完了「あしたか」・「いそかぜ」は装備積載完了。最終チェックに入った所です。えつと最後に「しようほう」は……航空燃料とヘリの予備弾薬を積載中全作業完了並びに最終チェック完了は最短でも明日になります。」

報告を聞き

「出向は最短で明後日になりそうだな……この調子でいくと……」

言い

「そうですね……」

翼と話していると

「作業ご苦労」

大石司令長官に声をかけられ

「敬礼っ」

周りの乗員は皆敬礼する。真霜さんも例外なく。

「本日イランの日本領事館から連絡があったがどうやら拘束されている事は本当らしい。そして今回は大鷹総理そして西郷外務大臣自らがイランに赴き会談を行うそう。我々艦隊はホルムズ海峡付近で待機しイランに圧力をかける。万が一の際は軍事施設を対象に攻撃を掛ける。そして今回直々に艦隊総指揮を執るようにと大鷹総理より指示を受け今各艦共に状態の確認を行っている所だ。如月准将今回は大いに期待している。だが穏便に解決する事を我々も望んでいる。武装はあくまでも「自衛」こちらから仕掛けるのはあくまでも最終手段だ。それを覚えておいてくれ」

大石司令長官より言われ

「万端心得ております」

俺は答えた。大石司令長官もやはり今回の艦隊派遣はあくまでも「威嚇」というのを念頭にお考えのようだ。確かに変にこじれて戦闘にならないようにこちらはやれる事をやるだけだ。外交の腕の見せどころになるだろう。海を眺めつつ俺は感じた。

第41話～緊迫の海域～

ホルムズ海峡

第一へり空母機動部隊 艦隊防空イージス巡洋艦「はぐろ」

「……………周り一面漆黒の闇か……………」

CICに籠もりはや数時間、艦隊はホルムズ海峡の入口に陣取っている。今回の航海にもブルーマーメイドから数人の隊員がよこされている名目は「海賊・武装集団の逮捕権限を持った捜査官の同行」となっている。

「准将、もうだいぶ時間が経つわコーヒーいかが？」

後ろから海軍の貸出した救命胴衣とヘルメットを装備した真霜さんがコーヒーを出してくれる。

「ありがとうございます。頂きます」

コーヒーを受け取り一口すすり

「美味しい」

コーヒーを飲む。

「レーダー士官・ソナー何か反応はあるか？」

問い

「艦長、特にありません。各艦からも発艦している哨戒ヘリも反応はありません。」

報告を受け

「同様です、海中も静かです……静寂そのものです」

報告を受けるも

「油断するなよ」

「了」

部下たちの返事を聞きつつ漆黒の海を見ながら指示を出す。防空・対ミサイル防御体制はほぼ抜かりなしと個人的には思っている。前衛はイージス艦3隻で固め後衛に汎用防空駆逐艦を2隻そして対潜警戒駆逐艦1隻を配置し海中も潜水艦2隻とぬかりなし。しかし全くの完全無欠という訳でもない。イージス艦は低空で接近する目標は探知できないという欠点がある。

「……………」

無言で考え込んでいいると

「どうかしましたか?」

真霜さんは言い

「いや……………イラン政府当局はは本当に何を考えているのかとね……………」

ため息を付きつつ

「会談がこじれないように私達は祈るしかないわね」

真霜さんは言った。

防空イージス駆逐艦「あしたか」

「どうだ、異常はないか？」

艦長の山本中佐は言い

「ハイ艦長、哨戒ヘリからの報告も異常なしです。」

レーダー要員、砲雷長は答え

「そうか、このまま何事もないとイイが」

山本中佐は言った。

防空イージス駆逐艦「いそかぜ」

「ふう．．．．何もなしかい．．．不気味やな」

艦長田中中佐は呟く

「本艦からの哨戒ヘリからも異常なしの報告が来ています。」

砲雷長の返答に

「ソナーはどうかや……なんか引つかかったか？」

田中中佐は言い

「いいえ、反応ありません。海中は静かそのものです。」

「了や、引き続き警戒を続行。」

田中中佐は艦長の椅子に座る。

汎用防空駆逐艦「はるづき」

「艦長、最新の報告ですが海域は静寂そのものです。レーダー・ソナー反応なし哨戒ヘリの報告も同様です。」

汎用防空駆逐艦「はるづき」艦長成瀬美加月中佐は報告を受ける。

「了解しました、引き続き対空・対潜警戒を続行。気を抜かぬように」

副長に命じ

「はッ各員に通達します。」

敬礼しセクシヨンに戻る。

「前衛のイージス艦だけでなく我々護衛の駆逐・巡洋僚艦と共にその能力を發揮せねば艦隊は守れない。」

汎用防空駆逐艦「ふゆづき」

「静かね……不気味なほどに……」

汎用防空駆逐艦ふゆづき艦長鏑木皐月中佐は呟く。艦隊の後衛の為艦前方に旗艦

「しようほう」が見え横には対潜警戒駆逐艦「しらぬい」が見える。

「……不気味とはこの事ですね、艦長。」

副長は言い

「ええ、でも油断しない事です。どこに敵艦・敵潜が潜んでいるかわかりません。」

「ハイ艦長」

緊張しているような面持ちで乗組員は警戒に当たっている。

対潜警戒駆逐艦「しらぬい」

「艦長、ソナー・哨戒ヘリの報告では異常なしとの事です。引き続き警戒に当たらせませす」

副長は報告し

「了解した引き続き警戒を厳とせよ。艦の最大の敵は潜水艦だ。油断するなよ」

ふゆづき艦長矢野中佐はモニターを見ながらいったのだった。

第一へり空母機動部隊旗艦「しようほう」

「司令長官入られます、敬礼っ」

CICに大石司令長官が入る。

「涌井少将、艦隊の現状の報告を」

「ハッ、艦隊は現在各艦共に対空・対潜警戒を厳としつつ哨戒へりによる二重の探知網を引いております。」

報告を聞き

「うむ各艦共に問題はないな」

大石司令長官は言い

「我々の存在はイランに対して良い圧力となる。万が一のことがあれば艦隊の総力を挙げて軍事施設を叩くなど拿捕に対しての報復攻撃ができる。だが何も無いことに越したことはない。各艦とも全力で任に当たってくれ。」

大石司令長官は言い各艦共に眠れぬ一夜をすごす。その頃陸地では・・・

第4 2 話～報復?!

イラン

「大鷹総理、これはどういう事か説明願いたい。あの大艦隊は一体・・・どういふつもりでイラン側は言い」

「貴国がおかしな動きを見せれば、即日本商船拿捕・乗組員拘束の報復として艦隊による大規模な「報復」攻撃を行うつもりで艦隊と共に此処に着た。」

総理は説明し

「待ってくれ、拿捕?!、拘束?!」

相手は反応を見せ

「拿捕ではない、拘束ではなく保護だ」

イラン側は答えるが

「大使館からは拿捕・拘束で間違いないと連絡をもらっていますが」

西郷防衛大臣も言い

「大臣それは違う、そもなぜ友好国の日本の船を攻撃・拿捕乗組員の拘束をする必要があると」

相手側は言い

「詭弁ですな」

西郷防衛大臣は言い

「こちらの要求は拘束している乗員を国家を問わず即時解放し拿捕している船舶の出航を認める事だ」

言い

「日本国籍・英国の商船はともかく・・・米国は・・・」

言い淀んで居ると

「それがそちらの回答ならそれでも構わない、我国は貴国に経財報復と軍事報復両方を行う。それまでだ」

大鷹総理は言い切り

「ちよつと待つてくれ」

イラン側は言い話は進まない。その頃

ホルムズ海峡

アメリカ海軍

「凄い布陣ですね・・・あれをすり抜けて攻撃なんて・・・殆ど不可能ですよ」

潜望鏡を一時的に上げて海面の状況を見て乗員はいう

「しかし、ヘリ空母を撃沈しろとはまた滅茶苦茶な命令だ。我々に死ねと言っているよ
うなものだ」

艦長ジェームズ・ライアン中佐は言い

「日本は我々の同盟国ですよ、本当にやるんですか?」

副長は言い

「艦隊の布陣を見てもかなりの防御ですよ、潜水艦を2隻海中に配備しているこれを回避する術が我々にはありません。」

付け加え、副長は言う。

「今は隙を伺うしかないな……闇雲に攻撃しても倒せるような艦隊じゃない。」
ライアン中佐は唸る。

第1ヘリ空母機動部隊 艦隊防空イージス巡洋艦「はぐろ」

「……不自然だ」

俺は言い

「艦長?」

翼は言い

「イラン軍の奴ら直ぐに仕掛けて来ると思っていたが・・・」
言い

「一応は友好国ですからね。」

翼は言い

「でも用心に越した事は無いわ」

真霜さんは言う。

「それにアメリカ海軍の動きも気になる」

俺は言い

「なぜアメ公？」

翼が言ったが

「この艦隊は奴らにとつては目の上のたんこぶだ。潰すならアクションを起こしてきてもおかしくはない例えば「対潜戦」とかな」

言い

「という事は・・・最悪は二面戦闘になる可能性もあると」

翼は驚き

「そういう事だ。対地・対潜戦闘になる可能性を考慮しないとイケない」

答え

「例えば・・・潜水艦が数隻いてもおかしくはない。救いなのはこの世界で原子力がまだ実用化されていない事だ。通常動力型なら潰しようはいくらでもある。それに核汚染の心配もないからな」

翼に言い

「でも、何も無いに越した事はないわ。」

真霜さんが俺達の会話に入り

「そうですね」

言ったのだった。

第43話　日本海軍VSアメリカ海軍1

ホルムズ海峡

第1ヘリ空母機動部隊　艦隊防空イージス巡洋艦「はぐろ」

C I C

「……やはり嫌な予感がする……」

俺は呟き

「如月准将……」

宗谷一等保安監督官は言い

「対潜哨戒ヘリを発艦させますか？」

副長の高本中佐が続け

「……いや……私の一存ではな……」

言った。しかし、頭の中では

「もし米国が黒幕だったら？」

「米海軍が絡んでいるのだとしたら？」

「目的は？」

腕を組んだまま考えこみ

「司令官にお伺いを立ててみよう、嫌な・・・不吉な予感がする・・・」

俺は言い

「通信員、しようほうC I Cに通信を頼む・・・」

指示を出したのだった。

第一へり空母旗艦「しようほう」

C I C

「大石司令長官、イージス巡洋艦「はぐろ」艦長如月准将よりお話したい事があるそうです」

通信員は言い

「ほう・・・彼も・・・かな」

ニヤリと大石海軍中将は言い

「司令長官？」

和久井少将が言うなか

「如月准将、私だ、大石だ」

大石司令長官はヘッドセットを被り

「司令長官、突然申し訳ありません」

如月准将は言い

「貴官と同じ事を私も考えていると思う。貴官も「嫌な」「不吉な」予感がするのではないか？」

私が彼に問うと彼も同じ事を感じていたようで

「よかろう・・・対潜哨戒用に追加の哨戒へりを飛ばそう」

言うとは

「もう一つなのですが、「あえて罨」を仕掛けようかと思つて居るのですが」

如月准将は言い

「ほう・・・何か奇策でも思いついたかね」

言い、彼が私に伝えた作戦に

「貴官もなかなかやるな」

さらにニヤリと笑い

「通信員、代わつてくれ私が直接電文を打つ」

大石司令自ら伝聞を打ち始めるのだった。その相手は・・・

海中

最新鋭リチウムイオン蓄電池搭載型潜水艦 SS-511 「たつなみ」

「艦長、電文です」

副長の速水健二少佐がプリントアウトされた電文を渡し

「おう」

艦長の深町洋中佐が受け取り

「なるほどなあ……」

プリントアウトされた指示書を読み

「どうしました艦長？」

速水少佐は伺い

「こいつを読んでみる」

深町中佐は速水少佐にプリントアウトされた紙を渡し

「……これでは艦隊の防衛にわざと隙を見せるようなものではありませんか」

速水少佐が言うなか

「大石司令もイージス艦「はぐろ」艦長の如月准将も分かってやがる」

深町中佐はいい

「どういふ事ですか艦長?!」

速水少佐はいい

「この海域に恐らくはアメリカ海軍の潜水艦が潜んでると艦隊総司令と如月准将は踏んでいるんだ。目的は恐らくは……」
「しょうほう」の情報収集かあるいはその撃沈かそれとも両方か……」

深町中佐は不敵な笑みを浮かべながらいい

「ちよ……ちよつと待つて下さい艦長、米国は我々にとつても同盟国ではないですか。本気で消しに来るとお思いで?」

尋ねると

「くるな、日本海軍の突出した能力は米海軍や米国にとつても目のたんこぶだ。これ以上俺達に強くなられたら困るのさ」

深町中佐は速水少佐に言い

「今の所、イージスシステムを採用している国はそう多くはありませんし、協議中の国もありますし」

速水少佐は頷きながら言い

「そうと命令が下ればやるぞ……スクリュー逆進、バックして無音着底。魚雷装填を忘れるな」

深町中佐は言い

「了」

速水少佐は頷き

「魚雷戦用意ッ」

指示を出したのだった。

最新鋭リチウムイオン蓄電池搭載型潜水艦

SS—512 「やまなみ」

「艦長、艦隊総司令からです」

やまなみ副長の山中栄治少佐が艦長の海江田四郎中佐に同じくプリントアウトした紙を渡す

「ふむ……私と同じ事を上でも考えていたか」

海江田中佐は言い

「これは……もしや」

山中少佐は言い

「その通りだ、この海域には米海軍のディーゼル潜水艦がいる。」

海江田中佐は山中少佐に言い

「おそらく彼らの任務はこの艦隊の情報収集か旗艦「しょうほう」の撃沈かはてまた両方か」

海江田中佐は腕を組みつつ言い

「副長、魚雷戦用意、スクリュー逆進無音着底だ。艦隊にわざと隙を作りそこに敵潜を誘い込む」

海江田中佐は素早く指示を出しつつ

「ソナー、僚艦たつなみの動きはどうだ？」

聞き

「はっ……たつなみ同じくスクリュー逆進……魚雷注水音……」

それを聞き

「流石深町だ……もし撃つてきたらこちらも応戦も可だそうだ。ただし諺文を撮るのを忘れるなどの事だ。」

海江田中佐は指示を出し

「了」

山中少佐は言い「やまなみ」も「たつなみ」同様に作戦行動に入るのだった。

ところ戻って

イージス巡洋艦「はぐろ」

「艦幅2500から3500に広げ」

米潜水艦をある程度誘い込むために隙をわざと作る。無論、いつ最高司令官たる大鷹総理から命令が下つてもいいように対地戦闘も抜かりなしで準備しておりその上で対潜戦闘の準備も同様である。

「艦長、これで引つかかりますかね？」

高本中佐は言い

「もしこの海域に居るならば・・・何らかのアクションがあるはずだ。それに海中に潜んでいるのは最新鋭の潜水艦で最高の指揮官が指揮を執り最高の乗員が操艦する艦だ。」
俺は海中で艦隊防衛に就くサブマリナーに絶対の信頼を置いていた。

その頃

米海軍ディーゼル潜水艦「シーフォックス」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ソナー要員が首をかしげつつ装置の集音レベルをいじる摘みを回す

「どうした？」

ライアン中佐は言い

「艦長、敵艦隊は艦幅を広げた模様です、その上ですが．．．海中警備のはずの潜水艦2隻が消えました．．．」

ソナー要員は言い

「．．．．．」

「．．．．．」

ライアン中佐と副長は顔を見合わせ

「ロストした．．．だと」

副長は言い

「不自然だな．．．．．周辺を動き回るはずもないが．．．」

ライアン中佐も訝しがみ

「諺文は？」

副長が尋ね

「はい、日本海軍の最新鋭潜水艦ですりチウムイオン蓄電池搭載型潜水艦の中の諺文からはじき出されたのはSS-511「たつなみ」とSS-512「やまなみ」です」

ソナー要員の返答に

「まいったな．．．歴戦の勇将と知将が指揮する艦の上にはりチウムイオン蓄電池搭載型の潜水艦となると既にこちらの不利はいがめないな」

ライアン中佐は頭を抱えるも

「しかし艦長、チャンスでは？今艦隊警備の潜水艦がいなければこちらから仕掛ける事ができません。洋上艦で対潜戦は方法は限られます。ですがこちらが主導権を握る事が出来ます。仕掛けるならば今を置いて他にはありません」

副長は言い

「艦長、私も副長に同意見です。日本の潜水艦相手にまともに戦えば恐らくは勝ち目はない。ならばこの隙を活かすしかない艦長ご決断を」

罖を仕掛け待ち構えている事など知らずに彼らはイチかバチカノ勝負に出ようとしていた。

第44話〜日本海軍VSアメリカ海軍2〜

第一へり空母機動部隊 防空イージス巡洋艦「はぐろ」

CIC

「今の艦隊の状況ではしようほうを守る防壁はない状況だ。その上で米軍が仕掛けてくるとしたら、高本中佐、宗谷一等保安監督官さてどの距離での攻撃が予想される？」

二人に質問し

「この世界でも米海軍の潜水艦の主装備がMk48魚雷とすれば……」

高本中佐は考え

「ええ、合ってるわ。米海軍の主力魚雷はMk48魚雷よ」

宗谷一等保安監督官が補足し

「だとすれば射程は……約50ロキ……か」

翼は言い

「海図を出してくれ」

俺は言いモニターに表示される。

「今艦隊は左舷にわざと隙を見せている、そして各僚艦の位置が此処、そして最後の確認

位置からおおよその予測だが「たつなみ」「やまなみ」の位置が此処と推測できる。」

二人に説明し

「なんでです艦長」

翼は言ったが

「待ち構えるには予め魚雷を装填し無音着底して敵ソナーからロストしないといけない。位置的に待ち伏せができるのはこの位置しかない」

翼に説明し

「如月准将、敵潜を撃沈するのです?」

宗谷一等保安監督官は言い

「それは艦隊総司令官にお伺いを立てなければいけません。ですが、相手が先制攻撃をかけてきたらこちらにも迷わず魚雷を撃つでしょう。」

俺は言い真霜さんに向き直り

「保安監督官、この海域は既に戦場です」

彼女に告げ

「通信員、旗艦しようほうCICに通信、敵潜の対処を伺え」

通信員に命令を出す。

「言いました、艦長」

通信員はしようほうへと電文を打つのだった。

旗艦しようほう C I C

「大石司令、イージス艦「はぐろ」より入電です。」

通信員は大石司令に言い

「准将は何と言っている？」

聞き

「はっ、敵潜の対処の指示を求む」

との事です。

通信員は言い

「いかな敵潜とはいえ撃沈してしまうのはマズイか、艦隊総員には頑張ってもらおう。敵潜を拿捕・または強制浮上させる、各艦に打電、対潜警戒を厳としつつ対潜戦闘用意ッ」

大石司令は言い通信員は各艦に文を送る。

イージス巡洋艦「はぐろ」

「艦長、司令より各艦に対潜警戒を厳とせよ、また対潜戦闘用意ッ」

との命令です。

通信員は言い、インカム越しに

「総員、対潜戦闘用意ッ繰り返す対潜戦闘用意ッ」

命令を下し艦内で警報がなりまた水密扉を非常閉鎖する。

イージス駆逐艦「いそかぜ」

「艦長、水密扉閉鎖完了。」

報告を聞き

「敵潜は既に潜んどるんや、きい抜くな」

田中中佐は部下に厳命する。

イージス駆逐艦「あしたか」

「対潜戦闘用意よしッ、艦長いつでもASROC発射可能です。」

砲雷長が山本中佐に報告し

「艦内非常閉鎖完了。」

報告が上がら

「了解だ」

空母護衛のイージス巡洋・駆逐艦そして汎用駆逐艦・対潜警戒駆逐艦の全てが対潜戦闘準備が完了した中、海中では

最新鋭リチウムイオン蓄電池搭載型潜水艦

SS-511「たつなみ」

発令所

「ソナー、聞き漏らすな」

深町中佐は指示を出し

「艦長、敵潜は来るでしようか？」

副長の速水少佐は深町中佐に言い

「これだけの隙を見せてやってるんだ、必ず来る。それも……本艦のソナーの探知圏内から奴は撃つてくるはずだ。しかし司令も無茶を言いやがるこれを見ろ」

深町中佐は速水少佐に命令文を渡し

「拿捕・強制浮上?! また無茶をいいますね」

速水少佐は言うが

「まるつきり無理という話でもない、かつてイージス巡洋艦「はぐろ」がホワイトドルフィンの潜水艦相手にその芸当をやってる。魚雷を近距離で自爆させ沈没はしないが浮上しないとマズイ状況に無理やり持っていった方法がある。それを「やまなみ」とやればいけるはずだ。水雷長、魚雷はどうだ行けるか？」

深町中佐は速水少佐に説明し水雷長に魚雷の有無を確かめる。

「問題ありません。」

水雷長は答えるそして

「・・・!!感あり・・・この諺文は・・・米海軍ディーゼル潜「シーフォックス」です」

ソナー員は報告し

「奴は方角と距離は？」

深町中佐は言い

「ドンピシャです。手薄になっている方から向かってきます、距離40」

ソナー員の報告に

「副長、通信用のブイはまだあげたままだったな」

速水少佐に尋ね

「はいそうです、艦長」

答え

「旗艦に敵潜接近を知らせろ、方角はドンピシャ、距離40、獲物は袋に入ったと」

「たつなみ」通信員から旗艦しようほうに電文が打たれる。その頃僚艦「やまなみ」は

最新鋭リチウムイオン蓄電池搭載型潜水艦 SS-512 「やまなみ」

「艦長、感あり・・・距離40：諺文から米海軍ディーゼル潜「シーフォックス」と断定」

ソナー員は海江田中佐に報告し

「やはり潜んでいたか・・・」

海江田中佐は言い

「艦長、司令からの命令は撃沈ではなく拿捕・強制浮上との事ですが」

副長の山中少佐は言い

「敵潜の戦闘能力を奪うしかないだろう。洋上艦からの攻撃でそれを実際するのは難易度が高いがイージス巡洋艦「はぐろ」がそれを一度だけだがやっている。戦法としては魚雷を近距離で自爆させる必要がある。その上で上から爆雷を投下する必要があるがな」

海江田中佐は言い

「撃沈もやむおえないのでは？」

言ったが

「それでは意味がない。ちゃんと米海軍に襲撃された証拠がなければ最悪はこのまま過去の繰り返しに……いや日米戦争にまでなりかねない」

海江田中佐は訝しみ

「やるしかないようですね、艦長」

山中少佐も言ったのだった。潜水艦が既に戦闘準備を完了し潜むとは知らずに米海軍ディーゼル潜「シーフォックス」は魚雷の発射の為ギリギリの距離まで接近しようとしていた。

米海軍ディーゼル潜「シーフォックス」

「ライアン中佐、順調であります。あと5^キ後に魚雷を発射し本艦は海域を離脱します。」

水雷長は報告するが

「……………」

ライアン中佐は腕を組み

「艦長?!」

副長も言い

「…………順調すぎる…………恐ろしいくらいに…………そして余りにも出来すぎているよ
うな気がしてならない」

ライアン中佐の予感が的中していたのがわかったのは後の話になる。最新鋭潜水艦
が待ち構える罠の中にまんまとはいってしまった事に彼は知る由もない。

第45話く日本海軍VSアメリカ海軍3く

米海軍ディーゼル潜「シーフォックス」

「艦長、魚雷発射ポイントです、命令願います」

水雷長が言い

「うむ・・・目標日本海軍ヘリ空母「しようほう」魚雷はっ・・・」

言おうとした時だった。

「待つて下さい、艦長」

ソナー員が言い

「・・・魚雷発射口開口音・・・敵潜2隻・・・エンジン始動・・・」

ソナー員が叫び

「!!魚雷探知ツ・・・8本向かってきます・・・!!!撃つてきたツ」

言い

「バカな・・・読まれていたというのか・・・囹を排出して魚雷をかく乱させろ」

指示を出すか

「近すぎます。今距離では囹の効果は期待できませんツ」

急いで回避行動を取ろうとするシーフォックスの鼻先で魚雷が自爆

「被害を報告しろッ」

ライアン中佐は言い

「鼻先で魚雷の爆発を受けました、魚雷発射管室浸水ッ」

報告を聞き

「発射管室の浸水を止めろッ。魚雷戦用意ッ」

その頃

最新鋭リチウムイオン蓄電池搭載型潜水艦 SS-511 「たつなみ」

「魚雷爆発音確認ッ」

ソナー員が言い

「海江田の野郎もやはりこの距離で撃ったか、予想通りだ」

深町中佐は言い

「シーフォックスの損害は大丈夫でしょうか・・・いかな敵とはいえ魚雷8本ですからいくら自爆といえど攻撃能力を殆どそいでしまったかと思われませんが」

速水少佐は言い

「それが目的だ、攻撃能力を削いでしまえば後はヘリの仕事だ、徹底的に追い回して爆雷を落としまくる。嫌がおうでも浮上せざる追えない」

深町中佐は言った。

最新鋭リチウムイオン蓄電池搭載型潜水艦 SS-512 「やまなみ」

「艦長、魚雷8本ともシーフォックスの鼻先で自爆しました、相当な損害を与えたと思われますが」

副長の山中少佐は言い

「そうだな、しかし流石深町だ私の考えを読んで合わせて撃った。」

海江田中佐は頷き

「さて、敵はどう出てくる……最も攻撃手段があればの話だが」

海江田中佐は考えこむが、海江田・深町の両名はこの時点でまだシーフォックスが完全に戦闘能力を消失していない事に気づいては居ない

米海軍ディーゼル潜「シーフォックス」

酷い浸水が収まり始める中、損害が明らかになってくる

「艦長、報告します。敵潜の魚雷攻撃により魚雷発射管が1門を残し使用不能。浸水も

おあさまり切らず撃てたとしても「あと一発」が限度だそうです」

副長からの報告に

「……やってくれるじゃないか……日本海軍め……だが唯では死なん……」

ライアン中佐は言い

「最後の二撃をお見舞してやる、目標敵「空母しようほう」撃てっッ」

命令しシーフォックスは一矢報いる為に最後の二発を発射した。

最新鋭リチウムイオン蓄電池搭載型潜水艦 SS-511「たつなみ」

「艦長!!魚雷探知ッ」

ソナーの声で全員がソナーに釘付けになり

「なに?!」

深町は言い

「しまった!!完全に無力化できていなかったか!!」

そう言っても既に後の祭り

「デコイ発射用意ッ」

深町中佐は言うが

「近すぎます、間に合いません」

魚雷は高速で「たつなみ」の脇を通過していった。

最新鋭リチウムイオン蓄電池搭載型潜水艦　SS-512「やまなみ」

「艦長!!魚雷ですシーフォックスが撃ちました、完全に無力化されていなかった模様です」

ソナー員は慌てて報告し

「しまった、甘かったか!!」

山中少佐は言い

「デコイ発射用意急げッ」

指示を出そうとするが

「無理だ、山中、この距離ではデコイの効果も期待できない、完全に我々の落ち度だ」

海江田中佐はモニターを見ながら言った。その頃洋上では

艦隊防空イージス巡洋艦「はぐろ」

CIC

「艦長、「たつなみ」「やまなみ」が撃ち漏らしました。敵魚雷1本がまっすぐししょうほう

に接近」

レーダー要員は報告し俺もモニターを艦の陣形を見て

「(まただ・・・また・・・なのか・・・)」

一瞬感じたが

「機関後進全速バックだッ」

命令を出し直ぐにインカムを取り

「左舷要員退避急げッ、鉄鉢を着用せよッ、総員衝撃に備えッ!!!」

この世界の三重の防御システムにそして巡洋艦だ簡単には沈むまいそう信じて空母を守る為に盾となる判断を下した。

旗艦へり空母「しようほう」

「司令、「はぐろ」が我々の盾に!!」

魚雷としようほうの間に割って入るようにイージス巡洋艦「はぐろ」が間に入り我々しようほうの代わりに魚雷が命中した

「ぐぬぬぬ」

和久井少将は唸り、大石司令は直ぐに指示を出す。

「はぐろ」の損害報告を急がせろ、手の空いてる艦艇は対潜警戒を厳とせよ、対潜爆雷を装備した攻撃ヘリをすぐさま発艦させろ頭上から爆雷を徹底的に落としてやれ」

大石司令は指示を出す傍ら和久井少将とモニター越しにその映像を見る

「イージス巡洋艦「はぐろ」が・・・燃えてる・・・」

言葉を失っていた。

イージス駆逐艦「あしたか」

「イージス巡洋艦「はぐろ」が被弾した・・・信じられん」

山本中佐は眩き

「総員はぐろを助けるぞ、急げっ」

指示を出す。

イージス駆逐艦「いそかせ」

「被弾した・・・」

田本中佐は眩き

「艦長、早く助けないと」

副長の声に我に返り

「当然や、手のい当てる者は急ぎ内火艇を下ろす準備や」

田中中佐は言った。

そして

艦隊防空イージス巡洋艦「はぐろ」

C I C

「被害報告急げっ」

視界が歪む中、よろけながら立ちがると真霜さんが前に居たが俺を見るなり真つ青になる。

「血が．．．血が」

額を触ると派手に切ったのかべちやりと暖かい感触がする。

「衛生班急いでっ」

真霜さんは叫び、俺の所に

「艦長、損害報告、艦首左舷付近に魚雷着弾。三重の防御システムが作動し防水隔壁が自動で閉鎖。ただ艦首付近をやられた為、前甲板VLSは使用不能です、最大船速も無理かと、人的損害は重傷6・軽傷15・死亡0」

高本中佐が言い

「りよう．．．か．．．いだ」

額を抑えながら倒れこみ

「艦長ツ!!」

翼は言い

「すまん、高本中佐指揮をい……ん……す……プツつとそこで意識は刈り取られるように途切れて行った。」

第46話～アメリカ政府動く～

ワシントンDC　ホワイトハウス

大統領執務室

「何て事を海軍はしてくれたんだッ」

コーヒが入ったマグカップを投げつけ

「日本とは長年友好的に、装備等の供与貸与を互に行い友好的に過ごしてきたというに」

ドラルド大統領は怒り狂い

「君は何もわかっておらんようだな」

ウォルターズ国防省長官も海軍側の人間に言い

「日本の大鷹総理は我国に次期イージスシステムの共同開発への参加を認め尚且つ優先配備まで確約してくれただけではない、就役したばかりのヘリ搭載型航空機母艦のライセンス料50%カットでの開発認可など大多数の便宜を計ってくれた恩に対しての返事がこれか……」

ドラルド大統領は頭を抱えた。

「ウォルターズ国防省長官、日本海軍の被害・損害は」

頭を抱えつつドラルド大統領は尋ね

「はっ、傍受した内容によりますとイージス巡洋艦一隻がシーフォックスの発射した魚雷から母艦を守る為に盾になり魚雷が着弾、航行は可能なようですが人的被害は深刻かと思われまます」

ウォルターズ長官の報告に

「ぎよ．．．魚雷を発射しただと．．．その上イージス艦に着弾させた上に負傷者まで出してるのか．．．」

完全に絶望的な顔をしていた。

「該当の潜水艦は」

大統領は言い

「日本海軍の反撃に合い魚雷発射不能、今現在ですと対潜へりに追われ爆雷攻撃を受けているとの事です」

ウォルターズ長官は言い

「日本と．．．日本海軍と事を構える事はよろしくないと思われまます。我国の海軍も同盟国の日本あつての遠洋海軍です。イージスシステムなど高度な火器システムなど全て日本製です。」

深刻な顔で言い

「長官、この勝手に作戦立案と実行に移した者を一人残らず逮捕しろ!!軍法会議だ」

ドラルド大統領は言い

「今、日本政府の代表団がイランで交渉しているさなかにこの事態を起こすとは」

ドラルド大統領は唸るが国務省関係者が

「日本の脅しはそうとう効いているようです、イラン軍は各軍事基地に対空防御網を構築し始めております。日本海軍の艦対地ミサイル群の前には無力とは思われませんが」

説明するが

「それよりも、この件についてどう落とし前をつけるのだ。艦を破壊し負傷者を出して何よりもなぜ私に無許可でこんな事をした?私が知っていれば事前に止めたわ」

ドラルド大統領は言い

「どうするのだ、ごめんなさいでは済まんぞこの有様」

言い

「国務省長官、日本からどのような報復が予想される」

聞き

「有り手に言ってしまうえば次世代イージスシステム共同開発国から外され、優先供給もご破産、トドメは「ヘリ空母」建造の為の技術供与もご破産になります。これはまだマ

シで最悪は日米戦争になりかねません。」

ウォルターズ長官も

「大統領閣下、此処は素直に日本に謝罪されるしか道はありません。」

言い

「私もそう思う。やらかした海軍関係者は纏めて軍法会議で処分せねば日本も気がすまんだろう」

ドラルド大統領は言い

「ライベン中将、直ちに「シーフォックス」に降伏・浮上と命令せよ付け加えてこれは「大統領命令」ともだ」

ドラルド大統領は険しい顔で命令し

「了解致しました閣下」

ライベン海軍中将は急いで執務室から退出していった。

第47話くもたらされる報く

「貴国がこれ以上戯言を並べるならばこれ以上話す事はありませんな」

大鷹総理は言い

「では総理、艦隊の総攻撃命令へ移行でよろしいでしょうか？」

西郷防衛大臣も言いイラン側は青ざめる

「ま・・待ってくれ、」

その時だった、

「失礼します」

日本海軍の連絡官が入出し

「総理へ報告であります。艦隊総司令大石中将より艦隊が襲撃を受けたとの事です。雷撃により「イージス巡洋艦「はぐろ」」が被弾、負傷者多数並びに重傷者を出しているとの事です。」

この報告に

「これで決まりですかな」

「ええ」

大鷹総理と西郷防衛大臣はすくつと席から立ち上がり、イラン側の人間は真つ青を通りこして死人色になっている。

「艦の損害報告は」

大鷹総理が尋ね

「はっ、艦首に魚雷は着弾、三重の安全装置が自動作動し防水扉が自動閉鎖したため浸水等の深刻な被害は避けられています。自力航行も可能との事です。」

報告を受けるが

「いえ、総理攻撃してきたのはイラン海軍ではありません、米海軍です」

その報に

「なに?!」

西郷防衛大臣は言い

「イラン海軍からの攻撃へも備え対潜・対水上戦闘状態で警戒していましたが攻撃を仕掛けてきたのは米海軍所属のディーゼル潜「シーフォックス」との報告であります」

その報に

「なぜ米海軍が」

西郷防衛大臣は訝しみ

「総理、艦隊への指示はいかが致しましょうか？」

連絡官に

「急ぎ、はぐろの救援活動を行うように、陣形を整え直し最悪は敵潜の撃沈も許可します」

大鷹総理は言い

「無論、対地攻撃準備も怠りはしないように。完全に彼らイランが白とわかったわけではないのだから」

疑いの眼差しをイラン側に向ける大鷹総理をよそに

「沈没は免れそうなのだな」

西郷防衛大臣は言い

「はい、自力航行が可能ですので大丈夫であります。唯、艦首の被弾により前甲板に配備されているVLSは使用不可能です。ですが後甲板のVLSは使用可能です。」

連絡官は報告し

「不幸中の幸いですな」

西郷防衛大臣は言い大鷹総理と共に椅子に座り直し

「さて、如何しますか？我々は解放に応じなければ攻撃も辞さないと先程から申してお

ります。経済制裁も追加のオプションに入りますが」

西郷防衛大臣がイラン側を脅すが

「貴国は、自国の艦艇が攻撃されているにも関わらず無関心なのか!!」

一部から言われるが大鷹総理は鼻で笑い

「私は最高の部下達を信じていますから現場に任せています。それよりも、貴国は自分の身の心配でもしたらいかがです？ 貴国の対空防空網くらいわが国の艦隊のミサイルは突破しますよ？。軍事施設を火の海にされたいのですか？」

と言った。

「.....」

余計な事を言ったイラン閣僚の一人は黙り

「大鷹総理、我国は友好国である日本と事を構えるまして一戦交えるなど考えておりません。つきましては、貴国と英国の船舶並びに乗員の解放は確約致します、ですが米国については論外です。貴国が同盟国というのも十分に考慮しております」

イラン側は言い

「米国籍の乗員を盾に取った人質外交を行う時点で貴国がいう宗教テロリストと何ら変わりはありませんよ？」

大鷹総理は言い

「我国は、我海軍は逃げも隠れも致しません、お相手致します。ただし、我々にかかってくるつもりならば全滅の覚悟をする事だ。手負いの艦隊でも貴国相手ならば十分だ」

西郷防衛大臣は言い

「閣僚と話し合わせてくれ」

イラン側は言い

「わかりました」

大鷹総理は言い

「では我々は一時退出致します。結論が出ましたらお呼び下さい」
言い退出していったのだった。

第48話〈決着〉

洋上では魚雷を放った米海軍潜水艦「シーフォックス」をヘリ空母「しろうほう」搭載の対潜ヘリがディップリングソナーで追跡しその周囲は爆雷攻撃で滅茶苦茶になっていた。潜水艦は見つからないから驚異なので見つかってしまえば唯の棺桶同然である。そしてヘリ空母「しろうほう」の盾となり魚雷を被弾したイージス巡洋艦「はぐろ」はイージス巡洋艦「はぐろ」

C I C

「皆、狼狽えるな、先の尖閣紛争の時はこれより遥かにヤバかっただろうそれを思い出せ」

艦長の如月優也准将が重傷の為任務を離れ彼の副長高本翼中佐が指揮を取っていた。そして微力ながら私、宗谷真霜も助力していたが、乗組員の練度がよくわかる一面だった。

「副長、機関室異常なしフィン・スタビライザー損傷ありません」

機関科の乗組員が報告し

「副長、こちら医務室重傷者は旗艦「しろうほう」に移したほうがイイかと思われま

軽傷者の手当に少し時間を下さい」

報告を受け

「了解した、」

高本中佐はテキパキと判断を下す

「被弾した左舷艦首付近の状態はどうだ？火災は収まったか？」

インカムに言い

「今現在、第2・第3応急分隊が消火作業中です」

報告が帰ってくる

「第1と第4応急分隊も引っ張ってけ、弾庫に火を回すな引火したらこの艦ごとぶっ飛

ぶっ」

無線に言っている。そして

「浸水被害の状況は？」

周りの要員に聞き

「ハイ、三重の安全装置により被弾箇所のA―110からA―116までの防水扉が自動で非常閉鎖しました。艦内でのこれ以上の浸水は確認されていません。」

報告を読み上げ

「便利なものだな、三重の安全装置は」

高本中佐が言っている中

「よし、皆、C I Cに最小人員を残し艦内に報告にある以上の異常がないかをチェックするぞ水圧は少しの亀裂も見逃してはくれんぞ」

高本中佐は言うのと私に振り返り

「宗谷一等保安監督官スイマセンがC I Cに残っていただけですか？」

言われ

「了解よ、私は何をすればいいの指示を高本中佐」

私は言った。その頃……

アメリカ海軍ディーゼル潜水艦「シーフォックス」

発令所

「左舷爆雷炸裂ッ」

「浸水止まりません」

「魚雷発射管室閉鎖完了」

乗組員達は身を持って日本海軍の対潜能力の高さに恐怖し恐れおののいた。

「艦長、本艦は既に戦闘能力を喪失しました。これ以上はもう無理です。」

「日本海軍は化物か……逃げてでも逃げてでもまるで俺達の位置が手玉に分かるように執拗

に追ってくる。」

乗組員が入っていると

「艦長、司令部より電文です」

プリントアウトされた紙を艦長に渡し

「……………そ……………そんな……………」

艦長のアイアン中佐は言った。文面には

「降伏・投降せよ、尚これはアメリカ合衆国大統領命令である。海軍艦隊総司令部」

記載されており

「……………メインタンクブロー……………浮上だ……………白旗の準備をしておけ」

ライアン中佐は言い

「艦長……………」

副長も言った。浮上し彼らがハッチを開けて始めてわかったが上空には無数の対潜ヘリがおりよく見ると爆雷が満載に装備されていた。

「無念だ……………」

ライアン中佐は一言言った。

旗艦ヘリ空母「しょうほう」

「大石総司令、敵潜浮上、白旗を確認との事です」
報告に

「フウ……ようやくか……後は頼みましたよ……総理……」
艦隊総司令にの大石は一言呟き息を吐いたのだった。

再び戻り

イージス巡洋艦「はぐろ」

「異常個所なし、航行可能です。ただ最大船速は不可能です」

報告に

「艦隊に遅れをとらぬ程度に合わせてやってくれ」

高本中佐は言っていた。そして

「副長、艦長を含めた重傷者は全員「しょうほう」の医務室にへりで搬送されました」
報告し

「これで一安心だな……全くアメ公のアホが変な気を起こしやがって」
高本中佐は毒ついていた。洋上の問題が片付いた頃

「大鷹総理、貴方には参りました。国籍を問わず全乗組員と船舶を開放する事を約束致します」

相手側、イランの代表が言い

「わかりました」

大鷹総理も頷き

「艦隊には数日待機してもらい3カ国の船舶を護衛しつつ帰国するものとなりますが総理」

西郷防衛大臣は言い

「それで結構です。何かあるかわかったものではありませんから」

大鷹総理も満足そうに頷いた。これから数日後、艦隊は各国船舶を護衛しつつホルムズ海峡を後にした。しかし、結局全部解決出来たわけではないのだから残ってしまった疑問もある。でも今はそれどころではないだろうから、これはこれで良しとするしかないだろう。

第49話　アメリカ合衆国大統領来日

造船所ドック

ドランプ大統領やウォルターズ国防省長官など閣僚が大鷹総理や西郷防衛大臣らと共にそこを見る

「この艦が貴国の潜水艦に魚雷攻撃を受け修復中のイージス巡洋艦「はぐろ」です。」

大鷹総理が言いドックに鎮座し造船所職員らが急ピッチで修復作業を行っているのが分かる。

「負傷者15・重傷者7・死亡0・貴国にとって不幸中の幸いは死人が出なかったことですかね、ウォルターズ国防省長官」

西郷防衛大臣は言い

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ドラルド大統領とウォルターズ国防省長官は黙るしかなかった。そして大統領や国防省長官と会談を行うためにセッティングした会場に入り

「大鷹総理、この度の海軍の暴走軍の最高責任者として陳謝致します」

ドラルド大統領は頭を下げ

「起きてしまった事は致し方ありません。」

大鷹総理は言い

「此度の暴走に関わっていた海軍士官並びに情報将校・連絡官等軍属の人間は一律皆軍法会議に掛け処分を決めている最中です。」

ウォルターズ国防省長官は言い

「こちらとしては貴国とは同盟関係の長いお付き合いでしたが、此度の件でお付き合いを考え直さなければいけないかと思つてる昨今です」

西郷防衛大臣も言い返し

「!!!」

反応する兩名

「まずい・・・不味すぎる・・・日本と手を切れば部分的な海軍能力の低下だけではなく海軍全体の能力低下を招く・・・なんとしても回避せねば、海軍の馬鹿どもめ」

ドラルド大統領は内心毒付き

「日本からの恩恵がなくなれば海軍能力の低下が避けられない、処罰だけではやはり怒りの矛を収めてもらうのは無理か、これはプランBで行くしかない」

ドラルド大統領とウォルターズ国防省長官は互いに頷いた。ちなみにアメリカが国

家として日本に対しての対策として立てたプランでは

- 1 イーゼス巡洋艦「はぐろ」の修繕費用の100%の負担
- 2 以前発注があつた「特殊作戦部隊」用の装備品等の購入・納入費用の融通
- 3 負傷したイーゼス艦乗員全員への一律の賠償金の支払い
- 4 国家として公式に此度の衝突を発表し公式に謝罪する。

上記の内容をドラルド大統領は正式に書面にして大鷹総理に渡し

「国家として責任のある行動をとらせて頂きたいと思つています。信賴を裏切るような行為をこの度我々は犯してしまつた、償いはしっかりとさせたい。」

ドラルド大統領は言い、そこで

「西郷君外してくれるね」

大鷹総理は言い

「ハイ、」

西郷防衛大臣に一度席を外してもらい

「ウォルターズ長官外してくれ」

アメリカ側も国防省長官を外した。そして

「ドランプ、災難だつたな．．．今回は。現場の暴走で」

大鷹は打つて変わつて和やかに言い

「全くだ、ヤサブロウ」

ドランプ大統領も言った。

「例の件に関しては正直な所今回の事故で厳しくはなるが我々も分かつてはいる。米軍の協力なくして領海の防衛は難しいと言う所も。例の申し出は有り難く受ける。」

大鷹は言い

「次世代イージス武器システムの共同開発参加国の権利やヘリ空母のライセンス料の50%での造船許可などは滞りなく行っていく。心配なのはそこだろうドランプ？」

大鷹は言い

「その通りだヤサブロウ、今回の海軍の一部勝手な暴走で海軍内部では日本の同盟が解消される可能性があることや、イージスシステムの更新が不可能になる可能性等広範囲で能力低下が避けられない状況になる。正直に言えば直ぐにこうして来日したのもヤサブロウに直談判する為と言い直したほうがいいかもしれない。」

苦しそうにドラルド大統領は言い、さらに

「今回の事は決して許される事じゃない、同盟国の艦隊に攻撃を仕掛けるなんて信じられない蛮行だ、本当に自軍の海軍の仕業かと報告を受け取った時は自分の目と耳を疑ったものだ。」

ドラルドは言い

「日本海軍の人たちの信用を取り戻さねばならない。互いに防衛し合うことで今日まで来た。」

ドラルド大統領は言い

「その通りだ、ドランプ」

大鷹も言った。日本もアメリカと手を切る訳にも行かずそしてアメリカも日本と手を切る訳にはいかない。日本は広い領海に対し海軍の艦艇とブルーマーメイドの艦艇では足りず非常時には米海軍にも協力を要請する。そしてアメリカもまたイージス武器システムの更新は日本頼みであり互いに手を切れば互が倒れるのだ。

「面倒をかけて済まない、ヤサブロウ」

ドランプは言い

「なに、お互い様だ」

大鷹も言い

「ちなみにうちの西郷防衛大臣もこの内容は知ってる。だから問題はない」

答えたのだった。その後、共同記者会見に置いてドラルド大統領は上記の通りに公式に此度の事態を謝罪し艦艇の修理費用の全額の負担・負傷者への賠償金の支払等を公式に宣言したのだった。但し、裏に置いて両国の囁かな密約てきな物が存在する事を知る

のはその会談に立ち会った両国の閣僚の一部と言う事だけである。こうしてこの事態も表向きは収束されて行くのだった。いつも苦勞するのは現場だけとは言ったものである。

第50話 く動き出す未来く

宗谷家所有ロツジ

「へえ・・・すごいなあ・・・」

荷物を持って俺は此処に訪れていた。真霜さんと二人で

「真冬さんも残念だね、仕事が被って真雪さんもまあ受験生のましろちゃんはわかるけども」

俺は言った。あの後病院から退院し一応造船所で「はぐろ」の修復状態の確認を行い何とか年内には完了するとの事だった。そして俺達はその後も地上で色々仕事をこなさしこうして冬季休暇を貰うことが出来た。

「クスっ、荷物下ろしてゲレンデに行きましょ？久しぶりのウィンタースキーよ、楽しまない」と

そう言つて真霜さんは直ぐに着替えるために部屋に行つてしまった。

「さて俺も着替えるか・・・」

部屋でスキーウェアに着替える。そして先に外で待つこと数分後

「ごめんさいい」

真霜さんが出てきた。

「行きますか」

俺は言い

「うん！」

彼女を伴い、ゲレンデでリフト券を購入し、リフトに乗る。

「スキーの腕前どれくらい滑れるか聞いてなかったけど大丈夫？」

真霜さんに聞かれ

「一応、雪国生まれだし、小学校に授業でスキーやってたし、高校でもスキー授業でやってたから結構自信はあるよ」

俺は答えた。

「ふーん……」

意味深に真霜さんは言い俺達はリフトを降りる。

「さて、じゃあ下まで競争して負けたほうがお昼ご飯奢りってのはどうかしら？」

彼女はゴーグルをかぶりながら言い、俺もゴーグルをかぶり

「オッケー、その話乗った」

言った。そして俺と彼女は同時に下を目指してスタートする。その結果は……

「悪いね、真霜さん」

俺は言い

「反則よ、国体の選抜選手だったなんて……もう……」

半分いじけながら言い

「でも次は負けないわ」

彼女は言い

「俺もだよ」

二人で昼食を取りまたゲレンデに繰り出すのだった。そして夜

「ふう……滑った滑った」

大満足で俺はスキーの板を外し道具を纏める、その横で

「はあはあ……結局勝てなかった……」

凹んでいる真霜さんがいた。そして二人してロッジに戻り

「さてはて、夜ご飯は何を作ろうか……」

冷蔵庫を開けると、色々な食材があり

「ほうほう……色々いけるな……」

思い

「真霜さん、鍋で良いですか？」

俺は聞き

「ええ、如何にも冬って感じでいいわね」

真霜さんも頷き

「さあて、作るか」

だし汁から作っていきそして野菜を刻み、お肉を切り準備を整えて行く。その光景を見つめる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

内に秘める想いと共に。夕食後

「ふう・・・食べた食べた」

こたつに入り二人でまったりと過ごしていると

「あ・・・・・・・・雪」

真霜さんは言い、そのままテラスに出ていき

「風邪引きますよ」

彼女のジャケットを持って俺も自身のジャケットを着て外に出る。外はとても神秘的な光景だった。

「ハイ、ジャケット」

後ろから彼女にはおり、俺も彼女と共に夜空を見上げる。本当に神秘的な光景だつ

た。星空に舞い降りる雪。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人でひとしきり神秘的な夜空を眺め言い出したのは真霜さんだった。

真霜 side

「あ・・・あのさ、聴いて欲しい事があるんだけどさ、いいかな」

私は言ったがこの時点で私の頭の中はプチパニック状態に陥りかけていた。「この先」の事をどう伝えるか、家族に冷やかされたりおちよくられたくない為に二人でこの旅行に来たのだから

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼は私の顔を見たまま真剣な表情をしている、何かを感じ取ったかのように。

「私はえっと、貴方がこの世界に転移・・・かな？それから一緒に過ごしてきた、軍人としての貴方、そして普通の人としての貴方全部を見てきた誰かの為に涙を流せる心の優しい人であり、そしていて自分には厳しい人、任務は鋼の意思で遂行する軍人である事、それでいて家族を何よりも大事に思う事その全てを含めて貴方の隣に居ると安らぎを感じる、ずっと貴方の隣に居たいと・・・」

私は言い、覚悟を決め次の言葉を告げようとしたが致命的な間違いを犯し後にその事

で笑われる事になる。

「き・・・如月優也さん・・・わ、私宗谷真霜は一人の男性として貴方の事が好きです、私と・・・」

恥ずかしさの余り次に言うべき一言を私は間違えてしまった。これは家族にも笑われる事になる。

「わ・・・私と結婚してください・・・あ・・・」

何もかも飛ばしてしまった。これは笑えない、しかし

真霜 side 終わり

優也 side

真霜さんの驚愕の交際も同棲?・・・居候してるから同棲してるようなものなのだろうけども全てをすつ飛ばしてのプロポーズに

「クスッ・・・」

笑ってしまうも

「私も貴方の隣に居ると、安らぎとそして何よりも安心する事が出来ます。料理や家事全般は任せて下さい。」

俺は言い彼女の、真霜さんの手を取り

「謹んでお受け致します、残りの人生を一緒に共に歩きましょう。」
彼女に言い、ただ黙って彼女を抱きしめた。

優也 side 終わり

雪がひらひらと振り降りる中、きつかけは真霜さんのすつ飛ばしすぎた告白だった、でもそんな事は些細な事だと思っている。ただただ今は互いに幸せを感じているのだから。白銀の夜空の光景はまるで二人を祝福するように

第51話～変わる関係～

宗谷家

「大事なお話とはなんですか？」

家長の真雪さんとそして真冬さんそしてましろちゃんにまずは話さなければ前に進めない。そしてありのまま話し

「真霜さんとの結婚を認めていただけじゃないでしょうか!!」

言うところの真冬さんに真白ちゃんからは

「えっと、エイプリルフルにはまだ数ヶ月先だぞ」

真冬さんに言われ

「真霜姉さんで本当に良いんですか？」

真白ちゃんにも言われるだが、黙って頷き

「!!」

二人に驚かれ

「そうですが、互いにその気持ち嘘ではないのなら私が口出しすることではありませぬね、如月さんこんな娘ですが大事に育ててきたつもりです、どうぞよろしくお願い致

します。」

真雪さんに言われ

「真霜姉さん……お嫁に行つちやうだね……」

寂しそうに真白ちゃんが言うが

「それについてなんだけどいいかな」

今度は真霜さんが言いだし

「彼と話して決めたのだけれど、彼が是非婿養子に入れて欲しいと」

真霜が言い

「それは本当ですか?!」

真雪さんが俺に言い

「ハイ、皆さんには大変今まで良くして頂きました、私は天涯孤独の身でしたから是非皆さんと「家族」になりたいんです」

包み隠さず言った。俺は家族の暖かさを余り知らない。この世界でこの宗谷家で始めて知った暖かさだ。婿だの嫁だのそんな事は正直結婚する事には変わりはないわけであり些細な事と個人的には認識していた。

「そうですか」

真雪さんは言い

「私共に異存はありません、むしろありがたいと言わせて欲しいです」

言われ

「いえこちらこそ至らない事があるかもしれませんがどうぞよろしくお願い致します」

頭を下げるが

「貴方で至らない事があるならば真霜・真冬・真白の三人では至らないどころのレベルではないわ」

苦笑しつつ言われ

「いいのか、今ならまだ逃げられるぞ」

真冬さんは言ったが

「覚悟は決めています、もう一人の人生のパートナーに対する責任の重さを背負う事も」

答え

「と言う事は……真霜姉と結婚して家に婿養子と言う事は……義理の兄になるわけか……義兄か……いや兄貴の方がシツクリくるかな」

真冬さんは言い

「真霜姉さんの事よろしくお願いします。この通りの姉ですけども」

真白ちゃんにも言われる。

「お二人共、おめでとうございます。」

同席している葉菜さんにもここにこしながら言っている。

「何はともあれ、おめでたい事だわ。肩の荷がひとつ降りた見たい。優也さんこのままよろしくね、後真雪さんではなくお義母さんと呼んで欲しいわ」

言うと同時に

「大石司令長官には感謝しないとね、本当にこうも嬉しい結果になってくれるなんて」
内心喜んでいたのであった。そして上司にも

海軍 第1艦隊司令部 司令官室

「如月准将に宗谷君今日はどうしたんだ？二人共かしくまって」

大石司令長官に言われ

「ハイ、司令長官この度私事ではありますが、「身を固める」事と致しましたので上官である大石司令と原少将にご報告をと思ひまして」

話を切り出すと

「おお、それはおめでたい話だな、原少将」

大石司令は言われ

「確かに、めでたいな。おめでどう准将」

原少将わ言い

「それで、お二人さんプロポーズはどちらが？」

原少将は言い、真霜がおずおずと

「えっと・・・私が・・・恥ずかしい話ですが交際を申し込もうとしたのですが羞恥心とパニックで全部飛ばしてしまつて・・・」

顔を赤くしながら言い

「何と?! 交際もすつとばしてのいきなりプロポーズかね」

原少将は言い

「そのへんで勘弁してやれ少将」

大石司令にも言われ

「そうか、しかしおめでたいな宗谷から如月か」

真霜さんを見て大石司令は言ったが、俺が婿養子に入る事を言い

「そうか。貴官が婿養子にはいつて如月から宗谷になるのか」

大石司令は言い

「式はいつにするのかね」

また原少将が言い

「互いに、多忙な身ですからすぐ直ぐに挙式は挙げられるわけではないですし」

真霜は言い

「とりあえず、入籍だけは忙しくなる前に済ませたいと思います。」

真霜が言った。年が明ければ互いにまた忙しくなる。俺の日程もまた変わる。そしてまた真霜もしかりである。

「とりあえず、報告はわかった。おめでどう二人共」

大石司令に言われ

「ありがとうございます」

そして二人で司令官室を出た。そしてそれぞれ

「おめでどうございます」

副長の高本翼中佐に言われ

「なんかこう・・・これでこの世界に根付くというかなんというか上手く言えませんが、それでもおめでどうございます」

翼は言ってくれた。そして砲雷長の加藤少佐や航海長の山田少佐が

「おめでどう、式には必ず呼んでくださいよ」

「艦長、おめでどうございます。どうぞお幸せに」

二人共言い

「ありがとうございます」

俺は答えた。この世界に飛ばされた時から皆で助け合ってきた。だから俺にとって

はぐろのクルーは皆家族なのだ。もう一つの。

その頃

海上安全整備局

「本当ですか、おめでとうございます」

書類を整理しながら自らの部下である福内と平賀にその事を報告する。

「これで、ホワイトドルフィンの中如月准将に嫉妬する輩が大勢出ますね」

平賀は言い

「でも、最年少准将で将来有望いずれは原少将や大石司令長官の後釜に座るのは確実視されてますものね」

福内も言う。そして

「待って下さい、と言う事は……寿除隊ですか?！」

一つの仮説に至るが

「ううん、彼と共働きよ。」

私は言った。彼は特に私に家庭に収まってほしいとも言わず互いに仕事に理解があるのだから続けられる限り続けられ良いと言う結論に至った。そして

「とうとう「如月一等保安監督官」とお呼びしないといけませんね」

平賀も書類を整理しつつ言うが

「その事だけでもさ、彼が家に婿に入ってくれるからさ私じゃなくて苗字変わるの彼の方なんだ」

私は良い

「えっ?!・・・と言う事は「如月准将」から「宗谷准将」とお呼びする事になるんですか」

福内は驚いたように言い

「これは私もびっくりしたな、前に天涯孤独だと聞いていたから提案はするつもりでいたけれどもまさか自分から婿になって言われるとはおもわなかったな」

書類を整えつつ答える。

「でもなにはともあれ御結婚おめでとうございます」

二人からのお祝いの言葉に

「ありがとう」

私は返したのだった。

第52話〈査察〉

「宗谷……か」

自身の軍服のプレーンとを見て言う去年は「Y・KISARAGI」だったが今年から真霜さんと結婚し婿に入った事から「Y・MUNETANI」と変わったのだ。婚姻届は元日の直ぐに提出し挙式はまだ上げてはいないものの互の間柄が「妻」「夫」に変わったのだ。それを強く実感していた。

「大丈夫ですか？宗谷准将」

部下の翼にクスクスと笑われつつ言うが

「さっ、新年しよっぱなの仕事でポ力はできない行くぞ」

俺達は毎年新年に行われると言う航洋艦の査察に訪れていた。

「見た限りでは駆逐艦と巡洋艦……ですかね」

高本中佐が言い

「いや……俺達が知ってる艦ではないのは確かだ」

俺が言っていると

「初めまして、宗谷准将」

背後から声をかけられ、俺も翼も振り向き

「横須賀女子海洋学校の指導教官の古庄薫です、よろしく」

「よろしくお願ひします」

横須賀女子海洋学校から来ている古庄教官の立会の元航洋艦の査察を行う。

「なんとなく面影が・・・あきづき型に似てますね」

翼は言い

「ああ、だが違う。あきづき型に煙突の間にMk48VLSはなかったはずだ。」

俺は言い翼と歩みを進め

「古庄指導教官、一隻につき、どの程度の訓練生を乗艦し訓練を行うのですか」

質問すると

「ハイ、一隻に付きこのサイズの航洋艦ですと30名です。」

その数字にびっくりした。

「30?!」

その少なさに驚いた。俺達のいた時代のあきづき型護衛艦でも2000人の乗員がいた、それがたったの30人で操艦可能だというのは驚いた。

「こちらへ、艦内にご案内致します」

案内を受け艦内に入りながら話を聞き

「航洋艦についてはほとんどがオートメーション化が図られていますため最少人数での航行が可能となっております。准将が指揮を採ってらっしゃるイージス巡洋艦ですと200名の乗員で航海なさっているかと思いますが、当艦は一応は訓練艦ですので。」

説明を受け

「この艦にも三重の防御システムが？」

高本中佐が言い

「ハイ、それだけではなくエアバックも装備しております。被弾時の衝撃から乗員を保護するために装備しております。」

翼が聞いている中、疑問に思っていた事を聞いてみた。

「艦によってバラつきが見受けられるもののこの艦にはVLSが搭載されているようだが、前甲板にMk41がざっと見て32セルそして煙突間にMk48VLSが16セル、合計で48セルあるが整備性が悪くないですか？通常なら全て合わせて前甲板に32セル配備すればいいようにも感じますが」

少し意地の悪い質問を試してみた、これは俺達の時代で言う所の「むらさめ型護衛艦」がこの配置だった。恐らく同じ配置だろうが前甲板Mk41VLSには対潜戦闘用のVLAとSUMが配置されている。そして中間に配置されているMk48VLSにはESSM日本名で言えば発展型シーブローが配備されているはずだ。

「元々は防空駆逐艦だったのはつづき型をベースに本艦は建造されましたが、余りにも対空に特化しすぎて開発の途中からVLSを増設する事になり本来ならば准将が仰る通り一纏めにすれば良かったのでしようが、予算の絡みも生じ前甲板にMk41VLSをそして煙突間にMk48VLS mod4を16セル追加配置となりました。」

古庄教官は言い更に

「対空戦闘に特化した艦故に前甲板のMk41VLSは16セルにESSM用の弾庫にもう半分を対潜戦闘用にとなっています。Mk48VLSは完全にESSM用です。」

言われ、この航洋艦は完全に対空戦闘に全振りしてると言っても過言ではないと感じた。Mk48のESSM16発にMk41VLSでは1セルに4発のESSMが装備できる。つまり1セル4発として×16セルつまり前甲板ESSM64発＋煙突間のMk48VLS分16発を合計し

「艦対空ミサイルだけで80発・・・残りを対潜戦闘用に回しても16発。」

「比重が悪すぎますね、准将」

翼が言った。確かに比重が悪すぎる。48セルもVLSがあるならば通常考えても半々にすればいいのだ、 $48 \div 2$ としても24セルづつになるがそうなると対潜戦闘用に回せるアスロックが24発、残りを換算してもESSMが48発、まあ此処らが落と

しどころだろうな俺は考えている中

古庄指導教官は説明した。明らかに面影こそあるが違う。艦橋はあきづき型護衛艦なのだが兵装は「むらさめ型護衛艦」なのだ。まるで足して二で割ったかのような光景だ。

「兵装は前甲板から

62口径5インチ単装速射砲 そちら風に言えばMk45 5インチ砲ですな次

Mk41VLSが32セル これは対空・対潜戦闘用の共用です。

高性能20mm機関砲CIWS 准将や中佐もご存知の近接防空火器です。前後に1門ずつ

91式艦対艦誘導弾発射筒 対艦誘導弾になります。ようやく航洋艦にも回つて来た所です。

Mk48VLSが16セルこちらは対空用になります。

三連装式魚雷発射管になります。

そして各種電子装備 等を搭載しております。」

説明を受け

「成程ね……単に巡洋艦レベルと言うわけでもないわけだ。」

翼はいい

「航洋艦という名の訓練艦にしてはやたらと重装備のように感じるが」

俺も言うよ

「一旦外洋に出れば我々もいつも助ける事はできないですから艦長を筆頭とし皆で事態に対処せねばならないですから。」

その一言に俺は現場を早くから現場に近いような訓練を行っている事を感じた。そして俺達は横に停泊している艦を見て言葉を失った。

「や・・・大和型・・・」

俺達の時代では既にこの目で見るとは叶わない艦だ

「こちらの艦は優秀な生徒らが乗艦し直接指導を受ける艦です。」

古庄指導教官の説明に

「なる程な・・・ちらつと調べた事はあったが入試の点数順に配置される艦が決まる。成績のイイ者はこのやまと型2隻にそれ以外はこのはつづき型にという訳か。」

言い

「そのとおりです。」

古庄指導教官は答えるが

「だが直接指導を受ける者よりも自らの、チームとして危機に対処し解決できる者達の方が卒業する頃には入校時に優秀だった者を追い越す何て事はよくある。ペーパーな

んぞ個人個人の頭の出来を図るくらいにしか役にたちはしない。船乗りに必要な物は柔軟な頭だ。マニュアル通りの対処しかできないエリートよりも柔軟な対応ができるの方が現場では重宝される。最も現場よりも上層部に入り込むなんて言う野心家であるなら別だがな」

俺は言つた。これは自らの経験から得たものである。

「耳が痛いですね。」

古庄指導教官は言い

「すみません、あくまで個人的な感想ですよ。別に海上安全整備局の教育方針に意を唱えている訳ではありません。」

俺は言つた。そして最後に

「今日はお会いできてよかったです。真霜から結婚したと話があつたのでどのようなお嬢さんを迎えたかと興味がありました。まさか准将とは思いませんでした。」

古庄指導教官は言い

「妻を()存知で?」

聞き

「ええ、学生時代の先輩・後輩でした」

懐かしむように言い

「あの子の事よろしくお願ひしますね」

古庄指導教官は言われ俺も

「ハイ」

一言答えたのだった。

第53話〈受験戦争〉

宗谷家

「ただいま帰りました」

玄関を潜り軍帽を取り入ると

「お帰りなさい」

真霜が出迎えてくれる

「ただいま、そういえば今日の視察で横須賀海洋女子に行っただけでも真霜の先輩だって言ってた古庄指導教官とあったよ」

靴を脱ぎコート我真霜に持ってもらいつつ言い

「航洋艦の視察でしょ、説明担当古庄先輩だったんだ」

真霜は言いつつも後ろを気にしている様子だった。

「何かあったのか？」

尋ね

「あーえっと……うん貴方も「宗谷家の一員」だものね」

真霜は言い

「私が言うよりも見てくれた方が早いかも」

そういう俺の制帽とコートを持ったまま奥に行ってしまった。

「??」

思いつつも

「ただいま帰りました」

居間に入り

「お帰りなさい、優也さん」

義母の真雪さんと落ち込んでいる真白ちゃんそして

「お帰り兄貴」

真冬さんが出迎えてくれた、そして

「あ・・・あの優也お義兄さん聞きたいんですけども良いですか?」

真白ちゃんが言い

「ん?どうしたんだい?」

座り俺は言う

「えっとお義兄さんの世界での士官学校の入校時と卒業時のお義兄さんの成績ってどうでしたか?」

聞かれ

「えっと、防衛大学校のことか。入学・卒業は共に主席だし4年間主席の座明け渡した事はなかったかな」

答え

「がーん・・・私はやっぱり不幸だ・・・」

がつくりとうなだれ

「真冬さん何があつたんですか？」

聞くと

「これ、これだよ」

一枚の紙を俺に渡す

「なになに・・・」

ネクタイを緩めつつそれを見るとどうやら模擬試験の結果が表示されていたようだった。

「志望校 横須賀海洋女子学校、合格可能性ランク・・・E・・・」

結果から見れば可能性はかなり低い

「あれ・・・ちゃんと勉強してるのにこれは少し・・・変だな・・・」

言うと

「真白、優也にあれみせた？」

真霜が台所で作った夕食を運んできていた。

「おつ、真霜姉また腕上げたんじゃない」

真冬さんが言い

「そうね、真霜また腕を上げたわね」

真雪さんも言う

そんな中

「……これ」

真白ちゃんが俺に紙を渡すどうやら問題と答案のようだ。

「わかった、とりあえず食後に見てみる」

真白ちゃんから受け取った紙を脇に置き

「」「」「頂きます」「」

言い夕食を食べる。

「お、美味い」

俺は言い箸を食べ進める。

「ほんとに美味しいです」

栞菜さんも言っている。

「お仕事も大事だけでもあまり無理しないようにね、最近貫徹してるみたいだし」

真霜が言い

「すみません、つつい仕事がかどると我を忘れてしまつて」

言っている。俺達が結婚した後も彼女は皆と一緒に暮らしている。まるで最初から皆が一緒の家族のように。

食後

夕食を作った真霜と交代で食後の食器洗いが終わった後

「さて、じゃあ見てみるか」

答案と問題を見ると直ぐにその違和感の答えに気づいた。

「これ……回答欄と答え記入する場所がずれてるじゃないか」

言い

「はう……」

真白ちゃんが凹んでる。

「ちゃんと落ち着いてとけば問題ないのに」

「真白はそそつかしい所があるからね」

真冬さんと真霜に言われ

「確かに、これは俺も庇いきれないな」

答案を置き

「そ・・そんなあ・・優也義兄さん」

真白ちゃんが半泣き状態になるが

「でも、何とかできなくもない」

言いペンケースから定規を取り出し名前を書く欄に名前を書き問1を解く前に問2の解答欄を定規で隠しそして問1を解いたら次は問3の解答欄を隠し問2を解く。こうすれば記入ミスは防げる

「やってみると良い、こうすれば記載ミスは防げるはずだ。」

手本を示し、

「はい、ありがとうございます」

真白ちゃんは自室に戻っていった。

寝室

結婚後、彼女の真霜の部屋が寝室になった。かと言って居候時に使っていた部屋はと言うとそのままだ。仕事時にどうしても軍事機密上一人で行わないといけない場合の仕事の際やプライベートで使っている。

「今日もお疲れ様」

「互いに」

二人で言いつつ

「そういえば、査察の事だけでも……」

仕事の話をしようとしたが

「家でまで仕事の話をしなくてもいいじゃない」

と真霜に口を指で蓋をされ

「互いに共働きで少ない「夫婦」の時間なもの」

そう言い真霜は寄り添う。

「そうだね」

一言言い、時計に目をやると既に夜の11時を指していた。

「はあ……寝るのがもったいない……でも寝ないと明日の仕事に差し障る」

俺はため息をつきつつ言い

「今度互いに日程を調整して休みをとりましょう、ね？」

真霜は言い

「そうしよう」

俺は言いあくびを一つし

「じゃあ寝ようか」

横になり

「おやすみ」

「うん、おやすみ」

互いに言いベットにて眠りについたのだった。

深夜

「……………ん……………」

唐突に目を覚ますと

「……………動けん……………」

よく見ると真霜に抱き枕にされていた。

「……………すー……………すー」

規則の良い寝息が後ろから聞こえ

「ごめんね……………」

一言良いそつと真霜の手を離しベットから置き直後にトイレに行きたくなり。トイレに向かう。その途中、ドアが少し開いており、そつと覗くと

「ましろちゃん……………」

必死に問題集を解き勉強する彼女の姿があった。ああも頑張っている姿を見ると応援したくなってしまう。

用を足して手を洗いキッチンに向かう。冷蔵庫の中を見て

「ふむ……おかゆかな」

簡単に夜食を作りましろちゃんの部屋に向かい

「やあ、頑張ってるね」

部屋に入り声をかけると

「あ、義兄さんすみません気を使わせてしまつて」

言われるも

「はい、これお夜食頑張つて」

そっくり勉強の邪魔にならぬ様に部屋の外に出ると

「うお……」

外に真霜がいた

「ありがとね、妹に気を使ってくれて」

そつと部屋をのぞき真霜もいい

「俺にとつても妹だよ。受験上手く行ってくれる事を願うばかりだよ」

言い

「さて、今度こそ寝ましよう朝まで離さないんだから」

真霜は言い

「勘弁して下さい」
情けなく言う俺だった。

第54話～水上打撃艦隊～

第1艦隊司令部

「という訳で貴官を第1艦隊隷下第2水上打撃艦隊の群司令官に任命する」

大石司令に言われ、辞令所を渡され

「謹んで拝命致します」

俺は領き司令官より辞令書を受け取る。そして大石司令は

「君にとつても悪い話ではない。この先経験を積んでいけばそう遠くない将来に君に私も原少将も安心して艦隊司令・艦隊副司令の椅子を明け渡して退役できる。まあいわば後継者の育成と言った所かな」

言われ

「ハイ」

俺は頷いた。

「大石司令、艦隊の内訳は？」

尋ね

「おっと、そうだったなこれが内訳だ」

大石司令に書類を渡され目を通す

内訳

イージス巡洋艦DCG×1隻〔司令艦〕

イージス巡洋艦DCG—180〔はぐろ〕

イージス駆逐艦DDG×2隻

イージス駆逐艦DDG—178〔あしがら〕

イージス駆逐艦DDG—175〔はるな〕

多機能フリゲート艦FFM×2隻

多機能フリゲート艦FFM1〔もがみ〕

多機能フリゲート艦FFM3〔すずや〕

潜水艦SS

SS—511〔しょうりゅう〕

SS—512〔とうりゅう〕

渡された艦隊編成を見て

「最新鋭のFFM、多機能フリゲートを2隻もですか。てつきり汎用駆逐艦を付けるか
 と思ったのですが……」

言う

「その編成については上層部でも大いに迷ったが、旗艦の「はぐる」には共同交戦能力C E Cが装備されている。データリンクが全艦共に可能でアリ脅威に対処が可能かと思う。」

大石司令は言うが

「お言葉ですが司令、多機能フリゲート艦の装備はイージス艦や汎用駆逐艦にも劣りません。遠洋での長期に渡る活動が可能なかと意見具申させて頂きます。」

俺は言い

「ふむ……」

大石司令は頷き

「一度、指揮を執ってみると良いだろう。とりあえずは貴官の意見は受け取った。」

言われ

「了解しました」

言い、司令室を後にする。

自身のオフィス

「そうですか、まずはおめでとうございます。イイ事が重なりましたね。結婚に群司令官拜命と……」

翼は言いつつも言葉を切り

「ですが艦隊編成にFFMの多機能フリゲート艦ですか……」

翼にも艦隊編成の用紙を見せて言い

「見る限りでは、我々の時代のFFMと変わりはないようですがブルーマーメイドの哨戒艦と大差はあまりないようにも感じます。大丈夫ですかね」

翼も訝しむが

「まあ……一度指揮を実際に執ってみるとの事だったよ。」

俺は言い翼も

「陣形はどうします?」

言い

「ヘリ空機動部隊の輪陣形を参考にすればダイヤモンド型の輪陣形が妥当と私は判断しますね。「はぐろ」を中心として、潜水艦2隻を先行させたうえで、艦隊前衛にまずは多機能FFMフリゲート艦の「もがみ」を配置し「はぐろ」を挟むようにイージス駆逐艦の「あしがら」・「はるな」を配置し艦隊後衛に多機能FFMフリゲート艦の「すずや」を置く」

翼はボードに陣形を書いていく

「確かに、理屈ではそうだな」

言い

「この艦隊のキモはCEC搭載巡洋艦の「はぐろ」が要ですからデータリンクをメインに運用していく。つまりは「はぐろ」が万が一にも被弾、沈没すればその時点でゲームオーバーです」

翼は言い

「そうだな」

俺も頷く。共同交戦能力を利用し全艦の能力をフルに生かす戦い方をしなければならぬだろう。対空、対潜、対地、とだが懸念事項はやはりFFMが未知数と言う所だ。個人的にはFFMではなく汎用駆逐艦を配置してほしい所だがない物ねだりを言っても始まらない。

「とりあえず、はこんな所だ」

俺は翼に言い

「了解しました。」

翼と艦隊の運用について話し合いこの日の仕事を終える。

自宅

「ただいま帰りました」

玄関で制帽を取りコートを脱ぐ。

「お帰り」

真霜ニコニコと笑顔で迎えてくれ

「ただいま」

制帽とコートを預け家に入る。

「ただいま戻りました」

ダイニングに入ると

「お帰り、義兄さん」

「お帰り兄貴」

「優也さん、お帰りなさい」

なぜか4人や栞菜さんもニコニコとしている

「?」

思っていると、いきなりクラツカーが鳴らされ

「水上打撃艦隊群司令就任おめでとう〜!!」

クラツカーがさらに鳴らされ

「どこからその情報が……」

あんぐりとする俺を他所に

「ふふ、大石司令官と私は互いにパイプがあるからね」

何とお義母さんの真雪さんと大石司令がグルだったという

「なんと……こりやあまあ……」

開いた口がふさがらない。それを他所に

「司令の椅子はどうよ」

真冬さんに言われるが

「前途多難……かな？」

答え座る。

「あら、どうして？」

「ご飯を皆に盛り皿を置く真霜にも言われ

「艦隊運用に関しては心得ていますが、ちよつと……」

言葉を濁す俺に

「?どうしたのよ」

真霜に言われ

「いや……えつと、艦隊の構成はイージスが巡洋・駆逐合わせて3隻にFFMが2隻そ

して潜水艦が2隻の合計7隻からなる艦隊なんだが……」
言うところ

「？」

「？」

真白ちゃんや真冬さんは？を浮かべるが

「分かったわ」

真霜が言い

「私もですね」

真雪さんも言う。

「優也、そのFFMが何処まで通用するか未知数だから不安なんじゃないの？」

真霜は言い

「海軍の最新鋭艦ですね、多機能フリゲート艦FFMは」

真冬さんも言い

「ええ、水上打撃艦隊でフリゲートが何処まで通用するか、一抹の不安を払拭できない所が痛いです」

言い夕食の時間は過ぎて行つた。

寢室

「や……ゆ……ああっもう!!」

言われ

「うわあ?!」

振り返ると。パジャマに着替えた真霜が少し怒り気味の顔でのぞき込んでいた。

「もう、集中するのもいい事だけでも無視しなくとも良いんじゃない!!」

言われ

「ごめん、ごめん」

謝り

「まあ、しょうがないけれどもさあ」

真霜は言い

「多機能フリゲート艦FFMについて情報集めてるの?」

言われ

「ああ、そうだ。一応FFMって言う艦種は俺の時代にもあったが装備はどうかと思っ
てな」

答えた。俺の時代のFFMは海自が人員不足に頭を抱える中少人数で運用可能な艦
として開発されたのが多機能フリゲート護衛艦FFMだった。乗員は90名で武器シ

ステムもリモート操作が可能など高性能艦としては知っていた。だがこの世界のFFMはどうだろうか？一抹の不安が頭をよぎる、だが

「大丈夫よ」

真霜に言われ

「根拠は私達の哨戒艦のインデペンデンス級でも長期遠洋活動は可能だもの。海軍のFFM多機能フリゲート艦でも十分大丈夫なはずよ」

妻の真霜に言われ

「……そうか……そうだよな」

俺もあれこれと考える事は辞めた。事実FFMとはいえインデペンデンス級よりも装備が優れている事は推測は出来たからだ。

「うん、そうだよな」

俺は再度領き床に入るのだった。

第55話く多機能フリゲート艦FFMく

軍港

「……こいつが多機能フリゲート……か」

艦隊に2隻配備される多機能フリゲートの下見に訪れていたが

「!!」

フリゲート艦の近くでたむろしている乗員らが俺に気付いたのか慌ただしく動き始め艦から艦長と副長らしき人物が慌てて出て来る。

「事前にご連絡をいただければお向かいに伺いましたのに」

「心臓に悪いです、宗谷群司令官」

敬礼され、自身も敬礼し

「いや、自分の目で直に見てみたかったから来させてもらったんだ、済まないね」
言い

「失礼しました、私は多機能FFMフリゲート艦「もがみ」艦長の早川守中佐であります。
そしてこちらが……」

「副長の高橋進少佐であります」

2人が自己紹介し

「貴官らは既に聞き及んでいると思われるが・・・」

俺は言うとうと

「ハイ、准将の指揮下に入る事を光栄に思っております」

言われ

「どうぞ、司令艦を案内させて頂きます」

早川中佐は言い

「よろしく頼む」

俺は早川中佐を伴い艦内に入っていた。

「装備の説明をさせて頂きます、既に聞き及んでいるとは思いますが・・・」

基準排水量 4000t

満載排水量 5600t

兵装・62口径5インチ単装砲・1基

RWS・2基

Mk. 41 VLS 前甲板 (32セル) ・1式

近接防空火器CIWS・2基

17式SSM 4連装発射筒・2基

324mm3連装短魚雷発射管・2基

艦載機・SH-60K哨戒ヘリコプター・1機

C4I・OYQ-1 戦術情報処理装置

(リンク 22対応)

レーダー・OPY-2 多機能型

ソナー・OQQ-11 対機雷戦用ソナーシステム

OQQ-25 水上艦用ソナーシステム(VDS+TASS)

機雷戦

装備・無人機雷排除システム(USV+UV(OZZ-5)+EMD)

簡易型機雷敷設装置

電子戦・

対抗手段・NOLQ-3E 電子戦装置

と、装備の説明を受け

「……………どうやら謝らないといけないのは俺の方だな」

俺は言い

「チン」

早川中佐に高橋中佐は言い

「なに、私がこの艦を舐めていた事だ。水上打撃部隊にフリゲート艦が必要だろうかと疑問符だったんだ。だが実際に見て確信したよ艦隊でも遜色なくやっつけていけると」

俺は言い

「ありがとうございます。」

高橋少佐は言い

「して、司令は本艦らをどのように運用する予定で？」

尋ねられ

「うむ、今現状では艦隊運用についてはダイヤモンド陣形を予定している」

答えると

「となると……」

「艦長お読み通りかと」

2人は言い

「司令艦のイージス巡洋艦「はぐろ」を囲むような感じですかね」

早川中佐は尋ね

「その通りだ。「もがみ」には艦隊前衛を担ってもらおうつもりでいる。」

艦橋をみて答え

「我が艦を前衛に……」

早川中佐は言い

「そうだ、この水上打撃部隊のキモは私が指揮する「はぐろ」のCEC共同交戦能力がカギとなってくる。全艦でデータリンクし情報を脅威を共有する。」

言い

「新しい戦術になりますね、海軍でもCECを搭載した艦は「はぐろ」2番艦の「まや」とまだ少ないですからね」

早川中佐は言い

「しかしCECによる共同交戦能力は全く新しい戦い方になりますね。司令艦が得た情報を全ての艦でデータをリンクする。」

高橋少佐は言い

「本艦隊は試験的な意味合いもあるのだろう。データリンクでどこまで通用するかと言う事も兼ねているのだろう。これで成功すれば新しい戦術にもなるだろう。」

俺は2人に言い

「成る程、分かりました。」

早川中佐は頷く。

「ちなみに陣形についてだが、多機能フリゲート艦FFMの2隻は前衛と後衛にそして

両サイドにイージス駆逐艦を2隻配置する案を今は検討している。」
伝え

「我が艦「もがみ」を前衛に配置し後衛に「すずや」を配置するそして両サイドにイージス駆逐艦を2隻ですか」

2人とも頷き

「あくまでこれはまだ試験段階だ。結果次第では陣形を変える事もある。」

答え

「分かりました」

早川中佐が言い

「！」

時計を見た高橋少佐が

「.....」

早川中佐に耳打ちをし

「確かに」

言い

「群司令、よろしければ今日の夕食は我が艦で乗員の皆と如何でしょうか？」

早川中佐は言い

「……………」

少し考え

「そうだな、乗員と親睦を深めるのも大事だ」

言い

「今日は金曜日です、本艦の海軍カレーを是非ご賞味下さい」

案内され食堂に行くとき乗組員の皆が俺を見てギョツとしたような表情になるが

「楽にしてくれ、今日は乗員の皆と親睦を深めたいと司令が仰って下さった」

早川中佐は言い乗員らもほっと胸をなでおろしている。俺も列に並びトレイにカレーが盛られた皿を受け取り用意された席に着く。

「司令自らでなくと言って下されば、配膳は行います」

隣席の若手の将校に言われたが

「あいにくと人にやらせるのは性に合わなくてな、できる範囲の事は自分でやる。それに階級なんて関係はない。」

その答えに

「司令は他の将官とは全く違うタイプなのですな」

言われ

「なんでもかんでも部下にやらせて押し付けて失敗すれば部下を叱責する。旧海軍から

の悪い伝統だ、司令官の責務は艦隊の全行動に全作戦行動に責任を持つ事。それが出来ないヤツに司令官を名乗る資格などない。」

答えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

早川中佐や高橋少佐も俺を見ている。

「せつかくの夕食だ、冷めないうちに頂こう」

俺は乗組員皆を見回して言い

夕食を取る。そして少し艦の乗員らと話したりなどしたのち艦を離艦した。

「今日は悪かったね、押しかけた上に夕食まで頂いて」

言い

「いえ、とんでもありません。またいつでもいらして下さい。」

言われ港を後にした。

早川中佐・高橋少佐 side

「かなりお若い司令官でしたけれどもとても人格者な方でしたね」

高橋少佐は言い

「ああ、そうだな。艦隊の全作戦行動に責任を負うのが司令の務め……あそこまで言い切れる人は私の知る限りでは大石中将閣下や原少将閣下しか知らない。」

早川中佐は言い

「ああいった司令官なら俺達は安心してついてゆけるな……」

言い

「ハイ、私も同意見です。」

優也を見送った兩名は呟いていた。

第56話〈調査命令〉

艦隊司令室

「ジャミング……ですか」

司令室に呼ばれた俺は大石司令に言われ

「うむ、官民間わず船舶等の電子装備で影響が出てる。」

大石司令は言い

「ですが、この海域においてはそんな施設やまして、諸島も……！」

俺はハタと気付き

「まさか……」

思うも

「その海域では海底火山の噴火で島が出来つつある。まさかとは思うがな」

言う

「そこでだ、編成されたての艦隊で調査に当たってほしい。」

大石司令は言うが

「ですが潜水艦含む7隻の艦隊組んでまでの大掛かりな調査が必要でしょうか？必要に

応じてやらける、もしくはFFMフリゲートはどうでしょうか？」

俺は言い

「万が一と言う事もある。ここは1つ頼めんか、宗谷准将」

上官にそう言われればNOとは言えない。

「了解しました。第2水上打撃艦隊は調査任務に就きます。」

言い敬礼し

「電子機器だけではなく貴官のような柔軟に対応できる人材が今後にも必要になる。頼むぞ」

大石司令は言った。司令室を出て翼に

「各艦の艦長と副長を集めてくれ、顔合わせがてら本艦隊に下った命令を皆にも説明する。」

翼に言い

「了解しました」

翼は言ったのだった。

会議室

第2水上打撃艦隊

イージス巡洋艦「はぐろ」

艦長兼群司令 宗谷優也准将

副長 高本翼中佐

イージス駆逐艦「あしがら」

艦長 永峰頼人中佐

副長 藤田明人少佐

イージス駆逐艦「はるな」

艦長 工藤健人中佐

副長 田中昭三少佐

多機能F F Mフリゲート艦「もがみ」

艦長 早川守中佐

副長 高橋進少佐

多機能F F Mフリゲート艦「すずや」

艦長 山野成智中佐

副長 浜田寛治少佐

S S—511「しょうりゅう」

艦長 中山徹中佐

副長 岡崎雄二少佐

SS-512 「とうりゆう」

艦長 速水遠矢中佐

副長 永田栄一少佐

各艦幹部が揃っており

「司令官入られます、敬礼ッ」

永峰中佐が号令をかけ、皆が敬礼する

「休め、着席」

俺は言い皆が着席したのを確認し

「諸君も聞き及んでいるとは思いますが、本艦隊の最初の記念すべきファーストミッションが決まった」

俺は言うど皆が互いに顔を見合わせる。そんな中

「宗谷群司令、任務は何でしょうか？もったいぶらずに教えてください」

「すずや艦長の山野中佐が言い、プロジェクターで海図を映し

「本海域で電波障害が起きてるのは聞き及んでいるな」

俺は皆を見回し、各艦の艦長、副長共に頷く。

「その被害は深刻で官民間わずに電子機器に影響が出るほどと報告を受けている。そして我々第2水上打撃艦隊の任務はその電波障害の調査にある」

説明し

「成る程、確かに司令の言う通りだな。」

「ああ、ジャミングの範囲が分かればその分その海域を航行規制を賭けてあとはゆつくりと時間をかけてなぜそうなったのか調査すればいいわけだしな」

「だが同時に我々も各艦の電子装備がお釈迦になる訳だ。レーダーや艦隊のキモとも言えるCEC共同交戦能力にも影響が出る事が推測できるな」

各艦艦長らが話す中

「出航は2日後、各員共に準備や家族に愛車のハーレーに別れを告げる洋上での生活が始まるぞで」

俺は言ったが

「司令も新婚のはずでは？」

とうりゆう艦長速水中佐が言うも

「まあそうだな、俺も奥さんに当分帰りませんとでも言っておくさ」

言い

「奥さんに殺されないで下さいよ司令」

笑いが会議室に響いたのだった。

「それでは解散」

俺は言い各艦の艦長・副長が出て行き、室内には俺と翼が残されるが

「ジャミング・・・やっぱり不自然ですよね・・・」

翼は言い、更に

「海上安全整備局の差し金では・・・あつ・・・スミマセン」

翼は謝り

「気にすんな、この世界に来てかからは海保のような組織にずっと狙われていたからな

俺達は」

俺もげんなりとしたように言っていると

「コンコンコン」

ノックが聞こえ

「入れ」

言うと

「失礼します」

なんと入ってきたのは真霜だった。

「なんだ、脅かすなよ．．．まったく．．．」

俺はさらにため息をつきつつ言い

「それはこつちのセリフよ、それと高本中佐ご挨拶ね、ジャミング装置を設置して私達に何の得があるのよ」

真霜は言い

「まあ疑いたくなる気持ちも分かるけれどもさ」

言い

「その海域に行くのね」

海図を見て真霜は言い

「ああ、一応は調べてからどこまでがジャミングの範囲なのかを報告するつもりだ。」

答え

「．．．．．」

真霜は海図を見て

「大石艦隊司令もやはり此処が怪しいと」

海底火山の影響で島が形成されている所をさして言い

「ああ、西ノ島だな。」

俺は言った。今日の業務を終え、艦隊の出航に備えようとしていた矢先に横槍が入る

事になるとはその時の俺は知る由もなかった。

第57話〈情報交換〉

宗谷家

ダイニング 夕食

「電波障害?」

夕食中に真霜が真冬さんに真雪さんに言う

「ハイ」

俺は頷き

「本艦隊に調査命令が下りて明後日、海域へと派遣される予定です。」

俺は答える。

「あの海域は最近からだよな電波障害が起きるようになったのは」

真冬さんが言い

「あそこは私達でも行かないわな」

言い

「そんなに電波障害が酷いの?」

真白ちゃんが言い

「官民間わずに電子装備に影響が出てると報告を受けてるね」

答え

「優也さん、流石に今回は危険が伴うわね。電子装備が狂う事を前提とすると」

真雪お義母さんが言い

「兄貴、艦隊陣容は？」

真冬が言い

「イージス艦が巡洋・駆逐で3隻・多機能FFMフリゲートが2隻・潜水艦が2隻」

答え

「なんか・・・凄い内容ですね・・・」

栞菜さんも言い

「一応、情報解析艦も随伴する予定です」

言う。

「でもかなりの打撃能力を持った艦隊布陣ね。イージス艦に多機能FFMフリゲートに

潜水艦にと」

真霜も言うが

「でもよ、兄貴のイージス巡洋艦がCEC機能積んでる訳だろう。CECが使えない事を前提とすると万が一にでも西ノ島に武装勢力が上陸していてそこで悪さしたらど

う対処する？」

真冬に聞かれ

「そこは「奥の手」を使うさ」

答え

「ハア・・・またあの手を使う気？」（第31話参照）

真霜にため息をつかれ

「真霜ねえ知ってるのか？」

真冬は尋ねるも

「ええ、でも海軍の機密事項に抵触するから私の口からは言えないわ」

言い

「なんだよお、そういわれると余計に知りたくなるじゃないかよお」

真冬が知りたがつてるがその手を言う訳にも行かない。

「まあしようがないけれども、今の所はあの海域は魔の海域ね」

真霜に言われ

「怖い怖い」

夕食が終わり各々が自室に戻る中、久しぶりに居候時代に使っていた部屋で海域の情報をあれこれと集めていたが

「うーん．．．決め手となる情報がないな．．．なんでだ」

首をかしげると同時に人為的な物を感じた。その頃

????

「不味いぞ、海軍の水上打撃艦隊が例の海域に調査艦隊を送ると」

それを聞いた

「何？」

もう一人が言い

「電波障害がおこると聞いた時からまさかとは思っていたが．．．」

「だが今あそこに海軍の調査艦艇に行かれるのもマズイ。」

「艦隊の規模と指揮は誰が？」

周りも男達も言い

「艦隊規模はイージス艦が3隻に多機能FFMフリゲート艦が2隻に潜水艦が2隻です」

もう一人が

「えつと．．．艦隊群司令は．．．宗谷優也海軍准将です」

それを聞いて

「マズイ、まずすぎる、彼に知られれば必然的にブルーマーメイドやホワイトドルフィンにも知られる。あの研究は極秘で行われていたのだ。軍やブルーマーメイドにホワイトドルフィンに感ずかれるわけにはいかない」

言い

「何とか上層部より海軍に圧力をかけて調査を中止させます」

1人は言うも

「不自然に動けば宗谷准将は勿論の事艦隊司令の大石中将も海軍全体で不審がるだろう。何か……手は……」

そういう中

「欺瞞情報を流しては？」

椅子に座る1人が言い

「幸いにもあそこは海底火山があります。艦隊の布陣には潜水艦もあるようですから海底火山の偽情報を流し艦隊の安全確保の為に中止にするように差し向ければいかと」
水面下に置いて海上安全整備局内の海洋研究機関がこの件に絡んでいるようだがそれを知る由もなく……」

第58話～調査中止と別命派遣～

海軍基地

優也オフィス

「何?!中止!」

オフィスに入ってきた翼が言い

「ハイ、小耳にはさんだ程度なので大石総司令に確認を取りませんと何とも言えませんが」

翼は言った。

「分かった。各艦の艦長・副長にはまだ通達はしないでくれ。」

翼に言い

「了解です、司令」

了承した旨を翼は言い俺はその足で艦隊総司令官たる大石司令のオフィスに出向く

コンコンコン

「入れ」

大石司令の声が聞こえ

「失礼します」

入ると

「話が早いな、もうそこまで伝わったか・・・」

頭を掻きつつ大石司令は仰り

「と言う事は・・・」

俺は言い

「事実だ。調査については中止となった。何でも海底火山の活動が思ったよりも活発になり始めているとかで艦隊で接近するのは危険と見做された。無論上陸調査などもつてのほかだともな」

大石司令は言い

「そうですか・・・まあ上がそう結論づけたなら仕方ありませんが」

俺は頷きつつ言い

「すまんな、宗谷准将」

言われ

「了解しました。では正式に艦隊の各艦長や副長にも通達しておきます。」

俺が言ったが

「いや、通達は私からしとくよ。それよりも貴官と高本中佐には明日、海上安全整備局の

宗谷真霜1等保安監督官と共に横須賀女子海洋学校に向かつてほしい。」

唐突な指示に

「はい?!」

言つてしまい

「今年行われる実習の前に航洋艦について相談があるとの事だな、済まないがもう宗谷校長にも最高の人材を派遣すると言つてしまったから1つ頼む」

言われ

「上官命令では断れませんか、して相談内容とは?」

聞き返し

「それについては現地での事だそうだ」

言われ

「まあ・・・ハイ・・・分かりました。」

そうしてオフィスを出て、

「〔航洋艦からみの相談ね・・・〕」

いまいち釈然としなかつたその後、艦隊乗員らには今回の最初の任務が取り消された事が告げられ、俺は翼に明日の事を言い

「分かりました、ですがなんですかね・・・」

翼も訝しみ

「まあ現場に行ってみてからだそうだからな」

俺は言った。その頃

横須賀女子海洋学校

「宗谷校長、それで大石司令は」

古庄指導教官は言い

「ええ、優秀な人材を派遣して下さいとの事よ」

真雪は言い

「しかし、海軍の方を御招きして助言を頂きたいとはどういった部分で？」

古庄指導教官は言い

「そうね、はつづき型の1番艦「はつづき」2番艦「あきづき」3番艦の「てるづき」の3艦の装備についてかしらね。貴方程なら分かると思うけれども」

宗谷校長は言い

「この前査察に来られた宗谷准将も仰っております。比重が悪すぎると」

古庄指導教官は言い

「その通りね、VLSが48セルもあるならば効果的な配分があると思ってね。あのままだと対空戦闘に全振りしているものね」

言い

「成る程、だからですか・・・海軍の方を招きVLSの装備についてご意見を貰うと」

古庄は真雪に言い

「ええ」

真雪は言いつつも

「流石優也さんね、話を聞いて直ぐに装備の比重の悪さに気付くのは。」

呟く。そこに

「そう言えば、宗谷校長ここからは完全にプライベートになります。真霜夫婦はうまくいってるんですか?」

古庄は言い

「ええ、優也さんは料理も家事もなんでもできるから本当に助かってるわ。まあそれに真霜が刺激されていまじや二人でうちの台所を仕事に合わせて交互に支えてくれるようになったし、まあ優也さんのお陰で肩の荷が一つ下りた所ね」

真雪は古庄に答え

「良いお婿さんを迎えましたね。ほんとに良かった。」

言い

「ホント、真霜には勿体ないとも思えるくらいだわ」
2人で話していたのだった。

第59話く海軍とブルーマーメイドく

翌日、横須賀女子海洋学校前では海軍から派遣される人員を迎える為に職員が主だった職員が集まっていた。

「古庄先輩」

真霜は声をかけ

「いよいよ今日ね、一体全体どんな人が来るのやら」

真霜と古庄は言い

「緊張します」

真霜も言う中、教職員らが整列する中一台の黒塗りの車が向かってきた。

「来たわ、海軍の将校の方の様ね」

「頑固者じゃないと良いけれども」

真雪や古庄は言い、皆が整列する中車が止まり、車から降りてきた二人の将校を見て驚いたのは真霜と真雪の方だった。

「大石司令長官の命で派遣されました、宗谷優也海軍准将です」

「同海軍中佐、高本翼です」

俺と翼は敬礼し、最初こそあつげに取られていたが全員が敬礼し迎えてくれた。そして学校の校舎内の通路で

「優也が来るなんて聞いてないわよ。」

真霜が言い

「悪い、事前に知らせておくべきだったな」

俺は言い今度は

「今日はよろしくお願い致します、おか・いえ宗谷校長」

真雪さんに言い

「古庄指導官も」

俺は挨拶し会議室に入った。そして、全員が席に着席し議題となったのは航洋艦の装備の一つ「VLS」についてだった。説明を受け

「ふむ……」

「成程……」

俺と翼は考え込む。対空戦闘に全振りの装備をいかにバランスよくとなるとこれが結構大変だったりする。

「高本中佐、確かあの3艦はVLSが合計で48セルだったな」

俺は言い

「ハイ、そうです准将」

翼は言い

「現状だと対空ミサイルだけで80発、対潜ロケットのASROCが16発、対艦ミサイルが全部で8発、元々が防空駆逐艦だからしょうがないと言えましょうがない」

俺は資料を見て言い

「ですが准将、これでは対潜・対艦能力が余りにも低すぎる」

翼も言う。そして俺は

「そちらとしては、どのようにVLSの配置変更を検討しているかをお聞きしたい」

問い

「ハイ、それに関しては、一言で言えば「マルチロール」に」

宗谷校長は言い、翼が俺に耳打ちし

「これ結構厳しい案件ですね、あれをマルチになんて」

翼が言う中

「かなり無理を言って下さる、VLSが48セルあるが、16セルはMk48VLSで既にESSMで埋まってる残りのMk41VLSの配置を見直すしか方法はない。」

俺は周りに言い

「准将にお伺いしますが、准将としてはどのように？」

古庄教官が俺に問い

「私でしたら、既に16発のESSMがある事を考慮しつつ、この艦に装備・配備されているMk41VLSであればESSMは1セルに4発は装備できるそれを考慮したうえで以下のようにします」

俺は言い、自分の考えを提示した

前甲板Mk41VLS 内訳

10セル40発のESSMを装備

22セル22発のVLAを装備

煙突間Mk48VLS 内訳

16セル16発のESSMを装備（固定）

提示し

「VLSの対潜兵装が22発と少なく感じるかもしれませんが、そこは3連装短魚雷発射管が2基装備されている事から全部で28発分カバーが可能かと思えます」

俺は提示した。丁度、ESSMが56発、ASROCが22発+短魚雷が6発で28発バランスはとれる計算だ。そしてもう一つは翼が提示した。

「これはかなり無茶ぶりかと思われませんが、Mk48VLSを撤廃しそこにMk41VLSを増設する案です。そうすれば拡張性は増します。」

プランを2つ提示した。だが翼が言ったのは現実的ではないと俺も翼本人も解っている。Mk48の撤去やそこにMk41が増設できるかと言えば限りなくNOに近い。つまりはいわずもがなと言う事だ。

「我々としては前者を推しますね、増改築の手間もなく中身を調整すればすぐにも教育実習に出られる。後者となれば果たして増改築で済むのか発射は可能かなど手間と予算がいくらあつても足りない」

説明する。その他はそこまで苦勞する事がない。特にこのはつづき型は船体を大きくし排水量を増加させた結果駆逐艦レベルの物が巡洋艦レベルの物になってしまったこと、そして装備を後付けした事がたつてしまったのだ。

「成る程……」

宗谷校長は考え込み

「校長、私は前者を推しますね」

教頭は言い

「理由は？」

校長が尋ねる中

「この配置は理にかなっている、対空・個艦防御に対潜・対艦と対処が可能です。それに後者では予算の都合やこれ以上の装備の解体や後付けはやはり船体に負荷をかけま

す。」

教頭は答え

「私は半々ね」

以外にも宗谷1等保安監督官は言った。

「理由としては「はつづき型」は確かに1番艦から3番艦までは巡洋艦クラス、きちんとした装備の線引きを図るべきと言う所と整備性を考慮した時に装備は統一していた方が何かと便利ではあるわ」

真霜は言った。これは俺も翼も思っていた事だった。イージス艦らの艦艇のように前甲板と後甲板にそれぞれMk41VLSを配備すれば整備性と装備の統一は取れる。だがそれは予算が追加でいくらかかるか分からない事を指している。

「予算の兼ね合いを考えると難しい所ね。やはり」

古庄教官も唸りつつ言っている。

「(悪い意味での半端な巡洋艦クラス見た事ないですよ、准将)」

あれこれと話し合ってる中翼が言い

「(ああ、正直言えば一度あの3隻を除籍・解体して新規に造船しなおす事を俺なら進言するわな、だがレーダーシステムとかが高コストなFCS—3Aを使つてるとなればそう簡単に解体する訳にも行かない、解体・建造のコストもバカにならない)」

互いに耳打ちをしあう。あれこれと話が進む中、結論はそう簡単にはつかないかと思えたが意外にも

「前者の案を採用」

と言う形に落ち着いた事に俺も翼も驚いた。因みに理由としては

「直ぐに改装を手配する事は不可能。既存の装備の配置を見直す事でコストのかからない方法を選択するにはこれしかない」

事から既存の Mk 41・Mk 48 の両 VLS の中身を調整する事で装備のバランスを見直す事で一応の結論が付いたのだった。因みに

「お二人から見てあの3艦はどう思えますか？」

の問いに俺と翼は口をそろえて

「アレを巡洋艦と言って良いレベルなのかは疑問符が付く、俺達ならば上に対して除籍・解体を具申し、新規に1から造船しなおすべきと具申するかなあ・・・」

答えたのだった。こうして今後の方針がまとまった事により話が進むことになる。